

MOTHER AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.78|2015-4

世界の児童と母性

[特集] 養育周辺の厚み—子どもをみつめる豊かなまなざし

特集 養育周辺の厚み

—子どもをみつめる豊かなまなざし

ひとこと / 編集委員長 横堀 昌子 …… 1

I. 総論—“周辺の厚み”の意味を考える

- さまざまな人に支えられる子どもの育ち—“周辺の人々を考える”
子どもの育ちを支えるもう一つの視点
……………北翔大学大学院 客員教授、日本臨床心理士会会長 村瀬嘉代子 …… 2
- “周辺の厚み”がもたらすもの
……………児童養護施設 川和児童ホーム 臨床心理士 内海 新祐 …… 6

II. それぞれの“周辺の厚み”

- まなざしはその人の想いを語る
……………立正大学 副学長 大竹 智 ……10
- 学校・地域と施設をつなぐCAPの役割—にじいるCAPの活動を通して
……………社会福祉法人 三光事業団 理事長、NPO法人 CAPセンター・JAPAN 理事長 側垣 一也 ……16
- 治療施設における「異文化空間」の意味—「学びの場」で子どもに寄り添う
……………広島市こども療育センター 心療部長、情緒障害児短期治療施設 愛育園 園長 西田 篤 ……22
- かけがえのない人材が「つなぐ」日々
—二つの施設の内側にある、養育を支えるまなざし
……………青山学院女子短期大学子ども学科 教授 横堀 昌子 ……26
- ふつうのおばさんの滋味
……………児童養護施設 川和児童ホーム 臨床心理士 内海 新祐 ……39

III. 国内外の動向

- なぜ、親たちとつながることができるのか
—「大阪子どもの貧困アクショングループ(CPAO)」見聞記
……………ルポライター 杉山 春 ……43
- イギリスでの子育て—さまざまな支援に支えられて
……………サウサンプトン大学 非常勤講師 土屋明日香 ……47
- 子どもの声を届ける仕事—子ども・若者アドヴォキットの近年の活動から
……………関東学院大学社会学部 准教授 澁谷 昌史 ……52

IV. 特別座談会

- “周辺の人々”が問いかける「専門性」……………58
- 出席者(50音順) 河尻 恵 (児童自立支援施設 福岡県立福岡学園 児童自立支援専門監)
西田 篤 (広島市こども療育センター 心療部長、情緒障害児短期治療施設 愛育園 園長、本誌編集委員)
摩尼 昌子 (乳児院 ドルカスベビーホーム 施設長)
安川 実 (児童養護施設 聖霊愛児園 統括施設長)
 - 司会進行 横堀 昌子 (青山学院女子短期大学子ども学科 教授、本誌編集委員長)
 - オブザーバー 内海 新祐 (児童養護施設 川和児童ホーム 臨床心理士、本誌担当編集委員)

編集後記 / 担当編集委員 内海 新祐 ……69



ひとこと



編集委員長 横堀昌子

通勤電車の車窓から見えるやわらかな緑とひらき始めた花々。希望に胸ふくらませ、新たなステージへと向かう子どもたち。そのそれぞれの家族の笑顔が、これからに向かって輝き出すようにと祈る春です。

ふだんは急行で通り過ぎてしまう小さな駅の近くに、日本民藝館があります。晴れの日には陽ざしの中で、雨の日には雨にうたれ待っている建物と展示物。生活に根ざし、各地で人々の暮らしや地域の誇りを支えてきた「実際に用いるものたち」が放つ、静かでたしかな存在感。しばしたたずむと、生活の力強さや奥深さ、暮らしを支えてきた文化の厚みが、しみてきます。名の知れた芸術家のアート作品という位置づけではなく、すでにそこにあったものたちの価値に気づくひととき。それらに支えられ生きた人の存在した証し。そして、そうした一つひとつに光をあて関係者と対話し、各地で収集した人たちの思いに近づきたくなのです。

こうした市井の職人たちが生み出した手仕事の美しさを「発見」し、その美を「民芸(民藝)」と名付け、芸術のプロフェッショナルリズムに決してひけをとらない新たな美の概念として世に発信した柳宗悦。彼は無名の人たちが生んだ日用の雑器にこそ、用と美が一致した至高の美しさが存在すると考えたのでした。

今号の特集は、そんな視座にも少し通じるものがあると感じます。社会的養護をはじめ養育の営みの重ねられる場で、子どもたちは、どんな出会いや出来事、生活のしつらえの中で、結果として、育ち、育てられているのでしょうか。今回は、直接子どもを担当する養育者による養育の営みを、まずは円の中心(コア)として位置づけてみます。すると、その「周辺」に、施設であれば施設の中に、要はすぐ近くに、養育をサポートする体制や人、動きがあるでしょう。一方、養育の中に豊かに発揮されるのは狭義の「専門性」ばかりではありません。組織の外を含めたさまざまな人の見守りや接点にも、さりげない「下支え」があるように思います。真の専門職とは、自らの仕事の中にもある「専門性を支えるすそ野」に気づき、大きな意味での環境や関係者の果たしていることの意味を心に宿し、当事者と「周辺」との接点を活かしていこうとするセンスをもっている人なのかもしれません。「高度な専門機能の発揮」「専門職の連携・協働」が時代のキーワードとなっていますが、人間の育ちは、公的な記録に残せる「意図的かわり」だけで構成されてはいないものです。小さいけれどやわらかで大事なかわりがあることに目を向け、「いい味」を加えてくれている人たちに光をあてる冒険をしてみたい。そう話し合っ立って今回の特集です。

さて、この号をもって、西田篤・有村大士両編集委員とともに、編集委員長の私は任期を終えます。3.11以後のこの時期、子ども家庭福祉は何をとらえ、何をすべきか。さまざまな当事者に耳を傾け、厳しくも存在する新旧の諸課題を確認する一方、具体的な取り組みの中に芽吹き始めた今後の方向性、希望のきざしをどう描くか、毎号模索してきました。私自身の働きは小さなものでしたが、他の編集委員や事務局の方々の知見や知恵をいただきながら語らい歩む道すじは、豊かなものでした。いただいたこの体験に感謝し、バトンを新体制にお渡しします。ありがとうございました。

I 総論—“周辺の厚み”の意味を考える

さまざまな人に支えられる 子どもの育ち

—“周辺の人々を考える” 子どもの育ちを支えるもう一つの視点



北翔大学大学院 客員教授、日本臨床心理士会会長 **村瀬嘉代子**

この特集のような視点から子どもの育ちを考えるという企画は寡聞にしてこれまであまりなかったように思う。だが、私はかねてから心理臨床の営みを通してはもちろん、一人の市井の民として、このテーマは非常に大切なことだと考えてきた。心理療法やカウンセリングの事例や経過は主として、クライアントと支援者の二者関係を中心にして、その関係を通してクライアントの治癒成長が生じたという表現がなされることが多いように思われる。しかし実際には、クライアントを囲むさまざまな人やことがクライアントの治癒成長の契機として影響を及ぼす場合が少なくない。私はこういう周りの人々やことがよい効果をもたらすように時にはほどよいアレンジメントが大切だと考え、実践してきた。支援者はいわばコンダクターの役割をとることも状況に応じて必要なのだと言えよう。

ところで、戴いた標題「周辺の人々を云々」という表現はどちらかという専門家視点であり、子どもの視点からすると、ある場合、忘れがたい本質的なことを学んだ、あるいは自分の存在の根幹を保証されたというような貴重な経験を周辺とされる人との出会いによって得る場合が少なくないように思われるので、それを標題に反映させて戴いた。以下、いろいろ異なる角度から例を挙げながらこのテーマについて考えてみよう。

個人的経験で恐縮であるが、幼い日の忘れがたい

学びの経験がある。それは丁度5歳になったときであった。当時は人通りの多い街頭にしばしば乞食が居た。中には子連れで、石畳に座り頭を垂れて物乞いしていた。そういう場を通ると私は自分の暮らしと比べて、文字通り胸が痛む思いがし、病弱の故も加わって次第に外出を喜ばなくなった。

ある昼下がり、内玄関のベルが鳴った。手伝いのつもりで出てみると、乞食が立っており、深々と頭を下げた。私は咄嗟に地方に暮らす祖母から腕輪のように白銅貨を紐通したのを貰っていたのを思い出した。小走りに自分の部屋から持ち帰って幾枚かの白銅貨を乞食に手渡した。乞食は深々と頭を下げてから足早に去った。少しばかりいい気分になっていると後ろからお手伝いさんの文さんの声。「お子様なのに、ご自分のお金だからとってみだりに恵むということをするものではありません。あのお金はご自分の力で得られたものではありません。もとはお父様、お母様のものです。乞食の中には働ける人もいます。中途半端な優しさは人の働く気持ちを失わせます。それにまだお子様です。子どもは子どもの身の程を知らなければなりません」。意味がすっと飲み込めた。雷に打たれたような衝撃と恥ずかしさで一杯になった。「今日のご存じなくてされたことですから。お父様、お母様には内緒に致します。お話したことおわかりですね」。うなずくと文さんは黙って抱きしめてくれた。

文さんは当時21歳くらいであったろうか。実科女学校卒で、3歳年下の妹さんの幸さんと二人で家事見習いを兼ね住み込んでいた。料理、裁縫、その他家事全般、てきぱきと何をして上手で、母の言葉に耳を傾けているときや、夜、仕事を終えて後に本を読んでいるときの表情は引き締まっており、私と遊んでくれるときは活き活きとして表情豊かな人であった。

後に、心理療法の原則、心理支援の基本を書物や講義で学んだ時、それは幼い日に文さんから伝えられたことと表現は違うけれど、本質の本質は同じであることに気づいてはとした。相手の自尊感情、自律心や自立心を大切に。適切な心理的距離を維持する。自分が引き受けられるか否かの責任性に基づく見立て、支援者の自己覚知…、これらはあの時の文さんが伝えようとしたことと通底している。文さんの言葉には本質が凝縮されていたのだ(文さんの言葉は母の考えの正確な反映でもあったのだが…)。人を支援する営みの基本となることを遠い昔に教えられていたことに気づいて、懐かしさと感謝、そして、この学びを今後の営みに生かしていこうという気持ちが湧き起ってきたのであった。

文さんの言葉が幼児の私に伝わり、意味が分かったのは、幼なごころに文さんは若いのに家を離れて住み込みで働き、自分の力で生きており、その生き方が偉いと尊敬できたこと、しっかりしていると同時に優しい文さんのことが好きだったこと、両親、とりわけ母の考えと文さんのそれは元は同じであることなどなどの条件が揃っていたからであろう。母がお世話して幸せな結婚をされたのに、戦時下の空襲で亡くなったと聞かされた時は大泣きしたのを覚えている。学歴や職業にかかわらず、人は人として立派でありうるということを文さんは感得させてくれた人でもある(2010)。

優れた子どもの心理療法家バージニア・M.アクスラインは自らの事例をもとに一人の孤独な自閉症

の少年が彼女のセラピーによって癒されていく過程を一書(2008)に著したが、この中にだれにも繋がりを持たず自室に籠る自閉症とされる少年に、庭師のお爺さんが少年にさりげなく人としての繋がり糸口を創るくだりがある。庭師は一枚の木の葉を少年に手渡し、「この木の葉は風に吹かれてアメリカから大西洋を渡って欧州へ飛び、あちこちの国を風に乗って巡り、いろいろな風物にふれて、再び大西洋を渡ってアメリカへ帰ってきたのだよ…」と語りかける。少年はその木の葉を手にして、世界を思い描き、少しずつ人やこと、家族との繋がりを持ち始めるのである。もとよりアクスラインの心理療法家としての影響力が中心ではあったであろうが、この庭師のお爺さんのさりげない振る舞いと語りかけはこの少年が世界へと開かれていくうえで絶妙な影響をもたらしている。

小学4年生の自閉症のK君は漸く学習にも手が付き始め、彼にかかわる人々はその進歩を喜び、少々過ぎるくらいの励ましが始まった。やがて、K君の帰宅が遅くなりはじめ、母親は道草して何か問題行動をしているのではないかと来談された。K君は依然学級で孤立し、帰宅しても、干渉好きなアパートの家主にいささか過剰に注意され、くつろげていないのではとふと考えた。私は母親に咎めるような口調で問い質すばかりではなく、下校するK君の後をそっと後から歩いてみたらと提案した。下校路の途中に小さなクリニックがあり、そこの薬局の窓は道に面して、薬剤師さんの横顔がガラス越しに見えるのであった。K君は帰途、そのクリニックの窓辺のところに立ち止まってじっと窓を凝視する。たまたまその薬剤師さんが窓外を見て、K君に気づきそっと微笑みかける。その笑顔を見るとK君は家路へと歩き出すのであった。母親はしみじみ述べながら気づかれた。「月見草のような感じの優しいほっとする笑顔を浮かべる若い女性の薬剤師さんでした。思えばKはホッとできる優しさを求めていた

のだと思います。小さい時から通ってきた通所療育機関は立派な療育訓練をしてくださるところだけれど、Kにとってはほっとする気分ではなく夢中で緊張の時間だったのかもしれない。私も少しでも変容成長させようという意識で頑張り一辺倒でした。あの薬剤師さんのような表情をして、そっとにっこり微笑みかけるなんてこと忘れていたような…。後ろから歩いて、帰宅が遅れるわけを知って、Kへの接し方にゆとりを持つと気づきました」。母親の述懐を聴きながら、その気づきの的確さを感じ入った。やがてK君の帰宅は遅れることがなくなり、以前より家族とのやり取りが増えて穏やかさが増したのであった。

ある養護施設でのこと。一人の女子高校生C子がボランティアで園生を自宅に招き入れて料理を教える品のよい夫人のもとへ通うようになった。C子は職員には何かと反発的批判的な言動が多く、それでいて外出恐怖心が強くて、さまざまな状況で付き添いを必要としていた。彼女は自分の矛盾に自分でも気づき、自尊心が脅かされ苦しくなり、それがまた攻撃的言辞になるという悪循環に陥っていた。その料理を教える夫人は彼女の外での振る舞いには顧慮せず、そこの家の大事な知人として迎え入れ、C子の表現によれば庶民的な食材から上品でおいしい料理の作り方を教えたのである。C子の曰く。「料理は作る人の人柄を表すような気がする。先生と作ったお料理と一緒に食べる時は話題が広くていろいろなことが学べる、そして先生は言葉がきれい、私もきれいな正しい言葉を使いたい…。彼女は私に言葉を選びながら丁寧に自分が持っている問題点や課題について伏し目がちに話した。猛狂ったように叫んでいるときは別人のように…。〈今、お話ししてくれてる貴女は紛れもなくC子さんよ。今の折り目正しい素直なお話しているCさんが次第に大きくなって、別のCさんは小さくなって後ろに目立たなくなっていくように思う…。〉」「そうなりた

い!」。専門家としての立場では、全体的に的確に子どもを理解することが求められる。だが、時として、自分のまさに今そのものを、よくなりたいたいと思い、よいところが表に出ているその自分に焦点を合わせて会ってくれる人に出会うことも、子どもの成長や回復の道筋には意味があるように思われる。専門家としての視点による全体を的確に捉えたアセスメントをもとにしつつも、このような子どもの望みやあこがれをくみ上げる眼差しがあることは、子どもにゆとりをもたらし、希望を支えるよすがになるようにも考えられる。

次いで、個人と個人とのふれ合いによる育ちの支えから、視点をシステムへ転じて考えてみよう。

スイスに暮らす友人を間隔をおいて幾度か訪ねるうちに、その間のことの展開に感じ入り、考えさせられた例がある。あるプロテスタント教会の教会員の中では、「教会のお母様」と呼ばれる役割を心ある人が任意的に申し出て、子どもの育ちを支えるのである。教会員の中の子どもで、いわゆる発達障害を抱えていて、学業に難儀し、友人関係も円滑には運びにくい子、その子自身の資質には格段の問題がないものの、家庭的に何らかのもろもろの要因があって、孤独をかこつ子どもなど、つまり生き難さを持つ子どもに対して、この制度は実の親や家族、さらには医療機関や療育機関の専門的支援を補い支えるものとして機能している。ボランティアで有志の婦人が「教会のお母様」となり、受け持つ子どもが18歳くらいに成長するまで、精神的に支える役割をとるのである。お誕生日、クリスマス、学期の終わりに成績を貰うとき、進学、就職するときなど、節目の時に、その子どもの状態に合わせて励ましや慰めのカードに添えて気持ちを込めたプレゼントをする、時には会って話したりなどもするのである。よき理解者、支え手であろうとするのだ。ただし、程よい距離感を保つようにして、子どもの自立(自律)心を大切にしている。実際、はじめにあったと

き、かなり人間関係や学習に難しさを抱えていた子どもがこういう支えによってかなり落ち着き、まあ、こんなにこの人らしい生きる場と方向を見つけた、と感嘆した例を幾人も見た。

我が国の少年事件の処遇に試験観察制度がある。これは審判での処分決定を一時先に延ばし、一定期間を試験観察期間として少年に遵守すべきことを申し渡し、この期間中に性格行動傾向が改善するように指導観察を所定の期間行い、所定期間終了時に、最終決定を少年審判で言い渡すものである。試験観察の行われ方は個々の少年の特性に応じてさまざまであるが、その中に高齢者ホームに補導委託される少年がいる。高齢者ホームで少年はヘルパーさんの指導を受けながらいろいろ働くのであるが、高齢者から労われたり、感謝されたり、励まされる経験は、概して自尊感情が損なわれている少年たちにとり、自分を捉え直し、自信を取り戻して立ち直るのためのよい刺激になるのである。

昨今、福祉法人施設内で、保育園の子どもたちが同じ敷地内の高齢者ホームを訪れて、入居者の高齢者の人々に歌や踊り、絵や工作物を披露して、交流し、双方が体験の幅と彩を増す試みを実行されている。幼い時から、生きるということ、育つこと、人は成長し変容すること、やがて成人した人は次の世代を育て、かつ前の世代の人をお世話し、そして静かに高齢期へと移っていく、という人の存在、人生について考える自らの生を引き受ける姿勢の原型が良い意味で育まれるのではなかろうか。

子どもの育ちに意味を持つ人、場は小さいもの、大きいもの、ほっとした寛ぎや楽しみ、新たな好奇心を呼び起こす広い世界へのいざないの契機、生きていくうえでの人としての基本、本質的事項への気づき、これら次元をことにする大きささまざまな影響をいわゆる専門家と呼ばれるのではない人との出会いや関わり合いの中で子どもは経験し、会得しているのだ。子どもの育ちが豊かなものになるには、こうした専門家以外の人々から意味ある刺激や影響を受けることが望ましい。専門家の仕事の一つに、市井の人々が自然に子どもに関わることをそれぞれの立場で無理なくしかし真摯にそしてどこか肩に力を入れすぎないゆとりある姿勢でやってみよう、それは子どものためばかりでなく、自分の生をも豊かに意味あるものにしてくれるものだという認識を強めるような活動が要るのではあるまいか。

文献

- 村瀬嘉代子(2010)「新訂増補 子どもと大人の心の架け橋—心理療法の原則と課程」金剛出版。
- バージニア・M.アクスライン、岡本浜江訳(2008)「開かれた小さな扉—ある自閉児をめぐる愛の記録」リーダーズダイジェスト社。

キーワード：支える眼差しと手

子どもを育てるのは基本的には親であるが、それが必ずしも十全でない場合には社会的養護の養育に委ねられる。養育の中核を担う親や専門家の他に、市井にあって人の生を慈しみ尊ぶ姿勢を持ち、さまざまな生きがたさを抱く子ども達の気持ちを理解し、さりげなく寄り添い、時にはそっと手をさしのべる、そのような精神風土が豊かになることが望まれる。



I 総論—“周辺の厚み”の意味を考える

“周辺の厚み”がもたらすもの



うつみしんすけ
児童養護施設 川和児童ホーム 臨床心理士 内海新祐

はじめに

「養育周辺の厚み」が本号の特集テーマであるが、「周辺」という言葉には異論もあるかもしれない。「周辺」というからには「中心」があるはずで、はたしてそこで中心とされたものは本当に中心と見なされるべきものなのか、中心-周辺という構図でとらえること自体に偏りや誤りがあるのではないか、という見解が出ることも想像されるからである。

このような見解に一部は頷きつつも、ここではやはりこの言葉で考えてみたい。というのは、それにより、日ごろあまり目に留めずに通り過ぎてしまうものをとらえる準備ができるように思われるからである。本稿では、まず、「周辺」というものに対する私の問題意識を、その経緯を含めて述べる。次に、本来の人間の養育は、「中心」「周辺」という観点からはどうとらえられるかを考える。最後に、「周辺」の意義と役割の普遍的側面を考える。

「周辺」への関心

「周辺」というものは、私が専門領域に進んで以来抱き続けてきた関心事であった。私は一応、臨床心理学を専攻しているということになっていて、心理療法と呼ばれる分野についての授業や研修を少なからぬ時数受けてきた。大学院に進学し、修了し、試験を受けて臨床心理士という資格も持っている。だから世間的な基準から言うと、「専門家」と見な

されるであろうことは承知しているし、またそう言わないことには申し訳が立たない気もする。だが、一人の困難な状況にある人を前にしたとき、時間を費やして得てきたものにいかほどの意味があるのかと考えると、決まって心許ない思いがした。と言っても、自分が学んできたことは何の意味もないとか何の役にも立たなかったなどと言うつもりはない。私は、これまでの自分なりの学習プロセスがなければ今程度の仕事すらできなかつたと確信を持って言える。だが一方、心許なさも同居しているのである。これはなぜなのだろう？

おそらくそれは、私の心許なさの源が、私と同程度の学習歴や研修歴を持っていない人が他者への援助において私より劣るかと言うと決してそうではない、という事実に行きつくからであろう。「そんなものがなくても自分以上に機能する人はいくらでもいるではないか」と。患者(クライアント)との一対一のカウンセリングや心理療法関係を中心に考えれば、なるほどこれを行うにはしっかりした知識や訓練が必要であることは疑いがない。しかし、相手は「患者(クライアント)」としてだけ生きているのではなくて、それ以外の無数の関係の支えによって生かされている。その中には、狭義の治療関係以上の意味を持つものもある。例えば小倉(2008)は次のような例を挙げている。

「ある思春期やせ症の中学生は、その母親とお互

いにひどく傷つけあう関係しかもてないできていた。一方的で口うるさい母親とのっぴきならぬ緊張状態をつづけたあげく入院となったが、入院後、人との関係を恐れて誰にも近づかず、ひっそりとして淋しげであった。ところが、病棟の備品などを整えたり補充したりする役目をするあるヘルパーと仲良くなった。仲良くなったといっても、このヘルパーも非常に無口な人なので、ただ二人はだまって押し車をともに押したり、品物を車からおろして積み上げたりという簡単な作業をするだけなのである。ヘルパーと特に口をきくでもない。手をつなぐでもない。二人ともただ黙って一緒にいるだけなのである。そしてこの患者は短期間のうちに非常に改善した。」

小倉はこのような例を受けて、「これに類することはいくらかもある。ことさらにこれが治療なのだから、自分は治療者であるといった構えをもって接するのではなく、日常の何気ないやり取り、自然でかざらないやりとり、またその人の性格そのままのやり取りなどを通して、患者はそれまでにはなかった新しい観点を持って自らを考えてみるのが可能となり、それが治療的な機軸をなすことになったりするわけである」と述べている。

もちろん、このような例を引いたからといって、私は何も、狭義の治療関係には意味がないとか素人の方が本当は役に立つのだなどと言いたいわけではない。治療関係とそれ以外の関係はそれぞれ別の意義や価値があるのであって、優劣をつけるのは意味がないと分かってはいるつもりである。ただ私は、「専門的訓練を積んだ専門家」となっていく、まさにそのことによって取れなくなる役割、持てなくなるかわりの質があるように思われ、それと引き換えに身につけた「専門的知識や技能」、そして「専門家であること」は総合的に見て相手に資するほどのものになっているのかと、それを心許なく思うことがしばしばだったのである。そのためだろうか、

狭義の治療関係以外のものが周辺でどのような作用をもたらしているのかに関心が向く。もっとも、実はこれは、そうでもしないとつい狭義の治療関係にばかり拘泥してしまう、自分の視野の狭さに対する反動という側面もあったかもしれない。

人間の養育の本来的なあり方

“出身地”たる心理治療の領域において抱いたそのような関心の持ち方を、私はその後に就いた養育の世界に対しても持ち込んでいるようである。すなわち、中核(メイン)と見なされているものの「周辺」が果たしている役割への関心である。これもまた、そうでもしないとつい「狭義の子育て関係」にばかり拘泥してしまうことの反動なのかもしれない。というのも、現在、日本における子育ては、治療関係にも増して特定の関係を「中心」と見なし、責任の所在もほぼそこに求めている感があるからである。「子どもが犯罪等を起こしたとき、人々の視線がすぐさまその家庭と親に集まり、そこに問題性を探る傾向」(滝川、2008)にもそれが見て取れよう。養育の成否は親が子どもとどのような関係を作り、どのように育てたかのみにかかっているとでも言うかのようなものである。社会的養護においても、おもに一般家庭との対比を念頭におきながら、「特定の養育者による一貫した養育」が目指されるべきものとして長らく語られてきたし、さらに昨今、発達早期の虐待やネグレクトとの関連で「反応性愛着障害」の概念が注目され、その修復のためには核となる養育者との愛着関係を結び直す必要があるとして、そこに焦点を当てた理論や技法が紹介されている。施設職員のみならず、里親にも専門的知識や教育が求められるようになってきている。

だが、そのように「特定の養育者」が子育ての実際と責任のほとんどすべてを負うような養育形態、そしてそのような見なされ方は、人類史的観点からすると例外的と言える。そもそも人間の子育ては、

他の生物種に比べて際立って重い負担を、しかも長期に亘って担い続けることを余儀なくされている。それゆえ「近い他者から社会的サポートを付与されることを前提に仕込まれている節があり、それだけに、現に、そうしたサポートをどれだけ受けることができるかに、その質を大きく左右される可能性がある」という(遠藤、2007)。例えば、ゴリラの成体メスは大概の人間の成人女性よりは重いことが知られているが、「それでありながら、平均出生体重で比較すると、ゴリラの新生児は、ヒトの新生児の約2/3以下の重さに止まる」という事実がある。そのため、ヒトは「小さい親が、重くてしかも圧倒的に未熟な子どもを育てなくてはならぬ」。その上「自律的に生活できるようになるまで、きわめて長い期間、親や家族などによって、ケアされる必要があるのみならず、教育的にトレーニングされなくてはならない種である」と考えられるので、「ヒトにおいては、例えばチンパンジーのように、母親であるメスだけが、単独で自活しながら、子育て実践することが実質的に不可能になったのだと考える研究者は多い」のだという。

霊長類の比較研究まで持ち出さなくても、現在の私たちが考えているような、家族が子育ての責を一身に負うあり方が歴史的に見てそこまで自明でないことは、広田(1999)の記述に見て取れる。たとえば明治期の都市下層は、「そもそも家族という単位がしっかりとしていなかった。狭い長屋の一室に数家族が同居していたり、(中略)家族が離合集散をくりかえすのもめずらしくなかった」という。広田はこのほかにも様々な文献やデータを示しながら「家庭の教育力の低下」や「昔の親は子どもをしっかりとつけていた」という俗説を反証し、「家族が子どもの教育を担う」ことがあらゆる社会階層に共通する一般的な意識となったのは、戦後の高度経済成長期以降であると論じている。子育ては家族が背負う「私的な営み」であるとの認識は、さほど古い

ものではない。滝川(2008)も言うように、高度成長期までは、子育ては認識面においても、また実際面においても「社会的な営み」であり、地縁的、隣保的な相互扶助による、さまざまな「周辺」によって支えられるもの—社会が全体としては貧しかったために、そうしないことには立ち行かないもの—だったのである。もっとも、高度成長期以降もその名残を留めているところもあるにはあって、児童文学者の清水眞砂子(2012)は、ある地方の読書サークルに出ている人たちの子どもの様子を紹介している(2009年、サークルは解散)。その子どもたちに、今度家に遊びにおいでと誘ったところ、「うれしいな、親がまた増えた」と言ったという。その意味を尋ねたところ、「僕たち親がいっぱいいるんです」との由。「親とけんかなどして、どうしても家に帰りづらいときは、別の家に帰って、一週間でもそこから学校に通う。そういう関係がこの会員の間ではできていたのです。そっちの子がこっちの家に来て、こっちの子がそっちの家に行くというふうにぐちゃぐちゃしている」。複数の親、複数の子どもが出たり入ったりする「複線」で成り立っていて、空気よどみがないという。

「周辺」の意義と役割

人間の子育てとは本来そういうものであろう。ゆえに、「特定の養育者」の責任性や専門性が取り沙汰される昨今において、「周辺」の果たしている役割についてしかと目を届かせようとすることは自然であり、かつ必要なことであると思う。ただし、本来「社会的な営み」であるとは言っても、ただ漠然と「社会で育てる」と言っているだけでは不十分である。「核となる関係」と言うべきものはやはり存在するし、不可欠でもある。その大切さを踏まえた上で、「周辺」にもそれぞれの位置に応じたコミットが求められるのである。そうでないと、「みんなで見えていく」という耳に心地よい標語の陰で、総無

責任体制が生じることにもなりかねない。近年、様々な分野でチームアプローチや多職種連携の必要性・重要性が叫ばれて久しいが、関係者・関係機関それぞれが自身の役割を本質的に理解し、分をわきまえ、でも少しおせっかいをし、そしてその呼吸合わせを互いに成熟させていかないと、「あれはこっちの仕事ではないよ」「本来あっちがやるべきことじゃない？」といった押しつけ合いばかりが延々と繰り返されることになる。ちょうど野球において、微妙な位置に打ち上げられたフライを選手それぞれが顔を見合わせている間に取り損ねるように（プロでも稀にそういうことは起こる）。要は、先に「治療関係とそれ以外の関係はそれぞれ別の意義や価値がある」と述べたのと同じで、「中核」と「周辺」が互いの役割と意義を認識しながら、どう重層的なネットワークを補完的に編んでいけるかが問われているのであろう。

「中核」に対して「周辺」が持つ役割にはどのようなものがあるだろうか。すぐに思いつくのはやはり“サポート”であろう。養育をメインで担っている人に対しては、やり方や考え方を支持し、元気づけ、手の届きにくい部分を補い、負担をそれとなく減らす…。子どもに対しては、「中核」との関係が厳しくなったときにそっと傍らにいて、支える。あるいは世の中にはこういう人もいて、こんな生き方や考え方もあると、関係性や世界の幅を広げる…。意図的なものもあれば、無意図的な、巧まずして行なわれるものもあるだろう。こうしたサポートが大事であることは間違いない。

しかし時に、それとは別の役割もあるのではないか。それはむしろ、「現在」に対してアンチテーゼを突きつけるような役割である。養育に限らないであろうが、「中核」を担う位置にある者は、自身のあり方に批判的検討を加えることが不十分になり、思考が硬直化し、実際のやり方も固定化したものになりがちである。これは小さな組織内の活動状況か

ら国家や国際社会レベルにおける組織機構にまで見られる普遍的な現象のように思う。そのような「中核」の偏りやズレに再認識を迫り、時代の流れや現状に即したものと改変を促すにあたっては、「中核」それ自身はあまり恃みにならず、「周辺」の力に負うところが大きいのではないだろうか。また、当の子どもにとっても、これまでの自分の考え方やあり方を真っ向から打ちのめすような存在は、時に必要ではないだろうか。少なくとも私においては、自分のあり方を見つめ直し、成長させる契機をくれたのは、必ずしも自分を温かく認めてくれる人ばかりではなかった。そこまで“対決的”なものでなくとも、新鮮な視点を投げかけ、少し慌てさせ、活力を与え直すのも「周辺」の力であり、役割ではないだろうか。

参考・引用文献

- 遠藤利彦(2007)「アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する」数井みゆき・遠藤利彦(編)アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 p1-58
- 広田照幸(1999)「日本人のしつけは衰退したか—『教育する家族』のゆくえ」講談社現代新書
- 小倉清(2008)「入院治療」小倉清著作集・3 子どもをとりまく環境と臨床 岩崎学術出版社 p86-124
- 清水真砂子(2012)「いま問いかけていたいこと—個がつかるとは」飢餓陣営37号p162-175
- 滝川一廣(2008)「子育てと児童虐待」そだちの科学10号 p80-86

キーワード：周辺

ここでは、中核的な養育関係以外の、子どもの育ちに資する他者全般を指す。たとえ「高度な専門教育」を受けたスタッフによる養育体制が組まれていたとしても、子どもは専門的知識など持たない他者にも囲まれて育っていく。専門・非専門、中核・周辺、これらが種々雑多に織り合わさっているのが関りの「豊かさ」であり、これをどう厚くするかが現代の養育の重要課題の一つであろう。そのための処方ば産業構造や経済状況も深くかかわっているため一筋縄ではいかない。が、手近にある「周辺」を見出し、その意義をきちんとそれとして認識することは、その手始めにはなるだろう。

II それぞれの“周辺の厚み”

まなざしは その人の想いを語る



立正大学 副学長 おおたけ さとる 大竹 智

はじめに

私が三好洋子さんと出会ったのは、かれこれ30年前になる。それは、私が大学生のとき、東京家庭裁判所内にあった「少年友の会学生ボランティア」に所属し、たまたま担当となったA少年（試験観察）が、異例ではあったが中3にして（福祉の谷間の子どもたち）、三宿憩いの家で生活を始めたからである。彼とはたった2回だけの関わりで終結となってしまったが、三好さんをはじめ、憩いの家のスタッフの方々との出会いは、私のその後の人生に大きな影響を与えることになった。それは、子どもとの関わり（養育）において「本物」を知った出会いでもあった。

そこで、ここでは、三好さんへのインタビューおよびこれまでの出版物を手掛かりとして、“養育周辺の厚み”について考えていきたいと思う。

1. 「憩いの家」発足の背景

「憩いの家」は、生活保護法に規定された更生施設でケースワーカーとして働いていた財部実美さんが児童養護施設を出た子どもたちにもケアが必要だとして、「家なき子らに憩いの家」を、「アフターケアの制度化」を訴え、1964年に運動を開始したことに始まる。翌年には有志13名による設立発起人会が開催され、賛同者33名が参加して児童養護施設のアフターケアの場を作るべく、「憩いの家設立

協力友の会」が発足した。そして、1967年に「三宿憩いの家」が開設し、運営委員5名（広岡知彦委員長）が交替で泊り込むかたちでスタートした。翌年からは委員の一人が別の仕事をしながら寮母として住み込むようになった。1969年4月に「青少年と共に歩む会」に改称し、12月に財団法人として認可された。なお、東京都においては、1984年に「自立援助ホーム」を制度化した。

現在は社会福祉法人（1999年）となり、3軒（三宿、経堂、祖師谷）のホームを運営している。定員は各ホーム男女6名で、合計18名である。2014年4月現在、関わった子どもは638人を超えた。

2. 入所経路

憩いの家は、1980年に東京家庭裁判所の補導委託として児童養護施設出身の女子を短期間入居させたことがきっかけとなり、この年に補導委託先に指定された。そのため入所経路は、児童相談所、児童養護施設、児童自立支援施設からだけではなく、家庭裁判所や少年院を含め、定時制高校、福祉事務所、精神科などまちまちである。そして、入居者の8割位が多かれ少なかれ警察の厄介になっている。

3. 憩いの家の「約束事」と運営システム

憩いの家ではなるべく規則を少なくして暮らそうと思っている。そのため、約束事は3つのみである。

①門限は午後11時、②働きに行くこと、③働いた給料の中から生活費として月3万円を子どもも大人(スタッフ)も納める(ボランティアも1泊500円納める)。

スタッフ(職員)は1軒に2名ずつ配置し、一緒に仕事探しをしたり、食事を作ったり、話し合いをしたりしながら、交替で憩いの家に泊まっている。フリーのスタッフや泊まりボランティアが泊まりをカバーしている。また、1階が男性、2階が女性と使い分け、自分の物は自分で洗濯、自室の掃除は子どもが行うことになっている。

入居する時は、憩いの家で受けられると判断したら最初にスタッフが「選択権は君にある」と伝えた上で面接を行う。いろいろな話をしてから、その後入居希望児童に憩いの家を見に来てもらい、泊まってもらう。そして、どんな生活をしているかを実際に見てもらい、子ども自身に憩いの家でやっぴいかどうか決めてもらっている。しかし、入居はその子自身に決めさせているが、「好きで来た子は一人もいない。来ざるを得なかった子たち」であることをスタッフは承知していなければいけない。憩いの家の暮らしをその子自身が心から選ぶのは2度目の暮らしからだと思う、とのことである。

運営費は、東京都などからの補助金と年3回程度のバザーによる収益金、賛助会員の方の会費、寄付などでまかなっている。自主財源があるおかげで「必要としていることを、必要としている時に」をモットーに、子どもたちとの自由度の高いやりとりができるという。

三好さん曰く、「発足当初の数年はボランティアだけで運営していたが、今は9名のスタッフを置くようになった。しかし、時代が変わった今も、憩いの家はボランティア団体だと思っている。バザー品を下さる方、バザーを手伝って下さる方、賛助会員の方、寄付を下さる方等々、ボランティアの方たちの支えなしに憩いの家は存在し得ないからであ

る。裾野の広さが憩いの家の底力でもあり、その方たちの思いがスタッフを支え、結果として子どもたちを支えていると思う」。

4. 憩いの家の「暮らし」の考え方

子どもたちが抱えて苦しんでいる問題は、何年もの日常生活の中で生じたことである。日常生活の中で負った傷を、暮らしの中で少しずつ回復してくれることを願っていることから「暮らし」を大事にしている。一緒に暮らすということは、安心して失敗ができ、やり直しができることや安心してケンカができ、仲直りができることだと思っている。テンポの違いはあるが、時間に委ねることによっていつの間にか子どもは変わっていく。スタッフは同じ時間を一緒に過ごし、「少しばかり先を生きている同居人」だと思っている。

ただ、スタッフもボランティアも、憩いの家の「暮らし」を大切にするという共通認識を持ちつつも、それぞれが素の自分自身のまゝに関わって行くことが大事であるという。一人ひとりがジグソーパズルのピースのようなもので、個性の違いがお互いを補う形で、子どもと関わることとしている。オープンでフェアなチームワークをモットーにしており、そのため子どもからは「憩いの家の大人って仲がいいよね」と言われることがある。仲の良い大人の中にいることで大人の顔色を窺わずにすみ、そのことが子どもの気持ちを安定させることになる。このことは、これまでの子どもたちの生活の裏返しでもある。

憩いの家の生活は、決して仲良しごっこではなく、また子どもとの関わりが、自分自身の優位性を確かめるものであってはならないと思っている。

また、子どもとの「暮らし」(寝食を共にすること)を大事にしている。それは、スタッフがまる1日働いているということではない。子どもが大人を必要としている時に応じることができるということ

である。もう一つは、同じ空気を共有することの大切さである。良いことも悪いことも、知らず知らずのうちに、皮膚から伝わってくる情報があるからである。

特に暮らしの中で大切にしていることの一つに「食事」がある。楽しく食事をするを子どもたちはとても喜ぶ。一緒に食事をするということは、その場を受け入れることであり、相手を受け入れることでもある。いつも一人でテレビを見ながら食事をしていた子は、「みんなで食事をするのは初めてのような気がする」とボソッと言うことがある。

憩いの家では、生活の中から生まれてくる喜怒哀楽などさまざまな感情を大事にする。そのことで、こまやかな交流ができると考えている。そして、一緒に暮らす(生活感情を共有する)ことによって、子どもに大人の弱さが見えてくるのが大事であると思っている。そのためには、大人が自分の弱さや脆さに気づいていること、正直であること、誠実であること(自分の弱さを大人の権威でごまかさないこと)が、子どもに信頼してもらえる大切な条件であると考えている。

また、「一度関わったらこちらからは関わりを切らない」ことを基本にしている。身内と縁が薄かったり、家族が混乱していたり、相談できる先を持たない子どもが多い。出てからも子どもたちとの付き合いは続く。仕事、生活、病気、結婚、離婚、子育て等々、人が生きて在ることのあらゆる相談が持ち込まれる。10年前に出会った子とは10年の、30年前に出会った子とは30年の付き合いが続く。ボランティアの中にも、出た子たちと何十年もの付き合いが続いている人がいる。出た子を訪ねたり、食事に誘ったりすることもよくある。ただ、SOSを出せずに辛い思いをしている子の訪問は慎重になる。「君のために」と善意を押しつけての訪問は暴力に思えるからである。想いをかけつつ待つしかない。16歳の時に一緒に暮らしずっと気になっていた子

から26年ぶりに連絡があり、「ずっと会いたかった」と言いながら想像を絶する彼女の話を聴きながら、26年間という時間を想った。言葉を交わせば26年前も昨日の続きになる。

出た子が困った時に相談に来たり、電話をしてきたりする、このようなやりとりを日常生活の中で何となく感じている現役の子たちは、「出た後も相談に来ていいんだ」ということを学習する。

5. 三好洋子さんの「まなざし」

三好さんは1977年に憩いの家の専従スタッフとなり、29年間におよそ200人の子どもと出会ってきた。その結果分かったことは、「この子のことは解ったと思えた子は一人もいなかった。人とはよく解らないものだということがよく分かった」と言う。このことが、子どもに対する愛おしさとその子を解りたいという気持ちにつながっていった。

過去において被害者という形で悪夢を見た子(守ってくれる大人がいなくて一人その身を曝してきた子)は、加害者という形で悪夢を見る場合がある。非行はその現れである。加害者として悪夢を見ている時に、立ち会う大人がいたかいなかったかによって、非行少年で終わるのか、犯罪者になっていくのか分かれるように思う。

子どもたちは私たちの想像をはるかに超える、壮絶な幼少期を送ってきている。そうした子どもたちを見ていると、彼らにとって非行以外なすすべがなかったのではないかと思うことさえある。憩いの家にやってくる子どもたちは、苦しみを苦しみとして申告できないまま、しようとなしなまま辿り着くことがほとんどである。

子どもが何か事件を起こす時、原因は一つではないこと、必ず訳があると思っている。再び被害者を出さないためにも、自分のやったことに対する痛みを取り戻してほしいと思っている。大変なことではあっても、子どもが時間をかけて自分自身と向き合



三好洋子さん



デパートバザーが終わった後でスタッフ、ボランティアの人たちと



三宿憩いの家

うしかない。大切なことは、子どもの傍らに大人が存在し続けることだと思う。どんなに非人間的な行為であったとしても、それが人の行為である以上、人間である自分自身の心にも起こり得ることだということを忘れてはならないいつも思っている。

非行は、それが恨みの世界に行かないための、必死の抵抗のように思える。暴れている子どもの姿が祈りの姿に思えることがある。いつか子どもの心を親の元に返したいと思いながら暮らしている。「赦さない」と思いながら生きねばならないことがどれほど孤独なことか、「生まれてこなければよかった」と思って一生を終えることがどれほど残酷なことかと思うからである。そして、子どもたちに「みんながうちに来なければいけなかったのは親の苦しみの結果だった。今のみんなに、その親の苦しみを分かってくれとまでは言わないけれど、そのことだけは理解してほしい」とよく言っている。

一方、周囲の大人のまなざしは大事である。なぜなら、まなざしは向けた人の想いを語るからである。だからこそ一人ひとりがどういう子ども観、人間観を持っているかということが大事なことになる。以前、暴力の中で育ち、人間関係ができにくく重い事件を起こした子の入居相談があった時、送られていた書類の中に児童相談所の心理判定員の分析結果があった。これを読んだ時に、このような人と一時期でも関わりのあった彼となら暮らしていけると確信し、自分の中で覚悟ができたという経験がある。会

ったこともないその心理判定員は、嵐の真ただ中にある彼の根っこの場所、巻貝の底のような場所から、苦しんでいる彼の内面に向けて、温かく柔らかなまなざしを向けていた。彼はこれまでにこのようなまなざしをもった人と出会って来ている、彼にとってそういう存在の人がいたということが分かった時、三好さんはこの子と暮らしていけると思ったという。

6. ボランティアの「まなざし」

泊まりボランティアから、「何をすればいいですか」と聞かれることがある。その時には、「子どもの話を聴いてください」と答えている。また、「何もしないで、リビングにいて座って居てくれさえいればいいですよ」と言っている。子どもたちにとって、大人が傍らにいることは有り難く、そこに居ることが大事だと思っている。そして、子どもにとって大事なことは、スタッフにとっても大事なことである。

憩いの家では、日々の暮らしの中にボランティアが出入りすることで、密室にならずに済み、またスタッフも井の中の蛙にならず、外の情報が入って来ることが大事だと思っている。憩いの家にとって、スタッフだけではなくボランティアが入ることによって空気のバランスが良くなっていると感じている。

たとえば、子どものいるリビングでご飯を食べて

いること、ソファに座ってテレビを観ていることにも意味がある。子どもとは何も言葉を交わすわけでもないボランティアの人からでも、子どもはいろいろなものを感じ取っている。何をしたということではなく、そこに居たという存在であっても、子どもの印象や記憶に残っている。子どもからふとした時に「〇〇さんはどうしている？」という言葉が出てくることがある。安心していられる大人の存在、ただ黙ってそこに居ることだけでも子どもにとっては安心できる存在となっている。大人が見ている以上に子どもはその10倍大人を感じている。沈黙の中の対話というものがあるという。

これまで、神父、大学教員、児童精神科医師、少年院の教官、大学生など、さまざまな分野の人が多く関わって来てくれた。広岡知彦さん(元管理運営委員長、専従スタッフ、化学の研究者)は、「憩いの家には福祉を学んだ人が少ないから良い」とも言っていたという。いろいろな仕事(職種)の人や価値観を持った人との出会いが子どもたちには大事だと思っている。ボランティアの人をとおして多くの人生に出会えることになる。大人は、憩いの家のスタッフだけではないということ子どもたちが知ることでも大事である。子どもの周りにはいろんな人がいてほしいと思っている。

スタッフは無意識のうちに正しいことを言おうとしてしまう。子どもたちもスタッフの前では緊張しなければならないが、ボランティアの前では緊張を緩め、素が出せるようなこともある。子どもにとってスタッフとの関わり、ボランティアとの関わり、それらの違いによって、これまでとは違った人間関係の持ち方が分かることもある。子どもたちは、これまで狭い世界(人とのつながりの中)で生きてきているから、スタッフ以外のいろんな人と出会ってほしいと思っている。それは、スタッフがボランティアを信頼しているということが基底にあるからである。

7. 市井の人の「まなざし」

三好さんは言う。たとえば、自転車に乗っていて、通りすがりにお互いが「ごめんなさい」と言葉を発し、次の瞬間には背中同士になる時にでも、「ごめんなさい」という言葉の交換の中に、人の温もりを感じ取ることができるようなことがある。行きずりの人かもしれないけれど、その人がふと愛情を持ったまなざしでその子のことを見つめた瞬間に、子どもが愛情を受け取る(感じ取る)ことがある。まなざしは向けた人の想いを語るから大事である。人はまなざし(視線)によって傷つくこともあり、まなざしによって愛されるから。直接的な関わりではなくとも、子どもにとって周囲からのまなざしは大きな意味がある。

8. 憩いの家という暮らしの中の「まなざし」

子どももスタッフもボランティアも、三者三様にお互いが必要としていた、必要とされていた存在であったと思う。この場所は三者が素でいられる空間だったようである。

ボランティアの中には、仕事の終わりが遅くになり「これから行ってもいいですか?」と連絡が入ることがある。「大変だから今晚は泊りに来なくても大丈夫」と言うと、「忙しくて疲れているけど、そこに行くのとホッとすることから」と言って、夜10時過ぎに来て、夕飯を食べて、寝て、次の日にまた憩いの家から出勤するという人もいたという。三好さん曰く、「ボランティアとスタッフの違いは、子どもに割ける時間と生活基盤の違いだけ」とのことである。

一方、子どもから「三宿って不思議だよね。三宿に来るまでの18年間には何も思い出はないのに、三宿にいた半年には思い出がいっぱいあるよ」と。ここに来るまでは思い出したくないことばかり、けれど三宿で暮らした半年には語りたいことばかり。それはムカつくこともケンカしたことさえも語りた

思い出になっている。また、憩いの家では、スタッフが子どもとケンカをした後に、その子どもの好きなメニューを夕食に出すことで、二人だけにしか分からない心の対話があるという。

このように、暮らしの一コマ一コマが子どもたちの生きていく力になり、思い出(共有した時間)が子どもを励ますことにもなっている。これが、憩いの家の暮らしの中のまなざしである。

おわりに

私に憩いの家や三好さんとの出会いのきっかけを作ってくれたA少年は、その後少年院に3回お世話になり、退院後の帰住先はすべて憩いの家であった。彼のその後の人生は、結婚し、子ども2人に恵まれたが離婚。2人の男の子を引き取った。車が好きだった彼は運送会社に勤め、職場の理解もあり、小さな子どもを助手席に乗せて仕事をしていた。優しくよく気がつく彼は、休日には子どもたちと海でキャンプをしたり、溪流釣りに行ったりし、子どもを大事に育てた。そんな彼も40代半ばになり、子ど

もたちは21歳と中学生になった。三好さんは、彼の家族とは今でも年に数回会っているとのことだった。

参考文献

- ・(財)青少年と共に歩む会編『静かなたたかい 広岡知彦と「憩いの家」の30年』朝日新聞社、1997年
- ・「子どもの話をよく聴ける大人に」『月刊 女性&運動』、2001年2月
- ・「子どもたちと暮らして思うこと」『臨床心理学』第2巻第2号、2002年
- ・『歩む会通信』(財)青少年と共に歩む会

キーワード：児童自立生活援助事業

この事業は、義務教育を終了した20歳未満の児童を対象とし、社会的自立ができていない、児童養護施設や児童自立支援施設などを退所した児童の経済的・社会的自立を目指し、また退所後の相談などのアフターケアを行う。その多くは、自立援助ホームなどの共同生活を営むべき住居で、就職や仕事、日常生活などの各種相談の支援を行っている。1997年の児童福祉法改正において法定化され、2013年10月現在、自立援助ホームは全国に113か所である。この事業の法定化には、憩いの家等の長年にわたる地道な活動が実を結んだ形となったと考えられる。



II それぞれの“周辺の厚み”

学校・地域と施設をつなぐ CAPの役割

— にじいるCAPの活動を通して



社会福祉法人 三光事業団 理事長 そばがき かずや
NPO 法人 CAPセンター・JAPAN 理事長 **側垣一也**

はじめに

現在日本では、約4万人の児童が、乳児院、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、里親家庭などいわゆる「社会的養護」の環境の中で生活している。その中で全体の約半数の児童が虐待を受けた経験を持っている(2013年度)。彼らの多くは、家庭で大人との不適切な関わりを経験してきたことに起因する心理的な課題や対人関係の課題などを抱えている。そのため、施設や里親家庭での生活を始めても、なかなかじめなかつたり、暴力・暴言などの激しい表現行動をとったり、自傷行為を行う場合もある。被虐待児の児童養護施設入所が徐々に増え始めてきた2000年度に兵庫県児童養護施設協議会が大学と協力して調査した「児童養護施設における被虐待児のPTSD症状と乖離症状」(兵庫県児童養護連絡協議会編)の報告によると、虐待を受けた子どもたちは、愛着障害・多動・攻撃性と受動性・脅えや敏感さ・回避や孤立・自己評価や自己肯定感の低下・発達の遅れ・大人びた行動・性的行動などの特徴を示していた。

そのため、施設において児童と関わるケアワーカーは、衣食住の世話など養育の専門性と共に心理的な課題に配慮した関わりの専門性も要求されているが、勤務体制や生活形態の違い、あるいは施設の置かれている地域性などにより、非常に大きな課題に直面している施設も少なからずある。特に、子ども

たちが施設内だけでなく地域や学校でさまざまな激しい表現行動やトラブルを起こすことにより、施設に対するイメージの低下や子どもたちに対する偏見が生じ、「施設の孤立化」を招くこともある。

近年その課題を克服してゆくための取り組みとして、施設においてCAPワークショップを実施するケースが増加してきた。CAPとはChild Assault Preventionの略で子どもへの暴力防止プログラムとして1995年頃から学校を中心に実施されてきた。本稿では、CAPプログラムの目的と内容を説明し、実際にCAPの活動を通して児童養護施設や学校と地域に関わり活動している福岡のCAPグループ「特定非営利活動法人にじいるCAP」の取り組みと、代表理事である重永侑紀さんの活動を紹介したい。

1. CAPとは？

CAPプログラムは、1978年米国オハイオ州コロンバス市のレイプ救援センターで開発・実施されてきた暴力防止プログラムで、その後、発達段階に応じたカリキュラムや、知的障がいのある子どもへのプログラムなども開発され実施されている。日本には1985年に森田ゆり氏により紹介され、1995年にCAPプログラムを実践するスペシャリスト養成講座が実施され、各地でCAPグループが活動を始めた。

〈CAPプログラムの3つの柱〉

●エンパワメント

人は生まれながらにして素晴らしいさまざまな力を持っているという考えに基づき、弱者の立場に追いやられ力を持たなかった人たちが、本来持つ、自分に内在する力を信じて力や個性を發揮できるように内なる力を活性化すること。

●子どもの権利

子どもたちに「あなたは大切な人だよ」ということを「安心、自信をもって自由に生きる権利を持っている」と伝える。この「安心」「自信」「自由」の3つの権利は食べたり寝たりする権利と同じく「生きてゆくためになくてはならない権利」=人権であり、子どもたちに「自分は大変な人」という人権意識を育むことが暴力防止の大きな力を生み出す。

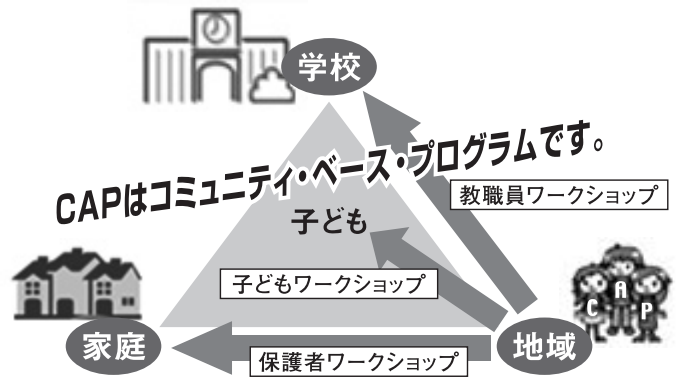
●コミュニティ

いじめや虐待などの暴力のない社会を作るためには、家庭と学校、地域との協力や連携が非常に重要であり、CAPでは教職員、保護者、地域の大人にプログラムを提供し、共通認識を持って一体となって子どもの安全と権利を考える機会をつくり、子どもにとってふさわしいコミュニティ作りをめざす。

〈CAPプログラムの3つのアプローチ〉

CAPプログラムは「教職員ワークショップ」「保護者ワークショップ」「子どもワークショップ」の3つのワークショップで成り立っている。子どもワークショップの直後に行われる「トークタイム(個別の復習・練習の時間)」を含めて実施されてはじめてCAP本来の効果を上げることができる。参加者が主体的に話し合いながら学び合う形式をとっている。

子どもの人権が尊重され 子どもへの暴力のない社会をめざして



■教職員ワークショップ／保護者ワークショップ

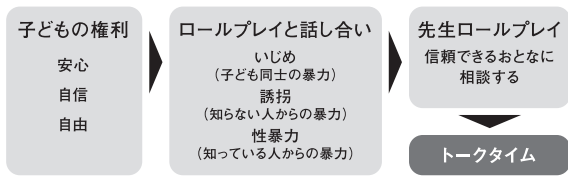
大人を対象としたワークショップにかかる時間は約2時間、人数によってワークショップ形式や講演会形式に変化することは可能。内容は、社会に広まる誤った暴力に対する認識(社会通念)について学び、大人と子どもが暴力について話し合い、助け合える関係を作りあげ、子どもたちを孤立させない、暴力の被害者・加害者にならない環境を作りあげてゆくためのコミュニティを作るように働きかける。そして、子どもの言葉を大人が共感しながら傾聴できるような具体的な方法を考えてゆく。

■子どもワークショップ

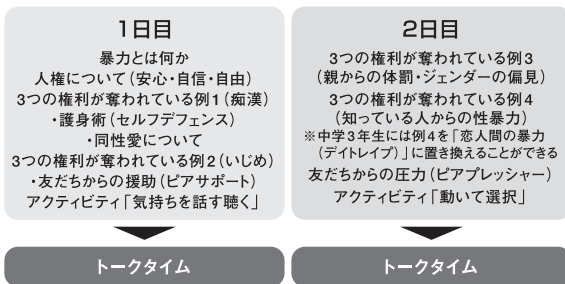
子どもワークショップは、発達理論をもとにつくられている。年齢に応じて、提供方法、言葉かけや関わり方が違う。普段あまり聴いたことのない「暴力」という話題について恐れを抱かずに、楽しみながら参加できるように工夫されている。具体的にロールプレイや話し合いを行いながら一緒に考えてゆく。権利を奪われるロールプレイのあとには、必ず権利を守るロールプレイを見て終わることになる。年齢に応じて、歌や人形劇も取り入れる。ワークショップの終了後に必ず「トークタイム」を行う。

「トークタイム」とは、希望する子どもがCAPの

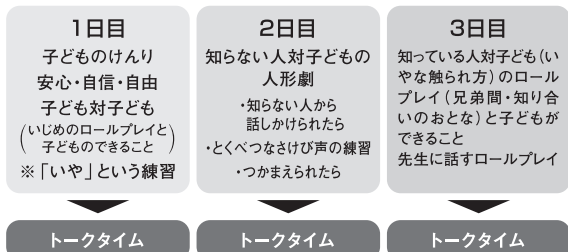
CAP小学生プログラムの内容 約60～70分+トークタイム(クラス単位で実施)



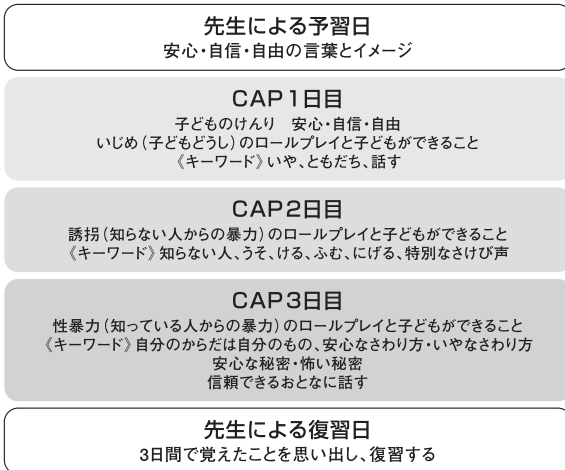
中学生暴力防止プログラムの内容 約100分+トークタイム×2日間(クラス単位で実施)



CAP就学前プログラムの内容 約20分+トークタイム×3日間(15人前後で実施)



スペシャルニーズプログラムの内容 障がいのある子どものためのプログラム 子どものニーズに応じてプログラムの提供や言葉・関わり方を工夫



スタッフと個別に話をする特別な時間で、どのワークショップでも約30分程度の時間を取り、子どもの話をしっかり聴き、子ども自身が課題を解決できるようにサポートする大切な時間となっている。

「トークタイム」の実施にあたっては、必ずスペシャリストが1対1で対応し、教師から「CAPの人は何でも話を聴いてくれるから話に行ったら?」と声かけをしてもらうことにより、安心して話に来ることができる。教師の関与が必要な事柄に関しては子どもの理解を得て教師につなぐこともある。効果として、①ワークショップで習ったことを復習することで実際に使えるようになる。②子どもはただ聴いてもらうことで自分の気持ちに気づき、CAPスタッフの助けを借りて課題解決の方法を見つけることができる。③「あなたは大切。安心・自信・自由の権利がある。それを取り戻そう」というメッセージを受け取ることによって、自分の大切さに気づき自信を取り戻す。④子どもが今まで誰にも言えなかったことを口に出すことは、暴力や虐待を止めるきっかけになる。⑤子どもは、話を聴いてもらえることで、信頼できる人がいることを確認し、大人を信頼しなおす。

2. 社会的養護の現場でのCAPプログラム提供

近年、児童養護施設や情緒障害児短期治療施設におけるCAPプログラムの実施が増加している。

虐待をはじめとする大人による不適切な関わりを受けてきた子どもたちは、先にも書いたように施設生活を始めても、自己肯定感の低下や人との関わりへの難しさを抱えている。その生活の場へCAPのプログラムを提供することによって、子どもたちは「安心」「自信」「自由」の権利を知り、今まで他者に話せなかった心の思いを安心できる人に話してもいいということに気づいてゆくことになる。また、施設の日常生活において、大人と子ども、子ども同士の関わりの中で「安心」「自信」「自由」が共通言語として使われることにより、信頼関係が形成され



「子どもワークショップ」のようす



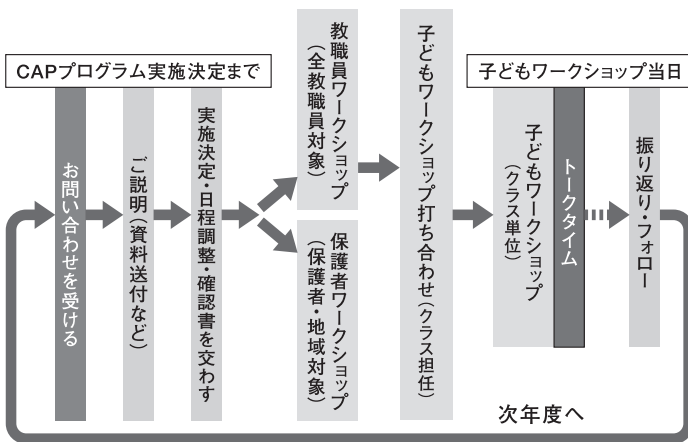
グループが実施したCAPプログラムは延べ1,202回、参加者数は14,267人になっている。

3. にじいろCAPの活動

佐賀県鳥栖市に事務所を置く「特定非営利活動法人にじいろCAP」は地域グループの中でも活発な活動を実施しているグループの一つである。代表理事の重永侑紀さんは、現在、国内南部のスペシャリストのトレーニングを担う就学前プログラム及び小学生プログラムのCAPトレーナーとして南は沖縄から北は埼玉県までのエリアを飛び回って活動している。元幼稚園の教諭としての子どもの関わりや障がい者の当事者団体で働いた経験の中で、行き詰まりを感じていた時にCAPと出会い、1998年福岡県南地域で活動していた方々と「にじいろCAP」を立ち上げた。現在年間400件近いワークショップを実施するほか、特定妊産婦や乳幼児を持つ保護者を支援する人たちへの研修である「CAS (Child Attachment formation Supporters) プログラム」や思春期の青年たちへの良好な対人関係を結びデートDVなどを防いでゆくための「さくらんぼプログラム」の提供、里親家庭との連携事業、CAP活動を通

■ CAPプログラム実施の流れ

CAPプログラム実施の流れ



てゆく効果がある。また、児童養護施設プログラムの特徴である「地域セミナー」を実施することにより、地域や学校と施設が相互理解を深め、子どもを中心にした連携を行うことで子どもにふさわしい環境を形成してゆく効果がある。なお、ある企業の助成を得て2008年から2013年までの6年間に全国の児童養護施設のべ308施設において、地域のCAP

じた行政と施設の連携のサポートなど非常に多岐にわたる活躍をしている。児童養護施設への関わりも深く、CAP児童養護施設プログラムの開発にも携わっている。2013年度には児童養護施設で11回の子どもワーク、7回施設職員ワークを実施している。また情緒障害児短期治療施設にも継続的な関わりを続けている。



筆者の取材を受ける
「にじいるCAP」代表理事の重永侑紀さん

筆者は、JR鳥栖駅近くの事務所を訪問し、事務局長の高松さんも同席して重永さんにお話を伺った。

重永さんは言う。「子どもたちは児童養護施設に入所するまで、本来、子ども時代にあるべき大人との関係性が逆転した環境にいました。保護者の顔色に敏感でなければなりません。あるいは保護者の帰りをひたすら待ち続けなければなりません。本来なら無条件に甘え、泣きたい時に泣き、遊びたい時に遊ぶ子ども時代でよいはずが、不安定で不安感いっぱいの中で過ごした時代だったのです。だからこそ、保護され特別に自分を大切にされる時間を改めて過ごすことが大事なのだと思います。子どもワークショップでは『安心して自信をもって自由に生きることは、子どもに特別に大切な権利なんだよ』と伝えますが、『特別に』という部分が強調して伝わるように、とても気をつけて表現しています。そもそも自分が子どもだと認識できていない場合も少なくないからです。『あなたの安心・自信・自由の権利は、私たち大人の権利よりも優先するんだよ』と言うと、ようやく『特別に大切』という意味を理解してフッと安心する表情を見せます。そして、ポツリポツリと親に対しての気持ちや、家庭の中で起きたできごとを語り出すのです。私たちを信じて話してくれることに心から『話してくれてありがとうね』と言いたくなります。なぜなら、

子どもからすると勇気を必要とすることだと思いませんから」。

筆者は、施設の子どもを取り巻く環境として、学校や施設や行政の関係が上手くいっていないケースがあることについて尋ねた。

重永さんは答える。「学校の先生方も施設で暮らしているからこそ、勉強を頑張らせて将来困らないようにしてあげたいと願っております。もちろん、施設職員も同じように願っています。ところが、施設の内情について先生が十分に知らないために互いに批判し合っていることもあります。ある学校で教職員ワークショップを行った際に、『施設にはあんなに沢山の大人がいるのに、なぜ宿題1つ満足にさせられないんだ?!』と言われたことがありました。施設職員としては、時に宿題をすることよりも心理ケアが必要だと思う時があるのだ、ということが共有されていなかったのです。子どもにとって親からの電話一本で心が揺れてしまうこともあるからです。私たちCAPが学校と施設両方に入ることで、子どもの視点で現状を知り協力し合えるようにします。つまり教育現場と福祉現場を子ども視点で“つなぐ”役割を担っているんだと自負しています。10数年、施設でCAPプログラムを実施してきて最も有効なプログラムの使い方は、職員ワークショップを年に2～3回実施することです。外部研修だと施設を代表して数人が出るだけですが、施設に出前研修をするCAPプログラムは、施設職員が全員で目標を合意する貴重な時間でもあります。子ども視点で取り組むことや非暴力モデルになることを全員で合意できる点も、職員と職員を“つなぐ”役割ですね」。

もう一つ、重永さんから興味深い話を聞いた。「私たちが自治体の委託で実施している学校で行う子どもワークショップで出会った子どもが家庭内の被害を開示することがあります。その子と再び施設で出会うことも少なくありません。彼らは再び、

CAPの人と出会うことで入所前と、入所後の自分がつながるような感覚を持つみたいです。以前の学校での自分を知っている人と再会することは、うれしいことのようにです。結果、児童相談所にも開示していなかった自分の過去をつまびらかに語り出すこともあります。CAPプログラムに盛り込まれたメッセージと、CAPの人がつなぐ“つながり”が子どもを包み込むのかもしれないね。子どもと社会を“つないでいる”感じでしょうか。

おわりに

にじいるCAPが取り組む活動は、前述した、子育て支援を行う人々のためのアタッチメントの視点からの研修プログラム「CAS」以外にも、思春期症候群の理解と支援のための「さくらんぼプログラム」、子どもと関わるプロの保育士養成のための講座「ぶろほ」、また、里親養育支援事業、県・市町村と民間団体との協働事業の企画運営など非常に多岐にわたっている。民間団体であるNPO法人として、行政や児童相談所、学校などが気づかない、動けない隙間を“つなぐ”役割を果たしている。

重永さんは最後に「NPOとして“つなぐ”が“つながる”へ変化できる活動を続け、子どもを中心に“つながる”内容の質と厚みが増すよう活動し

てゆきたい」と結んだが、まさに、今回の特集のテーマである「養育周辺の厚み」を大きくする活動であり、今後も続けて欲しいと願っている。

参考文献・引用文献

- 1) 「CAP教職員ワークショップテキスト」
NPO法人CAPセンター・JAPAN 2008
- 2) 「CAP子どものエンパワメント・サポートブック」
NPO法人CAPセンター・JAPAN 2010
- 3) 「CAPプログラムパワーポイント説明資料」
NPO法人CAPセンター・JAPAN 2012
- 4) 「児童養護施設における被虐待児のPTSD症状と乖離症状」
田中究・森茂起・富永良喜・稲垣由子・西澤哲ほか
兵庫県児童養護連絡協議会編 2000

キーワード：「安心」「自信」「自由」

CAPワークショップでは、「子どもの権利」「人権」を考える時「生きる権利は人間が生まれながらにして持っているもの、生きるために絶対に必要なもの、それが無いと人間としての尊厳を持って生きていけないもの」で、「食べる」「寝る」「息をする」「排泄する」「遊ぶ」「笑う」「泣く」などの権利と同じく大切なものであると説明する。人は「世界でたったひとりの大切な存在だ」ということに気づくと、「大切な自分を守るために何が出来るか？」の選択肢を考えることができる。CAP子どもワークショップでは、子どもたちに「あなたは、安心して、自信を持って自由に生きる権利を持っているよ」と伝え、暴力にあうことは「安心が奪われている→不安」「自信が奪われている→無力感」「自由が奪われている→絶望感(選択肢はない)」ということなのだということをわかりやすい言葉で伝えて、「安心」「自信」「自由」をキーワードとして人権意識を育ててゆく。



II それぞれの“周辺の厚み”

治療施設における 「異文化空間」の意味 —「学びの場」で子どもに寄り添う



広島市こども療育センター 心療部長
情緒障害児短期治療施設 愛育園 園長

にしだ あつし
西田 篤

1. はじめに

私が施設長を務める情緒障害児短期治療施設「愛育園」は、心のゆきづまりにある子どもへの治療的な支援を行う施設である。当園は、福祉の領域に医療的な方法論を取り入れた施設であり、その固有性や存在意義は「治療」という言葉に集約される。

一方で、当園は決して「治療」一色の施設ではない。狭い意味での「治療」の背景には、それを支える「生活」があり、さらには、それらと異なる彩りをなす「学びの場」も当園は備えている。

さまざまな悩みや課題を抱えた、一人ひとりの子どもへのテーラーメイドの治療。それを実現するための基本理念が「総合環境療法」であり、私たちは、子どもの周囲にあるさまざまな場面や関係性を、意図的・戦略的に再構成しようとしている。それは「多様性を確保した上で、それらを統合する作業」でもある。

そうした作業を行う場には、施設部門だけでなく、併設の「学びの場」も含まれる。そこは、「医療」や「福祉」とは異なる文化的背景を持つ場でもある。

2. 当園における「学びの場」

当園の中には、校区の小・中学校の施設内分級と、広島市教育委員会が設置する適応指導教室「ふれあい教室・東」（愛称「ひろば」）の、二つの「学びの場」がある。分級は寄宿児が、「ひろば」は通園児

が、それぞれ利用している。二つの「学びの場」は、園とは別の組織に属している。しかし、同じ建物空間の中にあり、かつ、共に園児を支える存在として、パートナー的な立場で運営されている。

あらためて言うまでもなく、「治療施設」と「学びの場」は、ともに園児にとって必要なものであり、異なる立場から、異なる方法論で、彼らへの支援を行っている。そして、「治療施設」という筆者の立ち位置からは、「学びの場」はその近接領域にあたり、「学びの場」からは逆の関係になる。本稿では前者の立場で論を進める。

一般的に、ある現場を活かすも殺すも、そこを担う人次第である。ここで、園という「治療文化」で彩られた現場にあって、「異文化空間」としての「学びの場」で大きな役割を担ってこられた二人の先生を紹介したい。（以下、敬語は省略）

3. 山根真由美先生（現・愛育園分級担任）のこと

1) 人となり

私生活でも二児の母親である先生は、園児にとっては“お母さん”である。お昼時の分級では、南向きの窓を背にして、先生が弁当を食べている。園の昼食を食べ終えて戻った園児が、先生の弁当を覗き込んで、「いいなあ」と羨ましがることもある。

採用試験の面接でやりたいことを聞かれた先生は、「数は少なくとも、私でないと心を開けない子

どもに関わりたい」と答えている。そこには、自らの思春期の躓きへのこだわりと、それを乗り越えるのに後押ししてくれた恩師や仲間、さらには、ロールモデルとしての両親への感謝がある。

2) 教師としての来し方

教師の主な仕事には、「教科指導」と「生徒指導」の2つがある。現役の国語教師として、先生は「教科指導」に力を入れてきた。加えて若い頃から、学年委員会等を通じて「生徒を動かしながら、学校を作っていくこと」や「生徒の自活能力を見つけさせること」にも興味があった。



山根真由美先生

一方で、悩みを抱えた子どもにも熱心に寄り添ってきた。前任校の時代に、外来受診児の担任であった先生とは、何度か顔を合わせ、対応についてあれこれ話し合ったこともある。

数年前、当園と児童養護施設が校区内にある現在の中学に異動になった時、先生は運命を感じたという。分級の前担任からも、転入早々「大事にしたいクラスだから、次はあなたに任せたい」と申し送られ、一年後に分級担任となった。

3) 分級に着任して

着任後、先生は園児の中に、「元籍校や家庭での傷つき」と「与えるべきものがあること」を感じ、あらためて「寄り添いたい」「“あなたたちの人生”に少しでも役立ちたい」と思った。そして、将来普通の学校に戻ってゆくであろう彼らの「学校観の再生」を図ろうとした。

4) 分級における実践

分級は特別支援学級ではあるが、普通の高校に進

学する園児も多く、教科教育や進路指導が熱心に行われている。加えて、施設内にある「小さな学校」として、さまざまな試みもなされている。

① 分級映画

かれこれ10年続いている名物企画の一つに、園祭での自主製作映画の上映(約20分)がある。既製の脚本を使うこともあるが、ほとんどの年は、園児の意見を聞きつつ、彼らの個性を踏まえて先生があて書きしたオリジナル脚本を用いている。スクリーンの中の彼らは、園での姿とはまた別の輝きを放っている。

2014年は、例年とは異なり「走れメロス」の群読ライブだった。彼らの緊張と息遣いがひしひしと伝わり、上演後には割れんばかりの拍手が送られた。そして、先生の口からメイキング段階での一人ひとりのエピソードが紹介され、彼らの心の内を伺い知ることもできた。

② 生活ノートによる「交換日記」

国語教師でもある先生は、園児たちと交換日記をしている。日記の内容の一部は、授業や分級だよりの中で皆にも紹介される。ある園児は、「今日、他の人の日記を見て、何で皆はこんなにも周りに目を向けられるのか、と思いました。それはとてもすごいことで、僕もできたらいいなと思いました」と書いた。その日、先生は「すごく充実して深いです。一日一日成長している実感が、頼もしい」と、彼らの日記にコメントしている。日記には、園の職員には見せない彼らの一面が映し出されている。

5) 園との関係において

先生には、分級が「治療施設の中の学校である」という理解がある。したがって、常に園児の担当チームの方針がどうなっているのかに注意を払い、不明な点については、ミーティング等を通じて丁寧に確認している。

それと同時に、「分級は園内の“異質な空間”で

ある」という認識もある。園の生活場面でトラブルを起こした園児同士は、担当の職員から互いに距離を置くように指導を受ける。しかし、分級のクラスメートとして完全に距離を置けるわけもなく、園の方針を踏まえつつも、「ここは学校だからね」という区別を園児に伝える。そして、園児の担当職員への不満や愚痴も、「そうなの」と“ここだけのこと”として受け止める。

基本的に、お互いの実践への理解や信頼があるからこそ、異なる背景文化や立場を尊重しつつ、その異質性を、つかず離れずの距離で保っている。

4. 松浦克行先生(前・「ひろば」主任指導員)のこと

1) 人となり

「ひろば」は園の奥の北向きの部屋にある。分級に比べて日当たりの良くないその部屋も、指導員の先生の醸し出す雰囲気ですぐ暖かい。

5年半の指導員としての在職中、松浦先生は通園児にとっての“おじいちゃん”だった。眼鏡の奥の優しい目がいつも笑っており、多くの園児がその笑顔に魅せられていた。

元々、理科が専攻の中学校長だった先生は、現在、「広島市こども文化科学館」の「発明クラブ」の指導講師を務めている。

2) 教師としての来し方

先生は瀬戸内の島で教師生活をスタートした。現在の温厚な雰囲気からは想像もつかないが、若い頃は熱血教師として部活動で生徒を鍛え、もう一人の教師とともに、生徒からは「赤鬼」「青鬼」と呼ばれた。ただ、熱心に指導をしても、生徒は反発し、不貞腐れて帰宅した。やむをえず、さらに指導を強めてみたものの、彼らとの気持ちは離れるばかりだった。そうした中、教師としてのあり方をあれこれ模索し、イソップ童話「北風と太陽」の中の「太陽」のようになろうと心に決め、それを実践した。

さらに、長年にわたって「一所懸命」の大切さを生徒に説き、「small step」を指導の原則とした。

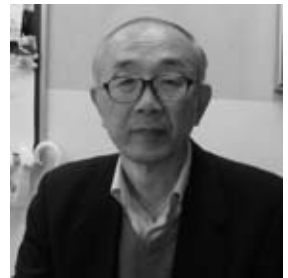
理科の教師として11年間働いた後、「広島市こども文化科学館」の創設と運営に携わることになった。子どもたちの科学への興味を引き出そうとするその当時の試みは、開設から30余年たった今でも、科学館の展示の中に残っており、「ひろば」での実践にも活かされた。

学校現場への復帰数年後に管理職となったが、若い先生にも「太陽」になることを説いた。そして、校長の職を退いた後は、子どもに近い場所での仕事を希望し、「ひろば」の指導員となった。

3) 「ひろば」での実践

① 百ます計算

先生が、最初に彼らとの関わりの手立てとしたのが「百ます計算」だった。それは、基礎となる計算力を付けさせること以上に、自らの成長を確認させ、自信を持たせる



松浦克行先生

ためであった。タイムはグラフ化されたが、タイムが縮まることで活動的になる子が多かった。また、日頃のタイムが出ない時に、「家で何かあったのかな?」と、先生は結果を通して彼らの内面や体調を推し量ろうとした。

また、「+、-、×、÷」の計算を繰り返し行わせたが、二巡目以降のタイム変化のパターンを、彼らの特性を理解する手掛かりにもした。

② 理科の実験や工作

A君という、口下手な通園児がいた。園の利用を始めるまでは、自宅で無為、無気力な生活を送っていた。百ます計算が苦手で、簡単な計算にも電卓を使わざるを得なかったが、理科には大変興味を示した。先生が光や雲などの実験をすると、それをしっ

かりと見て考え、分かったことを自分から積極的に話すようになった。簡易ギターや廃棄された検眼用のレンズを使った望遠鏡も、材料やヒントを与えられると自分で組み立てた。

LEDについてインターネットで調べるなど、理科への興味を深めるA君に対して、先生は電気関係の資格取得も勧めた。

今でも夜になると、A君の卒園制作となった電灯看板が、園の玄関で光り輝いている。

4) 「ひろば」の時代を振り返って

指導員時代を振り返っての先生の言葉。

「教員時代は、どの子も頑張らせればできると思いついてきたが、ここで学ぶ中で、頑張ってもできにくいことがあることに気付かされた。暗記してもすぐ忘れる、四則計算が困難である、鏡文字になる、じっとして居られない、など。しかし、どの子にも学びたいという意欲は人一倍あるが、周囲の速さに取り残され、途中で挫折してしまっている。

彼らが徐々に心を開き、一所懸命に頑張っている姿には、いつも心を動かされた。少しずつ声が出るようになり、薄かった字も濃くなり、活動が増えてくる。自分から話しかけることも増え、行動に自信がついてくる。表情も明るくなり、思いも表現してくる。そうした変化が、私は嬉しかった」。

5. 「学びの場」を支える人たち

1) 「学びの場」のスタッフの役割

「学びの場」のスタッフは、二つの役割を担っている。一つは、治療の傍らにあって、それを補完する役割であり、もう一つは、治療とは異なる専門性を持ちながら、園児への教育や学習支援を行う役割である。山根・松浦両先生の仕事も、その中に位置づけられ、また意味づけられる。

2) 良い「治療者」と「教育者」で重なるもの

両先生はともに教育のプロであり、専門分野への造詣も深い。ただ、そうした両先生の専門技能が上手く活かされているのも、その下地にある人柄に拠るところが大きい。それは、心の治療者にとって重要な要素が、最終的には人柄であることとも重なる。

これをさらに広げてみると、いわゆる専門職ではなく、資格を持たない人の中にも子どもと上手く関わる人がいるが、「専門性・資格」という武器を持たないだけに、その人柄の魅力が一層際立っている。

3) 治療を「補完」ということ

施設の中には、園児の日々の暮らしや治療の枠組みがある。そして、そうした現実に関与する立場上、園の職員はしばしば園児と対峙せざるを得ない。職員や現実と向き合う中でこぼれ落ちる園児のしんどさを、「学びの場」の先生たちは上手に受け止めてくれる。また、園児の方も、園の枠組みの外にある「治外法権」的な空間としての「学びの場」では、のびのびと過ごさせている。

6. おわりに

当園は、しなやかで柔らかい臨床を目指している。それは、一人ひとり異なる園児の在り様を丁寧を受け止めることであり、彼らの生活の中に多文化、多場面、多様性を担保することからスタートしている。

参考文献

西田 篤(2013)：多職種協働のチームアプローチで支え合う—ある「情緒障害児短期治療施設」での実践から、世界の児童と母性, vol.74;54-58

キーワード：施設内分級

情緒障害児短期治療施設は、敷地内に学校設備を備えている。多くは校区校の施設内分級(特別支援学級)の形をとるが、校区校の分校や、特別支援学校もしくはその分校という形態をとることもある。教員配置は、学校の形態により異なる。最も一般的な施設内分級の場合、生徒対教員の比率が8:1であるが、入所児が重症化している現状では不十分である。また、年度初めの入所児数の少なさから、さらに配置が少なくなることもある。

II それぞれの“周辺の厚み”

かけがえのない人材が 「つなぐ」日々

—二つの施設の内側にある、養育を支えるまなざし



よこほりまさこ
青山学院女子短期大学子ども学科 教授 横堀昌子

はじめに

この国の社会的養護のこの先の方向が「家庭的養護」に向かう中、施設ベースの養育においては、ケア単位の小規模化が推進されていることもあって、ともすると独立性が高まり孤立しがちにもなる職員を実質的にどう支えるかが、子どもに届く養育の質に響く大切な課題となっている。そのために必要な構造は、里親やファミリーホームといった、地域点在型の家庭養護を支えることとも質的に重なり合う点もある。施設には職員の組織があり、チームがあり、多様な立場の職員が実質生活とケアを構成している特性がある。また、ボランティアを含め、心に向ける多くの関係者との接点によって包まれ、社会的養育の拠点として地域に根ざしてきた歴史がある。

児童養護施設において子どもたちを直接担当し、日々のケアワークにあたる職員たち。子どもたちとつむぐ日々は、子どもの抱える生育歴や入所に至る経緯から、子どもたちの育ちのよろこびに包まれる日もある一方で、厳しいものとなりがちである。生活とは毎日続いていくもの。子どもたちとともにやりとりしながら大人と子どもとでつくりあげるもの。職員たちが心を注いだかわりの「成果」はすぐに手中にできるといったたぐいのものではなく、だいぶ後になって子ども自身の姿に、あるいはずっと先の自立の局面での姿に、家族再統合後の親子の

家庭生活にと現れてくる。養育を担う現場の職員たちは子どもの示す行動面への対応にエネルギーが必要で、「気働き」も含めてとかく疲弊しがちである。そんな中、養育の第一線の働きを施設の中において支えようとしてきた人たちがそれぞれの施設にいることだろう。

そこで、古い言い方では「間接処遇」職員という立場に位置づけられてきた人たちを含め、直接子どもたちを担当していない職員の方々に光をあてることを中心にすえて、本稿を編むこととした。今回は二つの児童養護施設にお願いし、インタビューをさせていただいた。東京育成園（東京都世田谷区）と、舞鶴学園（京都府舞鶴市）である。東京育成園では、事務職員の立場から長く運営面を含む施設の基盤を成す部門の働きを通して施設の歴史と変革の日々をつないでこられたお二人に登場していただく。舞鶴学園では、小舎の「家」の養育や職員自身を、主任保育士と心理士の立場で直接・間接的にかかわりながらエンパワーしようとされてきたお二人にスポットをあてる。各施設の現状やチャレンジしていることとあわせて、養育の営みを施設の中で見つめている人たちの姿を描きたい。

実は筆者は以前、今回取りあげる施設の一つ、東京育成園の職員として、ホームを担当し、まさに心を揺らしながら子どもたちと過ごしていた時期があった。そのことをはじめに申し添える。

1. 東京育成園

(1) 東京育成園の理念と現在

東京育成園は、創立1899年の基督教の児童養護施設である。1896(明治29)年、東北三陸地方大津波の被害地に遺された26名の孤児たちを、北川波津初代園長が私財を投じて救済したところから始まっている。現在、本園の定員は40名で、地域小規模児童養護施設12名とあわせて52名定員である。職員は、統括園長、園長、副園長、統括主任、ファミリー・ソーシャルワーカー、主任ケアワーカー、食生活主任、自立支援コーディネーター、里親支援専門相談員、ケアワーカー、心理職、事務職員、調理職員、嘱託の小児科医・精神科医・外部契約のスーパーバイザーといった構成である。東京都の専門機能強化型施設となっているため、ケアワーカー・心理職の増員、嘱託の精神科医の配置といった体制の強化が図られ、職員は総勢約50名である。

本園の施設には近年全面改築となった5つのすてきな小舎がゆったりと配置され、子どもたちは男女混合縦割りでグルーピングされている。本園施設外に地域小規模型児童養護施設(国型グループホーム)が2つ、施設分園型グループホーム(都型グループホーム)が1つある。法人では認可保育園も運営している。また、現在は別法人(学校法人)となっているが、施設に隣接して幼稚園があり、地域の子どもとともに施設の子どもたちも通っている。

東京育成園は、戦後直後に手がけた地域でのグループホームをはじめ、早くから小規模ケアを採用し、家庭的な養護を目指して養育を行ってきた。聖書が示す「わたしの兄弟であるこの最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ福音書25章40節)という聖句を土台とし、児童福祉の理念に沿って、徹底して「子ども中心主義」に基づいた支援を理念に掲げている。そのための自己改革(イノベーション)を具体化するため、2002年より「Project21 (Rebirth Children's Home



開所当時の東京育成園(当時の名称は「東京孤児院」)

Tokyo Ikuseien 21)」をスタート。現在その3期目の事業計画の中でいくつかの基本目標を定めて展開している。専門性の向上や子ども家庭支援の重点的取り組み(ファミリー・ソーシャルワークの確立)にも力点を置き、なるべく早く子どもたちを家庭復帰に向けられるよう、取り組みの強化と入所期間の短縮化にも挑んできている。人材育成にも力を入れており、近年では職員が7つの研究グループでワークショップとして3年間研究を積んだ成果を研究紀要にまとめ、学会でも発表、全国児童養護施設協議会から2014年度松島賞(第37回児童養護施設職員研究奨励賞)を受賞している。

(2) 河原一郎さん・濱恵子さんの働きから

筆者が、「施設を内側から支えている人」と思いをめぐらせたとき、まず頭に浮かんだのが、副園長で事務局長の河原一郎さんと事務職員の濱恵子さんであった。

河原さんは事務職として35年の間、故・長谷川重夫園長の時代から千葉茂明園長の時代、千葉園長が統括園長になり渡辺俊彦園長を迎えた現在まで、施設の庶務・事務の実務を担い、施設の歴史をつないでこられた人材である。育成園の歴史を知る生き字引のような方でもある。そもそも建築会社の社員だったが、在籍していた基督教の教会に育成園の子どもたちが来ていたことから、故・長谷川重夫園長と話す機会があり、誘いを受け、他にない「特

別なところ」で働こうと就職。河原さんは言う。「会社とは終身雇用のシステムで、仕事の先々の見通しがある程度読めて、役職の上の者はあまり動かず部下に仕事を『させる』ものだが、先々どうなるかわからないのが施設の仕事。そちらに飛び込んだ」「故・長谷川園長は夜遅くまで園長室で書き物をするなど、リーダーが率先して働いていたことに驚いた」。身



副園長で事務局長の河原一郎さん



事務職員の濱恵子さん

を削るようにして東京育成園に人生を捧げた故・長谷川園長、さらに戦後のこの国の児童福祉に貢献したさらに先代の故・松島正義園長(後に理事長)らの生前の「思いを知る者」として、「同じくその時代を知る職員たち」と、その後の園の歴史をつないできた思いがうかがえた。河原さんは、引き継いで園を守り、さらに職員や養育の質を育てようとリーダーシップを発揮されている現在の千葉統括園長、牧師の立場で園に長年かわり続けた後に園長として着任された渡辺園長、それぞれの働きをつなぐ役目を果たしてきた大切な人といえる。筆者が職員であった頃も、担当していた子どもが事務室で河原さんの仕事をされる机の横で足をぶらぶらさせながら隣に座り、表情をゆるめて話をしている場面があった。行動が荒れがちな子どもとふれあって受けとめてくださっていた姿が印象に残る。子どものケースへの理解も深く、時折話す瞬間にも、筆者の心に残るコメントがあったことを思い出す。

濱恵子さんは、教員養成の大学を卒業し、教員免許状を取得。教育と福祉をつなごうと研究と教育を試みていた恩師の紹介で就職。「子どもの一番身近にるのが教師。だが、養護施設(当時)の子どもの作文集『泣くものか』を読んで、家庭の問題を教師が身近に感じられていないのではと考えた」。東京育成園には児童指導員として就職したクリスチャ

ンである。信仰をもって他者とかかわることを生活や実践の中で問い続けてこられた。5年間ホーム担当として働いた頃、「行き詰まったりして」退職。そして、北海道家庭学校の長期研修生として北海道へ。谷昌恒校長の時代である。14年間、夫婦小舎制の施設の交代補助の職員として働き、そのとき事務の仕事もされていた。2007年に再び東京育成園に戻ってこられ、今度は事務職の立場で再び園を支えている。筆者は、東京育成園から送ってこられる郵便物やいただく印刷物を見るたび、事務職員の丁寧なお仕事ぶりや東京育成園の文化を感じる。濱さんもたしかな働きでそれらを支えるお一人。お目にかかるたびに安心感を感じるおだやかな人となりで、筆者は、濱さんのあたたかさ、誠実さとの接点をいただくたびに実はいつもほっとしてきた。東京育成園につながっている子どもたちも職員たちもそう感じているのではないだろうか。その存在と事務の仕事のたしかさでかけがえのない園の支え手となっている。濱さんは言う。「今の事務職の立場は好きです。若い人たち(職員たち)がとてもしっかりとしているので、そのがんばりを自分は少し離れた立場から応援したいと思っています」。ホームを担当された経験があるがゆえの思いであろう。

歴代の園のリーダーたちからお二人への信頼は厚い。お二人に気になることを聞いてみると、濱さん



全面改築の結果、潇洒なコテージ風の5つの小舎と美しい庭が新たに生まれた。



は「職員が早く退職してしまいがちなこと」。河原さんもうなずかれる。「どうしたらもう少し勤務の継続が担保されるか、何かできることはあるかと考える」。「職員の人数が増えるだけでは解決しないことがあるように思う」との言葉が心に残る。

河原さんはこうも言う。「以前は、職員数、男性の児童指導員数も少なく、各ホームは事務職の自分も応援しないと回らなかった。子どもから直接SOSが来たり、トラブルでちょっと来てほしいと呼ばれたり。昼も夜も、飛んでいって直接けんかの対応などもしていた」。その分、子どもとの接点は多かったとも言える。現在は職員数がだいぶ多くなり、そのように「呼ばれる」ことはほとんどなくなった。また、2004年にファミリー・ソーシャルワーカーが配置になって以後、短期間の入所となるべく子どもを家庭に帰す目標、つまり子ども家族再統合支援を具体的目標として明確に掲げ、取り組みを強化してきたため、短期で家庭復帰する子どもも増えている。「そもそも、新規入所児童がいると、その子どもが担当職員と関係をつくってから自分は声をかけるようにしているので、入所が短期だと事務職の自分たちがあまり話さないうちに家庭に戻る子どもも



グループホームでの食事風景。



園内整備を行うボランティアの人々。もう一つの「周辺」の人々だ。



アニメ上映会。地域との交流も盛んだ。

いる。それが以前と異なる点だ」という。濱さんもうなずいている。担当職員と子どもとの関係とそのありようをとらえながら、求めに応じて、状況をとらえながら添え木のような立場で見守ろうとしてきた存在とまなざしがここにあると感じた。

現在は、東京育成園の体制として個別対応職員とファミリー・ソーシャルワーカー、自立支援コーディネーター、里親支援専門相談員、基幹職員が事務室で机を並べており、ケース理解を深めながら全体を把握し、個々のホームで何かあったときのSOS対応に入れるチーム体制を構成しているため、事務職の自分たちが出て行く必要はなお少なくなっているとのことだった。

児童養護施設の基盤をたしかなものとするにあたって、河原さんが事務の立場で大変だと感じるのは、制度が変わり、人件費が予算化されるたびに業務が増えること。必要な費用やその位置づけ、説明の文言等について行政にかけあったり提案したりすることもある、事務職のプロでおられる河原さん。次々に新しい制度となる昨今、「これらはなかなかたいした量である」と感じる。パソコンを駆使する時代になっても、業務量は減らないとの実感だ。それに加えて、東京育成園は2005年から2007年まで歴史に残る全面改築を手がけたため、事務の部分でも相当な仕事量であった。そもそも河原さんは一級建築士でもあったため（現在は社会福祉士も取得）、この時期の貢献度は想像に余りある。筆者は、子どものためにと当時の措置費の額の向上や職員配置の課題などをめぐって、必要な点はゆずらず行政とも対峙し、ときに明確に言語化して「たたかって」きた故・松島園長・理事長や故・長谷川園長の時代の働きを、お二人から直接生前にうかがったエピソードから心に刻んでいる。施設の経理に長けておられ、具体的な局面で同様に今も「たたかう」河原さんのお仕事ぶりは、そうした育成園を守り育ててきた方々に通じると感じている。

(3) 東京育成園を支える人々

東京育成園には多くのボランティアもやってくる。ボランティアによる日常生活支援としては、大学生・大学院生を中心に構成し、将来のマンパワー育成も視野に入れて受け入れている生活ボランティア、地域の主婦グループによる日中の幼児養育支援、理容・美容サービス、若き起業家ら社会人がやってきて外の掃除をし、子どもたちとも接点をもって帰る園内整備ボランティア、地域の主婦らによる縫い物のボランティア（着付けや生け花、書道等にも貢献）、理容・美容サービス、行事の撮影や写真の提供をしてくれる写真家等が活動している。隣接する

幼稚園の園児の保護者は、立場上子どもが在園中は施設へのボランティアをすることができないが、子どもが卒園後にすぐに登録して来てくれたりするという。きめ細やかな支えが継続している。

ボランティアによる文化・スポーツ・教養娯楽活動の支援としては、ピアノやダンス、フラワーアレンジメント、住み込みボランティアとして滞在する外国人留学生による語学講座・食事を通しての交流、科学の実験等がある。また、学生グループや地域の方、会社員ら個人による施設内や自宅での学習支援も行われている。

河原さんによると「そうした支えは、かけがえないもの。それゆえ、外部の助け手をコーディネートすることは重要」とのことで、たとえば統括主任の職員は、職員とボランティアの人数をあわせてでも、各ホームに常に大人が二人いる体制を組みたいと、調整に努力されているという。

東京育成園では、地域のニーズに応える活動を行い、地域に園が存在している意義を高め、地域から頼られ利用される施設となることを目指して、職員、地域住民のボランティアから成る『地域の福祉を創る会』を組織している。施設の全面改築後に造られた本館地域交流スペースでは、地域住民と協力しながら、地域の福祉文化形成のための講演会、コンサート、落語の会等を開催している。また、地域住民の文化活動（ジャズの演奏会、合唱、演劇等）の発表のために会場を使用してもらうことで、地域住民が気軽に集い活用できる場としての役割を施設が担うこと、地域住民、園児相互の交流の場としての役割も果たしていこうとしている。そうした活動が以前よりも展開できるようになったのは、やはり改築が一つの契機である。

東京育成園にも、いくつもの「大変な時期」があった。第二代園長であった故・松島正義理事長と心を重ねながら園の理念の実現に人生をかけた故・長谷川重夫園長が病気になられ、前職員であった千葉

茂明氏に園長として戻ってきてほしいと依頼、それを受け、千葉園長として戻ってこられた移行の時期の職員の着任や退職。長谷川園長亡き後の千葉園長のリーダーシップに基づく施設改革の時代。懸命にその流れをつなぎ、職員の心をつなぎ、子どもと職員をつなぎ、児童養護施設としての可能性を現実的につなごうとされてきた働きが河原さんのかたちでここにある。重なる時期を知っておられる濱さんがこう語っていた。「長谷川先生ご夫妻には本当によくしていただいた。だからこそ自分が職員にできることは何かと考えているのです」。そう聞いて、筆者にもいろいろ思い浮かんだ。職員としての自分を氣遣ってくださったことの数々。母の日に長谷川園長の妻、故・長谷川真美子先生から、女性職員にすてきなカードとともにスリッパなどプレゼントしていただいた経験。職員の生活や職員の家族への気遣い等々。たしかに筆者も「していただいたこと」を今度は「したい」に代えてその後を生きてきた、そうやって育てられたのだと感謝をもってしみじみ思う。

施設内の養育の「すぐそば」で対外的な接点も含めて手堅く働かれ、養育をみつめ、園の移行の時期をつないできた河原さんや濱さんの働きを通して語られた言葉には、「これまで」を知る人ならではの静かなまなざしと深い思いが満ちていた。

2. 舞鶴学園

(1) 舞鶴学園の理念と現在

舞鶴学園は、1946年に故・山口勲氏が有志数人と戦災孤児11人を引き取って保護したことが起源である。以前は大舎制であったが、創立55周年事業として2001年に現在の場所に移転すると同時に小舎制を導入。昔懐かしい和の風情で美しい建築美の一戸建ての小舎、7つの家に別れて、個人の自立を尊重しながらアットホームな雰囲気の中で生活を展開、児童養護施設の役割としての養育を追求している。敷地の中庭を、この7つの家と管理棟とが囲

んでいる。各家の担当者、2つの家を担当し全体支援にもあたる副主任、全体をみる主任保育士とケアアドバイザーが置かれ、桑原教修・現園長がいる。定員は70名。男児の家を2軒、女児の家を4軒とし、現在は7軒のうち6軒を用いて縦割りで養育をしている。家担当の経験をもつ主任やケアアドバイザーも各家をみていくが、栄養士、調理師、心理士も生活場面に入り、子どもとのかかわりをもつ。事務職員は、宿直はないが行事には参加し、子どもとの関わりをもっている。

それぞれの家での生活を大切にしつつ、園全体でも韓国の施設との交流や白馬岳登山、クリスマス会、卒園生を送る巣立ちのセレモニーなどの行事にも積極的に取り組んでいる。また、自治組織として「子ども会」があり、子どもたちの自主的な活動もさかんである。高校生会、中学生会、小学生会があり、それぞれ活動する。月1回の子ども会主催の全員集会もあり、全体の会長は小学生以上の投票によって選出される「選ばれし者」である。子どもたちの主体性を重んじて、職員は「子ども会の企画は早めに言ってね」「クリスマスにバイトは入れないでね」といった語り口で伝え、見守って待つ。子どもの発案で開いたコンサート。プログラム進行も子どもが行った。みんなで歩く行事は子どもの要望で始まり、行事として定着。また、毎年テーマに沿って子どもたちだけで作ったメニューを家ごとに競う「食のコンテスト」、クリスマスの家の飾りつけを披露する「ハウスコンテスト」がある。

施設に隣接して、法人で設置した中丹こども家庭センター(児童家庭支援センター)と認可保育所タンポポハウスがあり、設備を活かし、職員を活かし、養育面でも、と保育所と一歩ふみこんだ連携をしながらの養育を展開している。施設への社会的関心は高く、移転しての事業開始以後、施設に来園しての見学者は約4,000人にのぼるといふ。工夫と配慮をしながら受け入れているとのことだった。

筆者がうかがった日、園の中庭には、クリスマスで用いたツリー型の光る電飾がまだ残されており、行事への思いを桑原園長より聞くことができた。クリスマスが近づく11月に、大人と子どもと一緒に選ぶ側になり、クリスマス行事の花形、キャンドル・サービスを担うメンバーのオーディションを行う。讃美歌を歌ったり聖句を読んだりしてチャレンジした子どもたちの中から「選ばれし者たち」が、誇り高くその役目を果たすという。各家、中庭、隣接の保育所のホールもスタッフもフル活用。子どもたちを主体とし、子どもの記憶に「あざやかに残る」ようにと祈りながら行事をつくってきた。「今は、子どもたちもお客様におもてなしができるようになった」。「つながった人と文化をつくりたい」。桑原園長の言葉である。

筆者が舞鶴学園に出会ったのは、以前、筆者と同時期に本誌編集委員であった桑原教修園長との出会い、そしてMBS毎日放送ドキュメンタリー作品『映像08' 家族の再生～ある児童養護施設の試み』という映像作品との出会いであった。関係者の努力によって可能となった何人もの子どもたちが顔を出し、本音で登場する貴重な作品でもあるこの映像は、放送後話題を呼び、2008年度日本民間放送連盟テレビ教養番組最優秀賞を受賞している。舞鶴学園のホームページにも次のような記載がある。「児童養護施設でのカメラ取材は、子どものプライバシー問題など非常に難しい問題もありましたが、『子どもたちと職員がいる日常の姿を知ってもらうことで、施設に対する閉鎖的なイメージを少しでも変えることができるのであれば…』との思いから、この試みは実現しました。そして、「こうして私どもの活動が徐々に認知され、社会の陰で様々な境遇の中で苦しんでいる子どもたちの更なる強き支えとなっていくこと、そして皆様からのあたたかいご理解とご支援をいただけることを願って、これからも活動を続けてまいります」と結ばれている。

ドキュメンタリー作品放映後「施設の中で何をやっているかわかった」と地域の方が言ったそうである。施設が特別でありたくない、暮らしをオープンにし「ふつう」の存在でありたいと桑原園長は願う。だからこそ地域にお世話になり、地域に貢献し、クリスマス行事も「絶対たのしいからおいで」と地域の人たちに言えるものでありたいと考えている。

舞鶴学園の文化を一つ取り上げたい。毎年、年度はじめの全員集会のとき、桑原園長が、「新しい友達だよ」と紹介して、新たに園庭に置く動物の置物(小鳥やアヒルなど。百円均一で買えるものから買えないものまで)を子どもたちに紹介する。名前もつける。雪の時期はそとはずして避難させておくが、園庭のあちこちにしつらえている季節には、これらの置物に子どもが寄って行って、なでたり、話しかけたりしてほっとする時間を過ごしているという。中庭にそれらが置いてあるので、「暴れるのは(道をはさんだ)広場でね」という約束になっている。焼き物だとかぐたまに割れるが、子どもたちも大事にしている。中庭には、誰かと語らいたくなるような椅子などもそと置いてある。子どもの心をひらいたり受けとめたりしてくれる仲間はどうやら人間ばかりではないようだ。生活のしつらえの力とそれを重んじる大人のセンスを感じさせてくれる。

(2) 鈴木美江さんと五十嵐未沙子さんの働きから

今回の特集の趣旨を説明し、家を担当する職員の方たちを支えている施設内の「周辺」の方のお働きとして浮かぶのはたとえばどんな姿ですか、と筆者が質問するとすぐに桑原園長から返されたのが、うちの主任保育士と心理職はよくやってくれていますね、との応答であった。

雪の白が学園の庭を彩り、高校生が今日も雪かきをしたという時期に筆者が舞鶴学園を訪問すると、まず季節の美しい和菓子と抹茶でもてなして下さったのが、主任保育士の鈴木さんであった。すてき

な“Welcome”に心をぐっとつかまれ、鈴木さんのやわらかでまっすぐなまなざしに、施設養護に心を傾けてきた真摯な姿勢と誠実さを垣間見る気がした。

鈴木さんは、舞鶴学園が大舎制であった時代に保育士として就職、その頃の養育の状況を知る人である。結婚し、子育てのためいったん退職、その後、現在の地に移転した小舎制の舞鶴学園に再び戻ってこられた。家庭に入り、子育てをしてから小舎の生活に入ってみると、大舎の頃と比べて生活がとても自然に感じ、違和感はなかったという。復職して8年目だが、大舎制のときとちがうと感ずるのは、「管理」から柔軟性のある生活に変わったなということ。来客や実習生が「ここはゆったりしていますね」と言う通り、ゆったりした時間の流れがある、また、自分たちでつくる暮らしの感覚があるという。

鈴木さんは現在主任保育士なので、直接家を担当せず、全体を見ている。各家には月1回ほど泊まりに入る。家が手薄になるときにはなるべく入るようにしている。主任として全体をみるようになって2年だが、家を直接担当していた頃よりも、いろいろなことが細かく見えるようになってきたという。各家の職員と話すときは、職員の思いを理解しようとしながらかかわっている。とくに、うれしいことやしんどいことを共有することが大事だなと感じている。少し気になっているのは、小舎になってから、やや職員の入れ替えが早いかなということ。小舎だと1年目でも職員の肩にかかることが多いので、大変なことが楽しみややりがいに変わればいいなと思いつながりながら職員と接点をもっている。そのためにも、「大変」になる前にこちらが気づいて、糸口がみつかるといいなと思う。職員は子どもとのかかわりが密なので、風通しをよくすることが大事。職員と話すのは、子どもがいないときや夜間、勤務明けのときなど。職員は、かかわりが子どもに届かずしんどいときもある。そう見えたときにはこちらから声をかけていく。一人で抱え込まないように、チームで解

決できるように働きかけるようにしている。鈴木さんが担当者たちに寄せる思いだ。

舞鶴学園では、家を直接担当する職員が月に1回夜7時から9時まで集まって

行う園内研修がある。そんなとき、事務職や栄養士、パートさんなどの職員が、各家に入るようになっている。だんだんとそのような流れができていったという。完全調理はまだできていない分、子どもたちは栄養士などとも接点が多いほか、ふだんもそうした職員が家に入ってくれていたり、子どもも事務室にも出入りしたりするので、鈴木さんによれば「違和感はない。日常があつてのカバーだと思う」とのこと。ちなみに、食事は夜5日間はパートさんが2軒分を半調理し、あと2日間は職員が一から作るという。パートさんによって味付けがちがったりすることもおもしろい。朝食は各家独自に作るが「なかなか豪華なんです。小舎になって食は変わりました」。「冷蔵庫を開けて、臨機応変に工夫できる点が全然ちがう。小舎のよいところですね」。今は各家で担当職員が好みのものを買って、ランチョンマットと箸置きも使うようになった。舞鶴学園では、昼食を職員がひとつの家に集まって食べて話したり、行事食を互いに意見交換しながら昼に作って確認したりしているという。

桑原園長にうかがったところ、職員の間で職員のバレーボール大会をしよう、との声があがり、併設の保育所職員も巻き込んで、高校を借りて予選会から決勝まで年1回行うようになったという。これは「職員の大会」のため、何とか試合が成り立つよう



主任保育士の鈴木美江さん

に勤務も組んで、工夫しながら大会を成り立たせているという話だった。このときも、家をカバーする動きを、家の担当でない職員もあわせてとるという。家の外から中を支える。必要なときはみんなでみんなをみる。ユニークなかたちが一つ、ここにある。

鈴木さんに、長く勤めると卒園生とのつながりが続きますよね、と聞いてみた。卒園生は「自分がいた家」という意識で帰ってくる。舞鶴学園という空気の中に。「園長に“帰ってくる子”もいます」。

鈴木さんも長く舞鶴学園につながっているお一人だが、おだやかで確かな語り口に、落ち着いて全体を見て必要なとき必要なかたちでそっと「手当て」する人のありがたさと、鈴木さんの言う「この場に居続ける人の必要」を深く感じた。

心理士の五十嵐未沙子さん(9年目)とお目にかかるのは2度目であったが、お話を聞き、彼女の感性のよさに驚きと発見があった。いつも筆者の家に送られてくる舞鶴学園のニュースレター「くつろぎ」の表紙に載っている子どもたちや園のすてきな写真は五十嵐さんが撮っていたことを知った。五十嵐さんはそもそも仲間と一緒に写真展をするほどの腕前で、一眼レフを傍らに置いて仕事をしている。園での日々の子どもの様子を写真で記録し続けている。写真には撮る側と写される側の関係が写りこむというが、まさにそうだと感じる。どの子どもも、安心したのびやかな表情をしている。また、舞鶴の自然や、学園のしつらえが実に美しい。大人が子どもに注ぐ愛情や思いが写真となって切り取られたとき、子どものレジリエンスとともにこんなかたちを成して見えてくるんだな、という気持ちになる。そして、筆者も関係者の一人として、施設につながった子どもが、こんなにもよい表情をもっているのだなとほっとし、うれしくなる。子どもたちの育ちの姿や生き生きしたよろこび、子どもを取り巻く環境の美しさに五十嵐さん自身が心を動かされていることが写真から伝わってくる。桑原園長も言っていた。



心理士の五十嵐未沙子さん

「たとえばきれいな虹が出ている。それを子どもと一緒に言葉を失って地面に腰をおろしてじっと見入っているのが五十嵐さん。そんな感受性をもった人が子どもの横にいてくれるのはうれしいこと。彼女の写真には、ほく自身も励まされているのです」。施設の後援会の方々に毎年、こうして撮りためた写真を、音楽をつけたスライドショーにした作品にして見ていただくのだそうだ。筆者も拝見したが、類似の作品を見たことがなかったので、感動し、このような作品こそ、本当は子どもたちのこのよい表情のままおおいに世に送り出したいものだとして深く感じ入った。子どもたちの写真を撮りため、職員をまじえて子どもと「あのときこうだったね」と話せるのは、成長を見つめてきた証し。「あなたのことを大切に見てきたよ」というメッセージにもなるのではないかと五十嵐さんはほほえむ。

五十嵐さんも、家の宿直には月に2~3回入っている。泊まりに入るのは、心理療法を受けていない子どもの家でのみに行っているそうだ。心理職として大事にしているのは、担当職員と子どもをつなぐこと。養育にはよいときもそうでないときもあるがゆえに、職員に子どもの姿を、「変わったね」「育ったね」「それは甘えじゃない？」などと伝えていく。直接担当している職員には、毎日見ているから見えないこともある。直接担当でない自分は家の生活に入って、肌で感じることもある。職員の朝礼や日誌では伝わらなかったことを感じられる。また、職員



舞鶴学園は美しい和の建築で小舎制。季節の花々に囲まれた美しい園庭には、桑原園長が年度初めに「新しい友達だよ」と紹介した動物の置物があちこちに置かれ、子どもたちに語りかけている。



星形の向こうに満開の桜。五十嵐さんの手になる作品からも子どもとの対話が聞こえてくる。

と一緒に洗濯物をたたみながら、草抜きをしながら、お菓子を食べながら、愚痴を含め「本音が聞ける」。ただ大変なことを語り合うだけではなく、子どもの成長やうれしいエピソード、かわいく思ったエピソード、職員のすてきなところ、そんなプラス面を見つけて語り合い、伝えていくのも心理士の仕事と考えている。「いてくれてほっとした」「一緒に考えてほしい」などと言われると、よかったと思う。失敗と覚えることや悩むこともあるが、試行錯誤しながらやっているという。自分が職員と重なって家に入ると慌ただしい家事の部分を担当するので、担当職員と子どもの時間がつくれる。「公園に行ってきた」とか「お菓子をもって散歩に行ってきたら」等も言える。

このところ手がけているのはレシピブック。荒れていた中学生と職員が食べるものを一緒に作り、その記録を写真とともに貼り、見返すことができる冊

子作りを提案した。日々のエピソードと写真を貼ったり子どもの絵を貼ったり、メッセージを書き込んだりする「大切なことノート」作りの一環である。また、子どものプラスのことを貼り付けていく「いいことノート」等も提案して、「年度末にがっちり」でなく気楽に作ろうと取り組んでいる。職員と子どもの「密な時間」「よい時間」「心地いい時間」「思い出したい時間」を促し作る取り組みだ。五十嵐さんも参加するなど、だれでも参加できるノート作りだという。

また、五十嵐さんは、園内の「お花係」である。もともと草花を植えたり置物を設置したり樹木の剪定をしたりすることが好きで、園内の植物や花壇を「どうぞ」とさわらせてもらうようになった。「空間のもつ力は大きい」。「当初は、家の担当職員はあまり関心が向かなかったが、最近は、かわいいとか私もお花買ってこようとか、感想を言ってくれて、関心をもってくれるようになった」。桑原園長は言う。「以前、子どもが荒れていたときには、花も傷んでいた。今は落ち着いているのが当たり前。将来その落ち着きが思い出されるだろう」。五十嵐さんは子どもたちと一緒に草花にかかわる。今では家の担当職員も一緒に、各家で花やハーブや野菜なども育て、より季節を感じられるようになってきた。

五十嵐さんが大事にしていることの一つに、職員のメンタルケアとサポートがある。月に1回職員会

議の日に職員へのニュースレター「Clover」を発行し、配っている。職員がほっとしてくれるといいなと願いながら。筆者も何号か見せてもらったが、美しい色のイラストに彩られ、ここにも五十嵐さんのセンスがあふれていた。表面は学園の暮らしの中で日々感じることを綴った五十嵐さんから職員へのメッセージ、裏面が今学園にとって必要と感じる心理の情報提供を含めたコラムの引用となっている。いただいた号の中にはこんな言葉があった。「植物と子どもは一緒ではないけれど、世話をするプロセスには通ずるものがあると思います」「私自身もなるべくどのお家にも入れるように、邪魔にならないようにお手伝いできたらいいなと思っています。私は子どもたちのエピソードを職員さんたちと話せる時間がとても好きです。今年度も、皆さんが素敵なカラーを発揮できるように私自身も頑張っていきたいと思います」(2014年4月号)。「この場所での一つひとは、私たち大人にとっては仕事かもしれないです。しかし、子どもたちにとってはこの場所が人生であるということをやっと心に刻んでおきたいと思っています。そして、子どもも大人も“あなたがいてくれてよかった”とお互いに思えるような毎日を築いていけるように頑張りたいと思います」(2014年6月号)。大人が元気でないと、子どもは支えられない。子どもに届く養育のために職員のエンパワーに心を砕く実践が、ここに芽吹いていた。

五十嵐さんは、この場にとけこんだ人でありたいと言う。心理職という「特別な人」ではなく。だからこそ、生活の中でできることをし始めよう、心理職という異質な部分もあると思うが、まずはチームの一員として入れてもらえるように。そう思い仕事をしている。

彼女のさりげない仕事のかたちをもう一つ描きたい。心理士が職員の相談にのったり話を聴いたりする日がある(名称は「心理学習会」)。ところが担当職員は、余裕がないとその日が用意されていること

が意識からはずれがちである。五十嵐さんは「どうぞみなさんおいでください」という意味で、四季の家(管理棟)のウッドデッキのところに、緑色の旗をそっと掲げておく。すると職員は「ああ、そうだ。今日だった。では午後にも、五十嵐さんのところにお茶を飲みに行こうか」といった具合に思えるのだという。養育を支えるまなざしとそのかたち。「すてきでしょ」と話された桑原園長のまなざしもさすがにまたたしかである。印象に残る話をうかがった。

(3) 舞鶴学園を支える人々

舞鶴学園にもさまざまな支え手がいる。地域にも多様なできるかたちで貢献し地域交流を手がけてきているが、桑原園長によると「小舎制になってから地域の人が入ってくるようになった」。月に1回日用品を届けてくれる会社、にぎりに来てくれるお寿司屋さん(お店のカウンターの中に子どもからのメッセージを貼ってくれている)、中高生が通学に自転車を使うのでよく傷むが、車に道具を積んで自転車の修理をしてすーっと帰っていくボランティア、七五三のときの貸衣装・アルバム提供、絵本の読み聞かせ、おやつ作り教室、茶道、書道等、「まわりの人には本当に支えられている」。また、日韓交流を始めてからは、地元の在日の方が来てくれてハンゲルの学習会をしたり。子どもが習字をしたいと声をあげて書道教室が始まったり。子どもが「家の大人とはちがう大人」に敬語を使ってみたりして、よい経験になっているという。

「助けていただく」関係をつくるのが、結果、地域の関係者を「育てる」ことでもある。

あるとき施設に「何かしたい」とやってきた地元のイタリアンのシェフとは桑原園長が話し合い、「できること」をみつけてもらったことがある。「あまり時間はない、でも自分に何ができるだろうか」と言ってくれたシェフ。施設で子どもの誕生日はどうしているかと尋ねられたので、その当日にケーキ

にろうそくを立てて祝っていますよ、と言うと、「それだ!」とひらめいた様子。誕生日の近い子どもが集まって、そのお店に行き、祝っていただくのはどうかということになった。高校生は自分たちで行く。小さい子は職員と行く。そのことが決まって「全員集会」で話をした。最初に出向くことになったのが高校生数人だったので「しっかり行ってきなさいよ、続くかどうかはあなたたちにかかっているのだから」と送り出した。緊張しておめかしして出かける子どもたち。レストランは貸し切りでなく、一般の人たちに混じっていただくイタリアン。とてもよい経験になって続いているようだ。

さて、舞鶴学園を訪問した際、「養護施設研究グループまいつる since1963」と書かれた、50周年記念(2013年作成)のクリアファイルをいただいた。舞鶴学園にボランティアでかかわる学生たちのこのグループは、京都大学・同志社大学・立命館大学・京都府立大学・大阪工業大学・池坊短期大学・平安女学園短期大学・京都華頂大学・華頂短期大学・龍谷大学・京都女子大学・京都産業大学・大谷大学・花園大学のネットワークに育ち、継続され、歴史が積まれている。月1~2回、学園に通って子どもたちと遊び、勉強を手伝うほか、園の行事にも参加する。実はこれはそもそも桑原園長が同志社大学の学生のときに発足したもの。支援に訪れた学園の貧しさを目の当たりにし、教会に集まる学生たちに声をかけ、次第に複数の大学の学生たちが加わったものという。卒業後、学園の職員やタンポポハウスで保育士として働く元グループメンバーもいる。所属した人数は50年間で300人以上という。活動に加わった元グループメンバーの一人は「ここでの体験は人生の背骨になっている」と語る。現在、そのグループのリーダーをつとめるのは、なんと舞鶴学園から上記の一つの大学に進学した卒園生であるという。このことをうれしそうに話す桑原園長。卒園生は桑原園長に会いたくなると「次に京都にはいつ来

るの?」と聞くという。桑原園長と子どもとの間につながるたしかなときの糸。活動が園を育て、園が活動と人を育てる。「一緒にごはんを食べれば、どのみち支払うのはぼくなんですけどね」と桑原園長の目尻がゆるんだ。

おわりに

大切なものはいつも静かにそっと在る。本稿を終えるにあたって、筆者が胸に響かせる言葉である。実は、東京育成園の河原さん、濱さんにインタビューをお願いしたとき、「いやいや、自分など何もしていませんし、何も語れませんから…」と固辞された。お仕事ぶりを垣間見てきた筆者は「そんなことはないです」と思いをお伝えし、ようやくお話をうかがう時間を頂戴した。元職員であった筆者も、今回あえてお聞きしなければうかがえなかったお気持ちや考えに出会うひとときとなった。舞鶴学園では、鈴木さん、五十嵐さんは「私のこんな話でよろしいのかどうか」とインタビューのはじめにも後にもおっしゃった。筆者はずでにひらめいていることが多くあったので、即座に「そんなことはありません」「いやいやすてきなお話でした」と即答した。

養育を支える「周辺」とは、きれいに「コア」と「周辺」が分かれているのではなく、相互に信頼をベースに接点を持ち、ときに混じり合い、ときに距離を置き、「助けてもらってありがとう」を含め、よい味わいを醸し出すもの、という言葉が浮かび上がってくる。そんな中に子どもたちがいる。

子どもは子ども同士のかかわりあいと大人との接点を軸とした実体験の総体によって育まれる。育ちは未知数であるが、そうした子どもの育ちは大人を励ましてくれる。「困らせる」子どももまた、大人の力量を育ててくれる。職員も子どもも、周囲によって育てられてきた。職員同士も支え合うことを現場で学んでいる。気づかないうちに支えられている人やもの、環境、社会があることに気づく。子どもの

記憶に残るかわりがどこにどうあったかは、子ども自身が決めること。もちろんよいことばかりではないが、目に見えるもの、見えないもの、さまざまな人との接点、育ちと育てを取り囲むゆるやかなつながりが子どもを育てていく。ゆえに信じたい。子どものもつ力、大人もまたもっている「育つ力」を。

ある里親さんの話が忘れられない。今回はインタビューが施設関係者に限定となったこともあるので、家庭養護を担う人材のエピソードに最後にふれておきたい。あるフォーラムで聞いたものだ。

ある里親家庭に子どもがはじめて委託されることになったときの話である。委託前。児童養護施設に交流のために出かけても、まだ小さな子どもの心が揺れて、すんなりと会うかたちがとれないことがあった。「今日はダメか」とあきらめて、頭ではわかっていながら少しがっかりして夫婦で施設の駐車場の、高校生の娘が待つ車に戻ってきたときのこと。娘に報告するとすぐに、「そんなにかんたんにウチの子になれるわけじゃない。その子の人生を考えてみればわかるでしょ」と娘。大人より子どもに近い年齢の娘に養育者になろうとしている自分が教えられた、ハッとしたという話である。このお嬢さんは子どもの委託後も、自分よりも小さいその子どもとのかわりがとても上手で、「娘を見直しました」とのこと。またこの里父さんは、小さいときから住んできた地域だが、自分は地域の大人たちが「キライ」だった。けれども、委託児童を迎えたら、周囲がみんなその子どものことを気にかけてくれ、驚いた。迎え入れたこの子のためにも地域の人たちとの関係をとろうと認識が変わった。「そしてたら案外話ができるんだよね。この地域が好きになった。人間変わるもんだねえ」と笑っておられたのだ。

養育の周辺の「厚み」とは、すでにそこに在るものに気づくと見えてくる不思議なプレゼントなのかもしれない。

今回、本稿を編む機会を与えられた筆者は、施設の実践に心を傾けて働きを積んでこられた方々のかけがえのない語りを通して、これまで考えの中に入っていなかった「まなざし」の存在や、そのご本人には出会っていても知り得なかった「まなざす人の思い」に気づかされた。歴史の中から見えてくる先人たちのまなざしも思い返された。また、支援現場に宿る重層的な構造や、おそらく他の現場にも生きると思われる、これからにつながる大切なヒントに出会った。そして何よりもそれぞれの方の魅力に新たに会わせていただいた。

物事の見え方、とらえ方の転換は人を育てるという。筆者自身の乏しい力ではお一人おひとりのすべての仕事の価値を描けるはずもなく、側面を言語化させていただいたことにつきなが、これまであまり言葉にされてこなかった部分を含め、大切な部分、さまざまな思いを言葉にして聞かせてくださったことに深く感謝している。この場から発信するとともに、じっくり、ゆっくり反芻しながら、うかがったことの意味を考え続けていきたい。

参考資料

- 東京育成園・舞鶴学園各ホームページ
- 東京育成園『東京育成園紀要』(2014年)
- 舞鶴学園ニュースレター「くつろぎ」(年2回発行)
- 「子供たちの笑顔が財産」舞鶴市民新聞記事(2013年11月22日付)
- 桑原教修「〈談話室〉生きづらさを抱えた子どもたち」週刊福祉新聞記事(2013年7月1日付)
- 五十嵐未沙子「施設の生活を高めるために」2013年度子どもの虹情報研修センターでの実践報告資料参照。

キーワード：生活のいとなみ

人間の育ちと安心を支え、後に思い出せる原体験として刻まれるいとなみは、日々の居場所である生活の場での実体験とケアを担う大人との関係の中にごそある。舞鶴学園の桑原園長は、次のように指摘する。人は、生まれ来る条件によってその育ちの保障が変わってはならない。子どもたちの自立は生まれてからの育みがその土台にあって、初めてその力を培っていく。その基底は日々の「生活のいとなみ」である。家庭にあって施設にあってそのことは保障されなければならない。施設が一般のそれよりも劣っていいはずはない。

II それぞれの“周辺の厚み”

ふつうのおばさんの滋味



うつみしんすけ

児童養護施設 川和児童ホーム 臨床心理士 **内海新祐**

はじめに

私たちの施設には、「生活支援員」と呼ばれる職種がある。以前は「補助職員」と呼ばれていたのだが、「補助」というと「なければならない良いのだけれど」といったニュアンスで受け取られかねないということで、数年前からこの名称が用いられるようになった。独立した独自の職種(常勤職)なのである。

私たちの施設は昨今の「小規模ケア」や「家庭的養護」へのムーブメントが起こるずっと前から、それを旨とした養育を行ってきた。なるべく特定の大人が継続的に柱となって、一般家庭に準ずるサイズで子どもと過ごしていこう。この理念を体現すべく、生活単位(ホーム)あたりの子どもの人数は4~6人ほどで、建物の作りも「普通のおうち」よりやや広めになっているだけである。この形態の中で、生活支援員は重要な役割を果たしてきた。私は以前、この方たちについては別のところで書いたことがある(内海、2013)が、そのときはどちらかというこの職種の果たしている機能全般に軸足があった。本稿では、個々の「人」を描くことに比重を置き、それを通してこの方たちの役割や意味について考えてみたい。

「生活支援員」の概要

だがその前に、この職種の概略を素描しておこう。生活支援員のおもな仕事はその名の通り、生活のサ

ポートをすることである。具体的には午前中の掃除と午後の夕飯づくりが仕事の柱になる。合間あいまに庭の草取りや洗濯物の取り込み、アイロンがけなどもやる。要するに家事全般である。生活というもの根幹は、こういった家事全般の繰り返しによって支えられているが、これを手堅く続けることは実はそう簡単ではない。特に「家庭的」な養育形態の中では、子どもの生活の担当職員(以下「担当者」)は一人で多方面の役割を総合的、同時並行的にこなすことを求められる。ゆえに、彼らのみでは難しいので、それを支える職種が要るのである。

生活支援員はごく普通の主婦である。子どもから大人からも名前で「○○さん」と呼ばれ、職種としては「支援のおばさん」と通称される(なので以下「おばさん」と記す)。30代~70代までと年齢層は幅広い。一つのホームに対して週4回ほど、日ごとに違うおばさんが入る。

おばさんたちの仕事は五感すべてにかかわる。たとえばほどよく掃除された部屋や庭(視覚)、気持ちよく乾いた布団や衣服(触覚)、また、料理を作る匂い(嗅覚)、音(聴覚)、出来上がった彩り(視覚)、味(味覚)など、ことさらに意識はされないが、意識されない分、深いところに沁み込む。おばさんたちが「日々同じようなことをしている」姿自体も、いつのまにか一つの風景のようにになっている。子どもたちはそういうおばさんたちに、担当者に対する

時とはまた違った、構えていない顔をふっと見せることがある。

職員にとっても同様で、担当者は同職種と話をする時とは違った心持ちで話をするようである。おばさんたちは、家事をする中で自然に子どもの様子を見たり、関わったり、また担当者といろいろな場面を共有したりする。それにより共通の話題が増え、担当者の悩みや迷いに即時に添うことができる。担当者だけではない。おばさんたちの持つ情報は豊富で具体的なので、おばさんたちはどの職種とでもすぐに話を通じ合わせることができる。このような情報の流通が、担当者の孤立化や独善化を防ぐ、いわゆる「風通し」にもなる。

だが、以上述べたような機能は、生活支援員というポジションに就きさえすれば可能になるわけではない。「風通しを良くする」という機能は、下手をすると「噂話や中傷の流布」になる可能性と背中合わせである。また、担当者との役割分担の呼吸合わせが上手くいっていないと、「担当者とは違ったかわりができる」「子どもが異なる顔を見せる」といった肯定的側面が、「かわりの統一性がない」とか「子どもが態度を使い分ける」などといったネガティブな意味に反転してしまう。そうなるとサポートどころか良好なチーム形成の妨げになりかねない。どんな職種でもそうだろうが、意味のあるものになるかどうかは、結局はやはり「人」のあり方である。

さて、そのあり方とはどのようなものか。本稿では最も勤務歴の長いお二人にご登場いただき、その一端を示せればと思う。

真剣さが生む創意

原田洋子さんは生活支援員の仕事を始めて約30年になる。施設がこの職種を設けたときからおり、現在古希も過ぎた「最長老」である。原田さんは長いこと勤めているが、「子どもが好き」だの「子ど



原田洋子さん

もがかわいい」だのといった安っぽい表現を軽々しく口にしない。また、妙なフレンドリーさでいきなり子どもに話しかけたりもしない。むしろ出会ったばかりの子とは喋らない。時間をかけてじっと見て、この子に対して自分のところがどう動くかに正直であろうとする。自分も相手も人間だから、そんなに簡単には近づけないのだ、と原田さんは言う(原田、2009)。そのかわり、「この子とはこんなふうにつき合おう」と決めたときは、真剣につき合う。それは誰に対しても変わらない。多くの職員は原田さんの直言にたじろいだ経験を持つ。その勢いは「園長も裸足で逃げ出す」とも噂される。その真剣さは子どもへのかかわり方についても、単に“向き合う”だけではない創意を生む。

もうずいぶん前のことだが、乳児院から3歳過ぎの幼児がやってきた。措置変更の日、原田さんはたまたまその子が暮らすことになるホームに入っていた(どういうめぐり合わせか、原田さんはこういう重大な場面をまるで吸い寄せられるかのように、なぜか居合わせてしまう)。乳児院の職員が帰っていくのを泣き叫びながら見送るその子を目の当たりにした原田さんは、「やだねえ、やだねえ、あれは何度見てもつらいねえ」とその後しばらく口にしていた。自分の立場で何かできることはないか、そう原田さんが一所懸命考えて出した答えは、「毎日その子の顔を見に行く」だった。別のホームで仕事をした後、お花を一輪持っていくとか、担当者にちょっと

お漬物をあげるとか、何かの用事にかこつけて、5分、短ければ2～3分、毎日その子の顔を見に行った。何か月かの間、誰に言うでもなくそれを続けていたが、知っている職員は知っていた。そんなことが何になる？などと問う者はいなかった。

また、ある高校生が担当者とは一切口を利かなくなってしまった時があった。部活もバイトも辞めてしまい、学校も休みがちとなった。精神的な失調の影響もあり、担当者には取り付く島もない時期が長く続き、この先の展望をどう開いていったらいいのか、私も見当がつかなかった。まともにかかわりを持てる職員がいなくなり、万事休すかと思われたころ、ふと、原田さんが月一回くらいならこの子とお茶をしてもいいと言った。何につけ反応の薄いこの子であったが、美味しいものは「おいしい」と素直に言える美徳があった。ちょっといいお店で、となれば一層だった。それは皆も知っていたが、そう思いついて実行しようという者は他にいなかった。毎月、予算を決めて、原田さんのお昼休み中に行って来られる範囲で、この子が行きたいといった場所へ行く。一時間、ケーキを挟んでほとんど何もしゃべらないこともあったそうだが、傍から見れば異様であろうそのような光景も、原田さんは特に意に介さない。むしろ「ヘンな子！」と面白がっているふうでさえあった。この子も楽しくお喋りするわけでは全然ないのに、その時間は楽しみにして出かけていく。それだけですべてが好転したわけではむろんないが、表情の乏しかったこの子の生活に潤いがもたらされたのは確かだった。そして、そのことに支えられたのはその子だけではなく、職員もだった。

金髪高校生から甘えん坊まで

勤続25年になる安倍明美さんは、身体は小柄ながら、今や希少種となった「肝っ玉母ちゃん」の系統に属する方である。北関東の自然豊かな土地で学童期までを過ごし、米軍基地のある横須賀で赤線の



安倍明美さん

隣接する地域を見ながら青春期を送った安倍さんは、ちょっとやさそつとのことでは動じない。居室からゴキブリが出現し、若い女性職員や日ごろ生意気な男子高校生がギャーギャー騒ぐなか、「まったく、何を騒いでんだか」とでも言いたげに平然と素手で捕まえる。また、グローブのようなその手は出来立ての焼きそばを触ってもやけどをしならしく、毎年バザーの出店で200～300個の焼きそばをパックに詰めていく際、素手で——昔前より衛生管理の厳しくなった今ではビニール手袋をするようになったが——次々とあつという間に詰め終わってしまう。ゴキブリから焼きそばまで、無類の速さで取り扱うその手は、職員の間では「ゴッド・ハンド」として畏怖とともに語り継がれている。その素早さは60代後半になった今も健在である。

安倍さんにとっては少々ヤンキー風はカワイイものとしか映らないようで、担当者の前では細く剃った眉毛の眉間に不機嫌そうなしわを寄せている無口な金髪高校生も、「安倍ちゃん、焼きそば作って」などと、安倍さんの背後をしつこく付きまとう。延々と続く散漫で他愛もないその子の話に安倍さんは適度に付き合い、時に「あんたね、そういう話はこういう場ではしないもんだよ」「学校サボるんじゃないよ！」等叱りつけながら、バイトに出かける前のその子に時々おにぎりや焼きそばなどを作っている。「あんな話をするしかないのが今のあの子の身の丈なんだと思うよ」と安倍さんは言う。

その安倍さんは、どういうわけかいつもお菓子を
持ち歩いている。誰かにあげるため、というのをど
れくらい意識されているのかわからないが、ミーテ
ィングや引き継ぎの際などにもお煎餅やら飴やらが
次々と出てくる。傍から見るとドラえもののポケッ
トのようですらある。ある時、これに気づき、目を
付けた小学生がいた。安倍さんの包丁の音(安倍さ
んの千切りは生活支援員の中でも随一の細さであ
る)や声が聞こえると、調理場へ行き、「ねー、安
倍ちゃん、飴ちょうだい」と言うのである。学校で
も施設でも他児とうまく遊ばず、どちらかという
と苛められがちな子であった。安倍さんは「ちゃんと
ホームでおやつもらってんでしょ。ご飯もちゃんと
食べるんだよ!」と、押さえるべきことは押さえつ
つも、「ほれ、どうぞ」とやっていた。小学校高学
年になっても、中学生になっても、この子の条件反
射のような「飴ちょうだい」は続いた。だが、その
子が高校生になってしばらく経ってから、安倍さん
がふと「あの子、なんか近頃“飴ちょうだい”って
言わなくなったね」と言った。気が付けば、同学年
の友だちを作り、その仲間たちとお喋りで帰りが
遅くなることもしばしばとなっていた。

おわりに

こんなふう気長な時間スパンの中で、子どもた
ちの小さな成長に気づき、ゆっくり見守っているの
が生活支援員である。原田さんや安倍さん以外のお
ばさんたちも、それぞれの持ち味と動き方で、子ど
もとのかわりの質に彩りを添え、生活の味わいに
深みを与えている。だが、その点においてはやはり
年季がものをいう部分があるように思う。仕事の年
季、また自身の人生の困難から逃げずにその時々を
生きてきた年季である。もちろん、年月は単に重ね
ればよいというものではない。たとえば掃除一つと
っても、テーブルを拭く際、花瓶をどけずに花瓶の
底面に沿って丸く拭くか、持ち上げて拭くか、どち

らを選んでも掃除は掃除である。ブリのアラを煮る
際にも、塩を振って湯引きなどしなくてもブリ大根
は出来上がる。省けるひと手間など、掃除にも料理
にもいくらでもあるが、これをどのくらい惜しみ、
また惜しまずに一日一日の仕事を重ねるか。そのこ
とに原田さんも安倍さんもとても意識的であった。
そして、そのような積み重ねの中で、「原田さんは
お寿司だって握れる」「安倍さんが掃除するとやっ
ぱり綺麗になる」と誰もが認める確かな技術を手に
し、それにより職員の信頼を勝ち得てきたのである。
単に人柄だけではない。技術者なのである。

また、先に述べた「噂話や中傷の流布」となる危
険性をいかに避けるかにも意識的であった。自分の
目と耳を使い、支援員同士で十分に話し合い、時に
担当者とも意を決して向き合うなど、情報の質を
「歩いて確かめた」という。ここには、いい空気
の中で子どもに生活させたい、自分たちが入ったこ
とで少しでも担当者が楽になって欲しい、という心根
がある。このようなおばさんたちが体現する、計算
高くはない気遣いや創意は、「エビデンスに基づく介
入の効果」とは別次元の滋味があるように思う。福
祉や教育の専門家のみの集団ではその味は出せない
のではないかと私は思っているのだが、この文章
でそれを表すことはできただろうか。

参考文献

- 原田洋子(聞き手・安川実)(2009)「施設の職員である前
に人間であることを願う」季刊児童養護Vol.40(1) p39-43
- 内海新祐(2013)「児童養護施設の心理臨床—『虐待』の
その後を生きる」日本評論

キーワード：風通し

大舎制が多数を占めていた我が国の施設養護も、今は「家
庭的養育の推進」を掲げる政策のもと、小規模化(施設の
小規模化・生活単位の小規模化)が進んでいる。この際に問題
になることの一つが養育の孤立化や独善化である。「家庭的
養育」は養育実態の見えにくさ、また場面に即応したサポ
ートの得られにくさを構造的に孕んでいるため、いかに外部
からの視点や具体的な支援を組み込んで「風通し」を良くする
かがその成否の鍵となる。

Ⅲ 国内外の動向

なぜ、親たちとつながることができるのか

—「大阪子どもの貧困アクショングループ(CPAO)」見聞記



すぎやま はる
ルポライター 杉山 春

《かほさん》

20代半ばと思われるその女性は、大阪市内にある築100年を越える長屋風の日本家屋の1階で、折り鶴を折っていった。珪藻土で壁が塗り直されたり、縁側が足されたり、あちこちに手が入り、おしゃれな空間だ。以前住んでいた芸術家夫婦が改装したという。

女性は、白いカーディガンに、スリムなジーンズをおしゃれに着こなした美しい人だ。女性の傍にはワンピースを着た4歳になる娘のRちゃんが鉛筆を握りしめ、画用紙に勢いのある線を走らせている。この家の女主人のMさんが「上手ね」と話しかけると、幼女は嬉しそうに頷いた。Mさんは、40代。ショートカットにカジュアルなパンツ姿でボーイッシュな印象だ。

横に座った、大阪子どもの貧困アクショングループ(CPAO)代表の徳丸ゆき子さんも「犬かな」と話しかける。花柄のTシャツにワンピースを重ね着して、ロングヘアの耳元にはピアスが揺れている。「犬だよ」と幼女は答える。

その様子を見ていた母親にもようやく笑顔が見えた。

母親のかほ(仮名)さんは3カ月前に子育てが苦しいとCPAOに連絡をしてきた。だが特に相談ということもなく、女性たちは座り込み、おしゃべりを重ねる。

ここは、普段はMさんの活動の拠点だ。無農薬

野菜を作る近隣の農家を手伝ったり、野菜を仕入れて知り合いに送ったり、玄関先で売る。自然の恵みを街中に届ける活動をしている。偶然知り合った、徳丸さんからシングルマザー母子と一緒に過ごせる場所が必要だと聞いて、無料で提供している。

親子は1週間に1回、ここに顔を出し、CPAOのメンバーと過ごす。今日来てから2時間ほど。はじめは2人とも表情が乏しく、特に母親のかほさんは顔色が悪く、緊張していた。だが、今では少しくつろいでいる。MさんがRちゃんに「そうめんを食べる？」と尋ねると、Rちゃんが頷いた。「じゃ、買い物に行こう」と誘うと、Rちゃんは明るい表情で立ち上がり、Mさんと出かけていく。

「少し横になったら」と徳丸さんは、かほさんに声をかけ、座布団を幾つか並べる。かほさんは横になった。とても疲れている様子が見て取れた。

《二つの餓死事件に押し出されて》

CPAOは、2013年5月25日に大阪市内で徳丸ゆき子さんと子ども支援の関係者により、立ち上げられた。

その前日、大阪市北区で28歳の母親と3歳の息子が餓死していたという報道が流れた。女性は夫のDVから逃げ出し、身を隠していたという。電気、ガスが止められた室内には「最後にもっとたくさん食べさせてあげられなくてごめんね」というメモが

あった。もう1つ、徳丸さんには気になる事件があった。2010年に大阪市西区のマンションで1歳半の男の子と3歳の女の子が、風俗店に勤務する母親から50日間放置されて餓死した。

「先進国と言われる国の都会の真ん中で、何が起きているのかと、怒りが湧いて仕方がなかった」と徳丸さんは言う。二つの事件に押し出されるように活動を始めた。

ホームページによれば活動内容は4つに分けられる。

- 1: 調べる〈調査、レポート作成〉
100人の困難を抱えるシングルマザーへの聞き取り調査
- 2: みつける〈アウトリーチ〉
 - ・大阪市内3カ所での夜回り
 - ・その他、調査、メディア、広告
- 3: つなげる〈相談コーディネート〉
 - ・skypやLineを活用しての相談事業。
 - ・行政や民間の窓口につなげる。
 - ・行政や民間の窓口への同行
- 4: ほぐす〈直接支援〉
 - ・母子の居場所: 季節ごとのイベント、キャンプ、畑などの自然体験、学習支援
 - ・CPAO子ども食堂: 子どもが無料でみんなと一緒に食事を作って食べられる場所の開設。

この日、徳丸さんがかほさんと過ごしていたのは、「ほぐす」にあたる。

「母子の支援で行政が一番足りていないのはアウトリーチで、そこをやりようと思っていました。でも、実際にアウトリーチをしてみると、一人一人、問題も心のあり方も複雑で、簡単には行政につながらない。小さい時からSOSを出しても、冷酷な対応しかされてこなかった。人間不信、社会不信が強い。そこをほぐしていく活動が必要でした」。

1対1でお茶を何回かしているうちに、実は借金がいっぱいあると言い出す母親がいる。夏のキャンプで朝方まで焚き火を囲んで話すうちに、抵抗があ

った生活保護を受けようと思うと言い出す母親もいた。CPAOが関わる母子のリストは100組以上。緩やかな関わりから緊急介入を必要とするものまで、状況はさまざまだ。

母子がCPAOにつながるルートで最も多いのが、徳丸さんのテレビ出演だ。徳丸さんは立ち上げ直後から、テレビに出演、新聞・雑誌から取材を受けたり寄稿をしたり、講演活動など、注目されてきた。

かほさんも仕事を失った直後、徳丸さんの出演番組を見て連絡をしてきた。ある行政の非常勤職員として2年契約で働いていたが、1年目が終わる直前に契約を切られた。雇用終了までに1カ月を切っており、次の仕事は見つからなかった。

徳丸さんはすぐに面接をして、CPAOがシングルマザー100人を対象に行っている調査への協力を要請した。協力という形だと面接が上下関係にならない。聞き取ったかほさんの半生は壮絶だった。

《繰り返される暴力》

かほさんは、5歳の時に母親を亡くした。父親は心身に疾患を抱えており、かほさんを満足に養育できなかった。ネグレクト状態が続いたため、父の兄弟に預けられた。だが、そこで激しい暴力を体験する。親戚を転々として、最後は父親の元に戻された。

父は幼いかほさんが言うことをきかないと、ものを投げつけるそぶりで脅かした。親族に父の行為を訴えると、「そんな度胸はないから大丈夫だ」となだめられた。学校の先生などよその大人に告げる勇気はなかった。

中学時代に不登校になった。経済的に困ると「売春」でお金を調達した。

15歳で父親の起こした問題で住居がなくなり、再度父の兄弟の元に戻る。18歳の時にネットでRちゃんの父親と知り合う。20歳で妊娠、出産を機に一緒に暮らした。

当初、Rちゃんの父親は、バツイチで正社員だと

言っていたが、やがて妻帯者であることが判明した。仕事はしていなかった。ギャンブル依存があり、激しい罵倒と暴力の末、お金を奪われる。行政に相談に行ったが、シェルターには入れてもらえなかった。その間、かほさんは、風俗で仕事をした。

その後、Rちゃんの父親と別れ、一旦、実父の元に戻る。だが、Rちゃんの目の前で父から包丁で切りつけられた。この時、かほさんは激しい殺意に襲われる。父を殺そうと争っている時に、Rちゃんが泣いて我に返った。警察に、父親に刺されたことを訴えたが、帰る場所がないからと、父親宅に戻された。その後も、Rちゃんの目の前で、繰り返し暴力を受けている。

かほさんには解離の症状がある。突然幼女のような口ぶりになり、数時間続くことがある。そんな時、Rちゃんは、急に立ちあがり、隣の部屋に行ってしまう。この解離的な症状は、幼い頃から命の危機に関わるような暴力体験や見捨てられ体験を繰り返し受けてきたためだと思われる。

激しい不安症状も抱えていた。一旦不安になると、ものを壊したり自分の手に噛み付いたりする衝動を抑えられない。死ななければならないという思いがこみ上げてくる。「死ぬ時はRも一緒」と徳丸さんに告げている。

不安症と診断されたのは中学時代で、Rちゃんの目の前で処方薬の大量服薬をしてしまう。そして徳丸さんに「薬を飲んだ」と電話をしてくる。徳丸さんはCPAOの仲間に声を掛け、車でかほさん宅まで駆けつけた。

当初は母子生活支援施設につなげようとしたが、居続けることはできなかった。オーバードーズの後には、Rちゃんは児童相談所の一時保護を受けた。この間、かほさんは生活保護の受給を始め、3カ月後、Rちゃんと再度、暮らし始めた。

かほさんには深い行政への不信がある。以前、ハローワークに行った時には、「なぜ、子どもをおろ

そうとしなかったのかとまで聞かれた」と徳丸さんに訴えた。

本当にハローワークで、そう言われたのかどうか、筆者にはわからない。多様な困難の中で育った人たちは、他人や社会全般を信じる力がとても弱い。行政の窓口の人たちの言葉が実際以上に冷たく感じられたり、非難されたように思えることも稀ではない。不信感を抱える人たちが、社会につながることはこの上もなく困難だ。だからこそ、ほぐしが必要になる。

かほさんの場合、行政につながれば安心できるわけではない。

「生活保護を受け、お金が定期的に入ってくるようになると、お金があると落ち着かないと言いついて、映画の『アナと雪の女王』を親子で上映期間中に6回も見に行く。ずっと経済的な危機を生きてきて、お金があることに慣れないのです。次の支給日まで1週間でお財布には100円しかないと言いました。その方が自分らしく、気持ちが落ち着くと言うのです」。

こうした時は米や野菜を渡す。食料などは活動の支援者たちから寄せられている。

特に、お寺やおつクラブは強力な味方だ。活動を紹介した新聞を見たお寺の住職から連絡を受け、お供えのおすそ分けを母子にしたいと提案された。そのお寺は、送料を自分で出して母子家庭に送るようになった。その活動は、全国の約100のお寺に広がっている。1つのお寺が母子家庭2、3軒に月に1回お供えのお下がりを送付する。お寺と母子家庭のつながりが深まり、見守りにつながる。支援者から直接物資を送ってもらうので、倉庫は必要ではない。

2014年2月21日、CPAOが100人の困難を抱えるシングルマザーにインタビューをした報告書が発表された。それを読み、改めて驚くのは、暴力と貧困の親和だ。どの証言も暴力で埋めつくされている。

本来、「暴力被害」と「お金がないこと＝貧困」は、別のことだ。お金がないことに関して、実は、

社会的な支援はそれなりに準備されている。主体的にさまざまな社会的資源を組み合わせ、子どもとの生活を守り、危機的な時期を乗り越えることは不可能ではない。だが、困難を抱えたシングルマザーは主体性を奪われている。その理由の一部は暴力を受けたことによるのではないか。

《支援が生まれた場所》

ところでCPAOの活動に、発想の多様さ、支援者の確実な広がり、対象者とのつながりの安定感を感じる。徳丸さんが支援現場を歩いてきた18年間の経験の蓄積は大きい。だが、それだけでなく、20歳前後にイギリスで過ごした体験があるという。

小学時代から好奇心が強く、自己主張もはっきりしていた徳丸さんは、小学校中学年以降、学校に馴染めなかった。国内の大学には進学せず、89年、叔母が暮らしていたロンドンに行った。語学学校に通い、大学で心理学を学んだ。当時のイギリスでは若者の社会的包摂問題が浮上していた。

フラットをシェアして住んだのは、テムズ川の南側の、カリビアンなどのカラードが住む地域で、周囲にストリートチルドレンの支援者や詩人、活動家などがいた。

「日本で普通じゃないと言われていたのに、イギリスではユニークで素晴らしいと言われる。自分がそれほど変ではないことや、変でもいいということを知りました」。

仲間達は親身だった。彼氏と別れて落ち込んでいると、ずっとそばにいてくれる人がいたり、食事に誘ってくれる人がいたり。体験したことのない濃密な関係に慰められた。

「イギリスの弱者は寄り添わなければ生きられないのだと思います。母子と一緒に過ごす時、当時のイギリスの若者たちの支え合いが参考になります」。

だが、一方でこうも言う。

「日本ではどんなに親しくても8割くらいしか心

を開かない。イギリスとは違います。ただ、日本の関係が悪いわけではない。相手を尊重する美徳なんだと思います」。

徳丸さんはかほさんとつかず離れずの関係を続けている。ぐっと入り込まないから、むしろ必要なときにSOSがくる。

状況が困難な家庭に対しては、月に1度、突撃で家を訪ねる。男性が転がり込んでいることもある。子どもから、男の人のお酒の瓶で部屋がいっぱいになったと聞かされる。男たちもアルコール依存などの困難を抱えている。

徳丸さんは支援をしている対象者が「死んでしまうこともあるかもしれない」と言った。一見冷たく聞こえるが、その人の命はその人のものという尊敬のようなものがあるように筆者には思えた。

「人を救えるなんて思えない。専門家にならず、素人っぽい感覚でサポートしたい。子どものころからさまざまな複雑な経験を重ね、もうこの世に生きていることがしんどいと言う方がたくさんいます。本人のつらさは本人しかわかりません。生きてほしいとは思いますが、でも最後は仕方がないと思います。少しでも生きて、一瞬でも楽しい時間を持ってもらえたらと思うんです」。

そう徳丸さんは言った。

キーワード：大阪子どもの貧困アクショングループ (Child Poverty Action Osaka=CPAO)

2013年5月に、見えにくい子どもの貧困を明らかにするために立ち上げられた。徳丸さんは、元国際NGOセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの国内スタッフで、現場支援だけでなく研究職も務めた。CPAOは、直接支援だけでなく、調査にも力を入れており、長期的には政策提言、制度改革を視野に入れている。

代表：徳丸ゆき子 <http://cpao0524.org/wp/>

住所：〒554-0025 大阪市生野区生野東3-13-3

Ⅲ 国内外の動向

イギリスでの子育て —さまざまな支援に支えられて



つちやあすか
土屋明日香

サウサンプトン大学 非常勤講師

はじめに

私はここ数年イギリスで生活している。こちらで妊娠、出産を経験し、現在2児の母となった。そのような立場からイギリスでの子育て経験について話してみたい。

子育てと言えば「親がどう子どもを養育しているのか」が中心と考えられがちである。しかし外国に来て違う文化の中に身を置いてみて気づいたことは、親が行う子育てというものは、一見とても個人的なものに見えながら、実はその社会が子育てをどのようなものと捉えているのかということに左右されているのだということである。ある社会の中で子育てがどう考えられているのか、そしてどのような施策がなされているのかという土台の上に、それぞれの家族が子どもを育てている、というのが、子育てをめぐる社会状況である。

本稿ではまずイギリスの子育てに関する社会的な状況について紹介し、次に子育て支援に取り組む専門家のあり方について述べる。その後非専門家、すなわち普通の大人が子どもの育ちに関わっているのかについての例を示す。なお、イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つからなり、それぞれ独自の施策を取っている。私が住んでいるのはイングランドの一地方都市であるので、私の体験もこの地域に限ったものであることを最初にお断りしておきたい。

子どもをめぐる社会支援

イギリスのある大手スーパーの宣伝文句にEvery little helps (どんな小さなことでも助けになる)という表現がある。イギリスで行われているさまざまな支援もこれに似ている。イギリスは、歴史、文化の厚みはともかくとして、けっして経済的に豊かとは言えず、潤沢な公的資金を投入して支援政策を打ち出す、というわけにはいかない。その中で何を重要なものと考え、どう支えていくかが模索されている。ここでは、医療、教育、経済、福祉という4つの側面から社会支援を説明したい。

イギリスの医療は、NHS (National Health Service 国民保険サービス)により原則無料、イングランドでは処方薬のみ自己負担となっている。妊娠、出産時に必要な医療もすべて無料である。その分検査などは必要最低限のものに限られてはいるが、何らかの異常が発見されればより詳しい検査がなされる。また処方薬の自己負担があるイングランドでも、妊娠期間中は例えば風邪などのように直接妊娠に関係しないものであっても無料となる。そのため自己判断で市販薬を買うよりも医師の診察を受けて薬を処方してもらう方が安くつくということになり、妊婦の健康管理が容易となっている。この優遇措置は出産後1年間続く。また子どもは16歳まで、16歳以降も学生であれば18歳まで処方薬は無料となる。必要な予防接種もすべて無料で提供されている。

教育面では、義務教育の小・中学校のみならず、高校も教育費が無料である。就学前の保育・教育の費用は、3歳以上の子どもたちは全員、低所得家庭の子どもたちは2歳から週15時間無料となっている。ただしそれ以下の年齢を預かる保育園は助成が少ないため非常に高額な保育料となっており、例えば私の近所のある保育園では9時から5時まで預けると1回39.25ポンド(約7,300円)かかる。もし平日毎日利用すれば約17万円だ。そのため子どもが小さいうちにフルタイムで復職するのはよほど収入がよくなければ難しい。ただしその分職場の雇用状況も柔軟であるので、パートタイムで以前のポストに復職する例も多いようである。

経済的な面では、消費税があげられる。イギリスの消費税VATは現在20%とかなり高い。しかし日本の消費税とは異なり全ての物やサービスに一律に掛けられているわけではない。例えば食料品や本などは0%である。子どもに関するものも同様で、子どもの服や靴は0%、教育サービスは0%、チャイルドシートやベビーカーは5%となっている。子どもの養育に必要なものには税の負担がかからないようになっているのだ。

福祉的な面ではpaternity leaveという、父親が最大2週間産休をとれる制度があり、かなり利用されている。この父親の産休は出産時から取ることになるので、出産予定日前後はいつから休みとなるかわからず、正直仕事の調整が難しい面もある。しかし社会的に広く認知されているため、職場の理解は極めてよい。最近ではキャメロン首相やウィリアム王子も産休をとり、見本を示している。

このようにイギリスでは両親ともに子育てに参加できるよう、また子どもを育てることにそれほどお金がかからないような支援が整っている。親がどんな境遇であろうとも子どもが健やかに育つよう社会が支援すべきであるという考えがそこに現れている。

専門家による支援とOfstedによる監査

上に述べた社会支援が土台とすれば、専門家はそれを具現化し、実際の親子に関わる実践家である。イギリスで特徴的なことの一つは、専門家とは、あくまで親や周囲の人たちと子どもとの関わりがよりよいものとなるよう支援する存在である、という方向性が強く打ち出されていることである。

例えば子どもが誕生する時を例に挙げよう。イギリスでは出産後できるだけ早く自宅へ戻す方針が取られている。早い人では出産して数時間後にはもう帰宅している。なぜかと言えば、病院よりも家という住み慣れた環境で子育てする方が負担が少ないと考えられているからである。その代り退院すると同時に自宅に地域担当のMidwife(助産師)が訪問に来て、赤ちゃんと母親の健康状態をチェックするとともに自宅の保育環境を観察し必要な指導を行う。すべての新生児の自宅訪問を即座に行うことは大変な労力であろうが、病院の中で育児指導より子どもが実際に生活する場に踏み込んで支援する方がたしかに子育て環境の質の向上につながる。助産師の訪問は生後28日ごろまでに数回行われ、その後Health Visitorという地域の子ども専門の保健師の訪問に引き継がれる。保健師は地域のSure Start Centreに所属している。これは妊娠時から4歳までの子どもたちと親たちのために教育、医療、子育てを包括的に支援する役割を担う施設であり、各地域のニーズに合わせて訪問指導、育児グループの開催、発達相談会、親への情報提供などさまざまなサポートが行われている。保健師は最初は訪問をして子どもの発達をチェックし子育ての相談にのるが、その後Sure Start Centreの発達相談会や育児グループに来るよう促す。そこには同じく子どもを持つ親たちが集うので、自然に知り合いができていく。こうして出生時から自宅、そして地域へとすみやかに移行していく体制ができていっているのである。

教育でも同じことが起こっている。教師は家庭に出すお便りで、今週のカリキュラムの予定や子どもたちの学んでいる様子の報告とともに、今週家庭ではどのような教育的関わりをしてほしいかの提案をする。これは子どもに課される宿題とは違う。授業のテーマが例えば「春」であれば、自然観察をしたり、春についての本を読んだり、庭で一緒に草花の種を植えてみたりといった教育的な配慮を持った活動を子どもと一緒にすることを促しているのだ。そこには教育とは学校だけで教えるもの、あるいは子どもだけが取り組むものではなく、生活の中で学ぶことなのであり、学校や教師はそれをサポートする存在である、という強い主張がある。

イギリスのもう一つの特徴は、子どもの教育や保育に関わる専門家によるサービスはすべて、政府から独立した機関によって監査されていることである。イングランドではOfsted(キーワード参照)という。Ofstedの調査官は定期的に保育や教育の現場を訪れてその質を評価し、その結果は公表され誰もが参照できるようになっている。また利用者がOfstedに通報して緊急の査察を要請することもできる。

例えば自宅で子どもを預かるChild Minderには資格は必要ないが、開始時にはOfstedによる審査を受けなくてはならない。審査に合格し登録された後も定期的に査察があり、保育の内容が評価される。そのため無資格とはいえ気軽にできるものではない。なおChild Minderの利用料は、地域にもよるが1時間4ポンド(約750円)程度である。

私も地域で保育園、幼稚園、学校を選ぶ際に、このOfstedの報告書を多めに参考にしてきた。もちろんOfstedによる査察にも改善すべき点は多々あるものの、子ども相手の保育・教育が密室化するのを防ぎ、政府・地方自治体から独立した第三者の目で実際に実践内容が観察され評価されているという制度がもたらす安心感は大きい。

普通の大人が担う地域の子育て

このような社会的支援という土台、専門家による支えを得ながら、各家庭の子育てが行われている。ではそれぞれの家庭で孤軍奮闘しているのかと言えばそうではない。身近に住む人たちと互いに支えあい、その網の目の中で各家庭の子育てが成り立っている。ここでは地域社会での子育てを担う一般の大人の姿として、3つの例をあげてみたい。

〈ボランティア〉

Sure Start Centreでの子育てグループとは別に、幼児とその親たちが来て遊ぶ場を提供するボランティアの子育てグループが地域で定期的に開かれている。その主な担い手は教会だ。イギリスでは教会は宗教的な場としてのみならず地域の公共の場としても機能しており、教会に所属している方たちに限らず広く一般の人たちが参加できる活動をボランティアで行っている。子育てグループもその一つである。一般向けのためキリスト教色を強く打ち出してはおらず、ベールをかぶったイスラム教の女性たちも気兼ねなく参加している。ここでスタッフとして切り盛りしているのは、地域に住む一般の方たちだ。Sure Start主催のグループは何らかの資格をもった専門家によって運営されているが、ボランティアのグループはそうではない。それだけによりアットホームで気軽な雰囲気がある。私もいくつかの子育てグループに参加させてもらったが、行くと明るく迎え入れてくれるスタッフの方たちの笑顔に、何度ホッとしたことかしれない。

〈友人関係〉

ボランティアの方々よりもっと身近な存在は、やはり友人たちである。子育てグループに参加することで同じ年頃の子どもを持つ地元の親子の知り合いが増え、友人関係が広がった。これは母親

教会の子育てグループ。
親にとっても子にとっても憩いの場だ。



に限ったことだけではない。私の地域の Sure Start Centre では父親のための育児グループ、Dad's Group が毎週土曜に開催されている。ここは全くの男性グループ、支援スタッフも男性保育士だ。最初は、日ごろ子どもとずっと一緒に過ごしている母親に少しでも一人でホッとできる時間を持たせてあげたい、という思いから参加し始める父親が多いようだが、通っているうちに子どものみならず父親同士も仲良くなり、常連になっていく。時には会を離れて夜の飲み会が企画されるなど、職場での付き合いとは違った友人関係が広がる。そんなつきあいの中からそれぞれの父親観、育児観が垣間見えることも多い。ある時父親仲間の一人が「妻がフルタイムの仕事に就いたから、自分が子どもといられる時間を増やそうと、給料を8割に減らして週4日勤務にする交渉をして、通ったんだ。」と言ったそうである。彼はかなり高度な専門職であり、その年齢であればキャリアを求めて過重労働をすることもまれではな

い。しかし彼は夫婦の仕事と育児のバランスを考え、より育児に貢献することを選んだ。かといって仕事を「あきらめた」わけではない。自分にとって仕事においても家庭においてもベストな選択をした、ととても満足しているのである。なるほどそういう解決の仕方もあったか、と夫は驚いたそうである。

お互いの子育ての工夫を分かち合い、支えあえる友人たちがいるおかげで、子育ての悩みもずいぶん減ったし、地域で一緒に助け合いながら暮らしているんだなあという実感が深まった。かけがえのない存在である。

〈Foster Carer (里親) と Adoption (養子縁組)〉

最後にもう一つ、地域で普通に暮らす人たちが担っている子育ての例として、Foster Carer (里親)、Adoption (養子縁組)をあげたい。イギリスに来た当初、とても驚いたのは、なんらかの事情により実の親が育てることができなくなった子ど

もたちとの養子縁組を求める広告が地元の新聞に掲載されていたことである。「ジョン 4歳 明るく社交的な男の子です…」といった子どもの特徴が記され、この子との養子縁組に興味のある場合は連絡を、と地方自治体の管轄部署の連絡先が示されている。地域によっては顔写真を掲載している場合もある。このような広告は賛否両論あるものの、子どもたちと新しい家族をつなぐ役割を果たすものとして一定の理解を得られているようだ。

イングランドではケアが必要と判断された子どもたちの多くが、一般家庭で育てられている。法的には親子関係を結ばないものの、自宅に迎え入れて一時的に養育を担う里親によって育てられている子どもたちが75%、養子縁組をして新しい家族の一員として生活している子どもたちが5%となっている。里親や養子縁組についての説明会も定期的開催され、経験者が体験を語り伝えている。里親になること、養子を迎えることが地域の中に根付いている。

私が出産したばかりの友人の家にお手伝いに行ったときのことだ。生まれたばかりのわが子を抱きながらおしゃべりしている時にふと彼女が「いずれこの子にも兄弟ができるといいな、と思っているの。でも私はもう年も年だし、二人目を産むのは大変かもしれないから、養子のことも考えているのよね」と言った。養子を迎えることが家族の一つのあり方として考えられているのだ、と実感したときだった。

里親も養子縁組も子育ての一つの姿であり、普通の人たちが普通の生活をその子たちとともに送っていくものである。それぞれの方々の努力はさるものながら、これだけの規模で受け入れが可能となっているのは、子育ての負担をできるだけ少なくしようとする政策、親子の関わりを側面から支援する専門家、そして友人やボランティアとい

う地域社会の支えというイギリスの子育て環境があつてのことだろう。

おわりに

子育てに奔走していると、つい子どもと自分しか見えなくなる。しかしこうして振り返ってみると、地域の仲間を支えられ、専門家の方々に支えられ、イギリスの支援政策に支えられて子育てをしているのだ、ということが改めてよく見えてくる。

もちろんイギリスの現状がバラ色ということではけっしてない。子育てに完璧はないように、子育てを支援することにも完璧はない。それぞれの立場で現状を分析し、知恵を出し合い、限られた資源を十全に活かしてきって今よりも少しでもよいものに、と工夫を凝らしていくことが、次の世代のよりよい子育てへとつながっていく。専門家だけが、政府だけが改善すればよいというものではない。私たち一人ひとりが、手の届く範囲で小さな工夫をすることが、いまこの地域での子育ての厚みと豊かさにつながっていくのではないだろうか。イギリスの例がアイディアの種になれば、幸いである。

参考文献

Department for Education・2014・Statistical First Release Children looked after in England (including adoption and care leavers) year ending 31 March 2014・A National Statistics publication

キーワード：Ofsted

the Office for Standards in Education, Children's Services and Skills の略称で、教育・子どもに関わるサービス・技術教育を行う機関を審査する組織である。審査を行う性質上、政府とは独立して動いている。定期的に、あるいは抜き打ちで学校や保育施設を訪れ、授業の見学、子どもや職員へのインタビュー、記録文書のチェックなどさまざまな方法で総合的に審査する。評価は教育内容のみならず、管理職のリーダーシップ、学校環境の安全性、よい振る舞いの奨励など多岐にわたる。評価は 1. Outstanding(優秀) 2. Good(良) 3. Satisfactory(並) 4. Inadequate(不適切)の4段階。なお、イングランド以外の地域にも同様の組織がある。

Ⅲ 国内外の動向

子どもの声を届ける仕事

—子ども・若者アドヴォキットの 近年の活動から



しぶやまさし
関東学院大学社会学部 准教授 澁谷昌史

はじめに

多様な人たちとともに暮らす方法を学ぶなら、カナダは最適な国だ。カナダ最大の都市であるトロント市は、人口の半分が移民で構成されている。カナダ全体で見ても、5人に1人は外国生まれである。

異なる価値観はときに激しく衝突しかねないが、それではお互いが気持ちよく過ごしていくことは不可能になってしまう。だからカナダでは、「人権の尊重」をみんなが守るべきルールとして掲げている。これにより、価値観の違いから誰かに対して不平不満を持ったとしても、それを差別や抑圧という否定的な力に変えていかないというコンセンサスを得ようとしている—それがカナダ社会の大きな特色だ。

このルールを維持していくためには絶えざる努力が必要になる。たとえば、差別や抑圧が発生したときに、それを社会的な問題としてみなして対応する仕組みを用意しておくこともその一つだ。この仕組みはカナダ社会のさまざまな場面で見られるが、今回は、オンタリオ州(以下ON州)にある子ども・若者アドヴォキット(以下PACY)を紹介したい。

PACYは、州法である「子ども・若者アドヴォキット法」に根拠を置いた、人権擁護専門の機関である。ただ、すべての人権問題に対応するのではなく、とくに社会的に危害を受けやすい立場にある子どもたち(子ども家庭サービス法に規定されるサービス及び特別支援学校を利用している子どもたち)

に対応する、特別な機関である。

PACYの特技は、子どもが直接的・間接的に自らの意見を表明する機会を作り、子どもを取り巻く環境を変え、そのウェルビーイング向上を図っていく取り組みである「子どもアドヴォカシー(以下adv.)」である。年間3~4千件程度の個別相談に対応しているほか、同じような相談が重なる場合は、政策変更をターゲットにした活動も活発に行っている。このとき、スタッフが前面に出て発言をすることもあるが、子どもたち本人が直接社会へ声を主体的に発信する役割を持つことも非常に多い。「adv.のすべての局面において子どもたちが意味ある参加をしていくこと」は、根拠法にも定められた、PACYの重要な活動原則である。

以下に、最近の活動のいくつかを紹介するが、いずれも、人道主義的価値、子どもと社会に関する深い知識、子どもたちのパートナーとしてアドヴォカシーを展開する高いスキルに裏打ちされており、優れたアート(技芸)といってよいものである。あなたが子どもたちのパートナーを目指す一人なら、PACYマジックから目を離すことができなくなること請け合いだ。

だからこの短報では、組織的な話はこれくらいにして、「adv.の実際」を伝えることに紙幅を割こう。そもそもadv.がどのようなものかについては、「子どもの最善の利益」をテーマとする本誌75号が大



アーウィン・エルマン氏
(PACYウェブサイトより転載)

いに参考になるであろう。当該事務所の概要については、いくらか情報が古くはなるが、最後に記した日本語参考文献から学んでほしい¹⁾。

私の「真実」のライフブック²⁾

—私がほしいものは、ほかの子たちと同じようであるということだけだ。自分の人生が記録され、ファイルに入れられている—いったいどんなふうに感じるか、君にわかるだろうか。(カイル、21歳)

長年、社会的養護経験者の自立支援に従事してきたアーウィン・エルマンにとって、本人たちから寄せられるメッセージは、それまで何度も耳にしてきたことと基本的に同じものであった。だから2010年のある日、アーウィンが社会的養護から20歳前後で切り離されてしまう若者たちの話を聴いていたときのこと、実はそういう問題や考えは1980年代からずっと聴いてきたことと本当に似たものであるという話をしたのだった。ある参加者が沈黙のあと、こういった—「そうだね、アーウィン。それで、どうするつもり。今、アーウィンは州のアドヴォキットなんだよ」³⁾。

法体系が日本と異なるON州では、社会的養護にとどまり続ける多くの子どもと実親との法的な関係は切断され、州が「親」の役割を果たす。しかし、ON州の一般家庭の子どもが平均で25歳くらいまで

親元で過ごすのに対し、社会的養護経験者ももっと早くに一切のケアを失う。「親」にその実情を知ってほしい、わかってほしい—そんな願いとともに子どもたちがPACYにつながってくる。

これをきっかけに、アーウィンはたくさんの社会的養護当事者と会った。関係する行政や団体の人たちとも会った。その過程で、ユースから明確なメッセージが発せられるようになった—「今こそユースがアクションを起こすときだ」³⁾。かくして、2011年3月に、「社会的養護を離れるユースの公聴会」が企画された。

州議会という「家」で、「親」に「親元」を離れて自立していくことの大変さを伝えるためには、きちんとした準備が必要だ。このために、4人のユースがPACYに雇用された。この4人が州を飛び回り、あるいはSNSを使って、現在あるいは過去の社会的養護サービス利用者やその家族、友達、専門職と話をし、自分たちの声を議会に届けるというアイデアを広めていった。

各地から声が届き始めてまもなく、社会的養護を離れる局面以外のことも、これを機に伝えたいと多くの当事者が願っていることがわかってきた。それを受けて、社会的養護にいる間の悪戦苦闘についての声も受け入れ始めた—それらすべてがリーヴィング・ケアで役立つものだと、企画チームが考えたからだ。

公聴会が近づくにつれ、助けが必要になった。30人のボランティアがチームに加わり、公聴会チームは質問の仕方やプレゼンターのサポートについて知恵を出し、ソーシャルメディアチームは、イベントを撮影し、インタビューを行い、そしてイベントチームは、資料調達を一手に引き受け、アート作品のディスプレイをし、イベント参加者を歓待する役割を受け持った。そして2011年11月、カナダで初めて、当事者が議会で公聴会を実施。2日間の開催で、延べ800人が参加。社会的養護での経験を、話し、

歌い、踊り、詩を朗読して「声」にした。

しかし、これだけでは終わらない。集まった183件のメッセージを見直し、公聴会の振り返りもした。気が滅入る仕事—メッセージの多くは、あまりに悲痛なものだった。

—入院と精神科への通院の代わりに、夏休みのキャンプや学校で行く旅行や家族とのヴァケーションを楽しめればよかった。でも、CAS(筆者注：子どもを保護する機関)は決してそれを認めなかった。(シェリル・グレイ、31歳、社会的養護経験者)

—里親家庭にいたとき、私は疎外されていたように感じていた。里親には実子がいて、自分はその子たちとは別に扱われているように感じていた。どうしてそこでのケアが私に疎外感を抱かせたのか、私を部外者のように感じさせたのか、里親が理解していればいいなあと願っている。(匿名、19歳、社会的養護経験者)

—私はうつ状態にあると言われ、裁判所命令によって、抗うつ剤を飲むように命令された。そのことがずっと後遺症として残っている。(クレア、25歳、社会的養護経験者)

調査の専門家の助言を受け、こうした声を6カテゴリー—①私たちは傷つきやすい、②私たちは孤立している、③私たちは自分たちの人生から取り残されている、④誰も私たちのためにいない、⑤ケアは予想できないもの、⑥ケアは終わり、私たちは闘う—toまとめた。そして、本人たちの声が詰まった、公聴会の報告書「私の『真実』のライフブック」ができ上がった。ここまで引用したメッセージは、報告書に掲載されているものである。

ここでも当事者がボランティアとして集まり、デザイナーや編集者と緊密に連絡を取って、チームで構成を考えた。メッセージの中から、カテゴリーの本質を最もよく表しているものを引用し、そのほかの文章もすべて本人たちが書いた。専門職ではない、当事者だからこそ発信できる思いや実情が豊富にバ

ッケージされたこの報告書は、大きな社会的反響を呼んだ。

このライフブックには、実態を訴えるものだけでなく、提案事項も盛り込まれている。「私たちは、安全で、守られ、同じ人間として尊重される」といったゴールが8項目にわたって記され、直ちに実行に移すべき提言6項目も含まれた。これが、2012年5月に州議会に提出され、2013年1月にはさらに詳細な提言をまとめた報告書も作成されている。

ユースとPACYの協働はさらに続くのだが、とりあえずこんな取り組みが効果をあげ、自立生活に向けて50名の移行期ワーカーが雇用されたり、高校卒業率(現在50%以下)を一般的な水準まで引き上げることの行政責任を明らかにしたりと、いくつかの政策変更を引き起こしている。

希望の羽

—ファーストネーション(先住民族)のお祭りであるパウワウとか、心身をきれいにするための建物であるスウェット・ロッジとか、自分の文化に関することに私が参加したいと思っているかどうか、一言も話す機会はなかった。代わりに、教会へ通った。(匿名、17歳)

これは、上述の「ライフブック」に出てくるファーストネーションの若者のことばである。ファーストネーション出身者が社会的養護に占める割合はおよそ半分—子ども人口に占めるファーストネーションの割合がわずか数%であることに鑑みれば、劇的に高い。自殺も絶えないし、薬物やアルコール依存問題も根深い。個人の問題だと理解する諸氏もいるかもしれないが、それは違う。ヨーロッパからやってきてファーストネーションを絶滅の対象としてきた非人道的態度がカナダ社会に生き続けてきたという暗く冷たい社会的事実を無視して、この問題は理解できない。

とくに、子どもの教育は同化の手段として巨大な

力を発揮した—ファーストネーションのコミュニティから子どもを引き離し、カナダ社会への同化・統合を進めるための寄宿舎学校が作られたのだった。が、そこで生み出されたものとは、ファーストネーションの若者の幸せな未来などではなく、子どもたちのきわめて高い自殺率であった。ファーストネーション固有の文化と白人文化の間で心理的に引き裂かれるというトラウマ体験を「遺産」として、カナダで最後の寄宿舎学校が閉鎖されたのは、1998年のことである。このトラウマ体験が、生き残ったファーストネーションに抗い難い抑圧感や絶望感を刻み続けている。

ひとたび生まれたトラウマと社会的環境の格差を解消するのは、そうそう簡単なことではない。社会のメインストリームから切り離されたファーストネーションと会ったことすらない人たちの中から、「何であいつらのせいで足を引っ張られなければならないのだ」といわんばかりに、ファーストネーションを厄介者扱いする態度が現れるようになる。

—こうした問題(筆者注：ファーストネーションをカナダ社会へ強制的に同化させること)が、たいていの場合、ファーストネーションについての教育を受けたこともなければ私たちと直接会ったこともないような人たちによって熱っぽく激しく語られていることには、びっくりさせられる⁴⁾。

—本当の学校というものを一度も見ることなく大きくなる子どもがどのようなものなのか、私は話したい。希望を捨て、4～5年生でドロップアウトし始める子どもたちについて伝えたい。ただ、それだけではなく、よりよい世界を作り上げようという、私たちコミュニティで生まれた決意についても伝えたい⁵⁾。

アーウィンは、アドヴォキットになると、各地でファーストネーションの子どもたちから話を聴き始めた。子どもたちの声がわかり始めると、すぐにファーストネーションの各組織と関係形成をし、2010

年にはON州にある133のファーストネーションのコミュニティを組織しているチーフズ・オブ・オンタリオ(Chiefs of Ontario)の協力のもと、第1回のユース・フォーラムをトロントで開催した。初めてファーストネーションの若者から社会的に組織された形で声が発信されたのだ。

取り組みはあつという間に拡大した。PACYは、州北部にも事務所を開設し、社会的養護当事者と協働したときと同じように、ユースを雇用し、当事者の輪を広げていった。その過程で、国連・子どもの権利委員会に提出する報告書「私たちの夢だって大切—ファーストネーションの子どもたちの権利、生活、教育」の作成をユースが主体的に行い、38本の当事者の手紙がここで公表されることも行われた。各方面への働きかけがアドヴォキットとユースの双方によってなされ、ファーストネーションの子どもたちに何が起きているのかを知らしめる努力が重ねられた。この間、弱冠13歳で自らの居留地での学校設立を求めて連邦政府に対するアクションを展開し、ユースのリーダー的存在となっていたシャネンを交通事故で失う悲劇もあった—しかし、シャネンの願いを胸に皆が結束し、2011年4月には首都オタワに集結し、「シャネンの夢」を旗印にパレードをした。結びつきはどんどん強まった。

—私はあの唸るような音が始まった瞬間のことを決して忘れない。上階で結束を固めていた若者たちが、床—それは私たちがいた部屋の天井でもあったのだが—を踏み鳴らし始めた。音は大きくなっていく。しばらくの間、それが何なのか私たちにはわからなかった。もっと大きな音になり、ドラムや心臓の鼓動のような、もっと強烈な音になっていく。音がどこからやってきているのかがわかってくと、支えられているかのような感覚が部屋の中で感じられるようになった。それで私たちの多くは、笑い、そして涙した。それは、変化を示す音だった。



2014年11月に開催された希望の羽フォーラムの様子
(YouTubeより)

2013年5月、「希望の羽」と題されたフォーラムが始まった。合計8日間開催され、ON州にある92の北部のファーストネーションのコミュニティのうち、64コミュニティから参加者が集まった。そして、州や連邦政府の上層部の人たちを前にして、本人たちが自分たちの思いや経験を共有していく。上記引用は、そのときのことをアーウィンが書いたものである。みんなが集まり、みんなが希望の羽となって、ともに力を発揮する。そこで生まれたエモーショナルなパワーに支えられ、当事者一人ひとりの体験が会場に響き渡る様子が見えるだろうか。

さらに、2014年11月、国連・子どもの権利条約制定25周年にあわせて、再度、希望の羽フォーラムが開催された。今度は、陪審員にファーストネーションがあまりに選ばれていない現状について訴えた—ユースが司法・警察関係者を前に並べて、なぜファーストネーションの価値観を反映した司法が必要なのかを訴えるというのは、前代未聞だ。その様子はウェブを通して全世界に伝えられた。今でもユーチューブでそのときの映像を見ることもできる。この文面だけでは伝わらない、強い情動が伴った訴えも聴くことができるので—全編英語ではあるが—少しだけでも覗いてみてほしい⁶⁾。

こうした活動は報告書としてまとめられ、関係する機関へ提出されている。PACYと提携関係にあるファーストネーション団体もカナダ政府を相手に大きなアクションを起こしており、ファーストネーシ

ョンの子ども家庭サービスに変化を起こすうねりは最高潮に達しているようにも感じる。

私にも言いたいことがある

障害を有する子どもの権利にかかわる問題は、別に今になって気づかれたものではない。PACYでは、本人たちとその家族から、何年もの間、何本もの電話を受けてきた。「希望の羽」が動き始め、ようやく次のグループとして、障害を有する子どもたちにスポットがあてられるようになったというのが実際のところだ。

やると決めたら、やるべきことは同じだ。核になる実行委員会を立ち上げ、本人たちが声をあげる機会を作り、話し合いの中心に当事者たちがいる状況を作り上げればよい。その成果が、「私にも言いたいことがある」プロジェクトだ。

ON州は、30万人近くいる、障害を有する子どもたちに個別化されたサービスを受ける機会を作ろうとしてきた。しかし、アーウィンは、「州が善意に基づいて作った計画と、障害を有する子ども・若者が実際に経験していることの間には、驚くほどのギャップ—深淵がある」という⁷⁾。

2014年12月初旬の国際障害者デイの日には、このプロジェクトのユースリーダーたちが、当事者として、あるいはその家族として、自らが体験したことを発表した。その様子は、やはりライブストリームで世界中に生中継された。今の社会を基準にして、

できない人・変わった人にラベルを貼っていくやり方そのものを問題視するアプローチは、障害ではなく社会のあり方を問うものだ。日本の子ども家庭福祉は、ディスアビリティ・スタディ⁸⁾と切り離されて解説されている感があるが、果たしてこれをどう受け止めるだろうか。

このプロジェクトでは、2015年春まで、本人やその周りにいる人たちからの声が集められている。この短報が世に出る頃には、このプロジェクトの成果が文書化され、ウェブサイトを通してアーウィンのいう「深淵」がどのようなものか、聴いて、見ることができるようになっているかもしれない。

共生社会と子どもの人権擁護機関

ON州にも差別はある。PACYの受益者となる子どもたちは、今でも過酷な環境下を生きている。だから別に、ON州の子どもたちの方が幸せだということはない。ただ、PACYの存在は、ON州がこれからどんな社会を作りたいかという見通しを提示している。それは、決して専門機関が権利擁護を独占するような社会を理想としているのではなく、advを「人々のライフスタイル」として定着させようというものだといえる。鍵を握るのは、専門家ではなく、一般の人々なのだ。

一方、日本ではどうだろうか。「タイガーマスク運動を見ればわかるように、社会的養護のことはみんなが応援している」「障害を有する子どもや先住民族への補助や支援は行われている」という向きもあるかもしれない。ただ、市井の声に耳を傾ければ、そうした言い分の裏側に、「助けられている側が文句をいうな」「コストを意識させ、もっと本人たちに努力させる」といった本音が貼りついていることもあるようだ。

どんな過去や環境があっても、それを甘んじて受け入れ、不平不満を口にせず、黙々と社会的な安定や成功を求めるプロセスに美德を求め、それを社会

構成員が尊重すべき規範としていくのなら、ひたすらに頭を下げて生きることが「被援助者」の生きる流儀になっていくか、もっとありそうなことには、非・反社会的行動を増やし、その対応のために多くの社会的コストをかける悪循環に入っていく。この先に、政府が掲げる共生社会は存在するのだろうか。

注)

- 1) (社)子ども情報研究センター編(1999)『子どもの権利擁護と自立支援—カナダ・オンタリオ州の取り組みに学ぶ—』(はらっば臨時増刊第220号)／高橋重宏編著(1998)『子ども家庭福祉論』有斐閣。
- 2) そもそも「ライフブック」とは、社会的養護サービスを利用する子どもたちが過去にどういった経験をしてきたのかを記したものであり、子どもたちのために作られ、渡されることになっている冊子である。国立武蔵野学院に設置された研究会が発表した「育ちアルバム」がこれに類するものである(<http://www.mhlw.go.jp/sisetu/musashino/>)。
- 3) My REAL Life Book : Report from the Youth Leaving Care Hearings. (「私の『真実』のライフブック」報告書)p.5より。
- 4) FEATHER OF HOPE : A First Nations Youth Action Plan. (「希望の羽」報告書)p.30より。
- 5) A Tribute to Shannen Koostachin (「シャネンへの追悼文」)より。シャネン本人のこぼれ。
- 6) PACYのウェブサイトからアクセス可能。
- 7) Opinion Editorial : Ontario's Child and Youth Advocate wants to hear from young people with special need. (「私にも言いたいことがある」の開始をアナウンスした文書)より。
- 8) 「障害学」と訳される。エイブリズム(障害者差別)を扱う学問である。この国内学会である「障害学会」の名称表記に従い、本稿では「障がい」ではなく「障害」を採用している。

※英語文献はいずれもPACYウェブサイト(<http://www.provincialadvocate.on.ca/>)にて2014年12月に閲覧。

キーワード：共生社会

内閣府では、子どもや若者を育成・支援し、年齢や障害の有無等にかかわらず安全に安心して暮らせる「共生社会」を国民全体で形成する必要性を認めている。国が5年を1期として発表・実施している「少子化社会対策大綱」は、共生社会を実現していくために国が用意したロードマップの一つとして理解できる。

IV 特別座談会

“周辺の人々”が問いかける 「専門性」

第IV章では乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設の各施設で長年ご活躍の4名の先生方にお集まりいただき、“周辺の人々”が巧まずして果たしている役割とは何か—“周辺の人々”についてその働きと子どもの育ちにおける意味を、そして“周辺”が問いかける専門職の専門性について等々、幅広く語っていただきました。司会進行は本誌編集委員長 横堀昌子先生。また、本誌担当編集委員 内海新祐先生にもオブザーバーとしてご臨席いただきました。

※本文中は敬称略とさせていただきます。



(左より)西田先生、安川先生、横堀先生、河尻先生、摩尼先生

- | | | | | | |
|------|--------------------|---|---------|-------------|----------------------------------|
| ●出席者 | 河尻 恵 (50音順) | 児童自立支援施設 福岡県立福岡学園
児童自立支援専門監 | ●司会進行 | 横堀昌子 | 青山学院女子短期大学
子ども学科 教授、本誌編集委員長 |
| | 西田 篤 | 広島市こども療育センター 心療部長、
情緒障害児短期治療施設 愛育園 園長、
本誌編集委員 | ●オブザーバー | 内海新祐 | 児童養護施設 川和児童ホーム
臨床心理士、本誌担当編集委員 |
| | 摩尼昌子 | 乳児院 ドルカスベビーホーム 施設長 | | | |
| | 安川 実 | 児童養護施設 聖霊愛児園 統括施設長 | | | |

「子どもが泣き止んで眠るまで」

—その辛抱強さに脱帽、A子さんとの30年

横堀 本日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。早速ですが、本誌の特集テーマに沿って話を深めたいと思います。まず、乳児院 ドルカスベビーホームの施設長でいらっしゃる摩尼先生、いかがでしょう。“周辺”とお聞きしてどのような方を思い浮かべられますか。

摩尼 乳児院でコアとなるのは看護師、保育士、児童指導員といった専門職の方々です。でも、子どもの面倒を見ると言う点では、さらに多くの方々がかかります。子どもは掃除機が大好きで、後について



回ります。洗濯ものを畳む時にもまとわりついて、仕事はなかなかはかどりません。でも、そんな子どもたちを優しく受け入れてくれる掃除の人や洗濯の人がいます。子どもたちには、叱らない人、注意しない人と映っているようです。院外にまで話を広げると、子どもたちと出かける散歩先に農園があり、収穫物を分けてくださる人もいます。それをその日のうちに食卓に出してくれる栄養士と調理の人がいます。

そんな大勢の大人に囲まれて子どもたちはすくすくと育っています。…そうですね、その人たちの中で今回のお話を頂戴した時にまず心に浮かんだのはA子さんのことでした。かれこれ30年近くになるでしょうか。近所に知的障害者の施設があり、その園長先生から「とても子どもの好きな女性がいるから使ってくれないか」と頼まれたのです。以来、毎日午前中いっぱい、いろいろなことで私たちをサポートしてくれています。例えば、子どもが泣き止まない時に「ちょっと抱いてて」とお願いすると、A子さん、本当に子どもが泣き止んで眠るまでいつまでも抱っこしてくれます。その辛抱強さには皆脱帽です。なかなか泣き止まないといつイライラしてしまうのが普通なのに。子どもにとって、A子さんの腕の中は、ありがたい、暖かくて優しい、安心・安全のゆりかごとなっているようです。「職員の名前をいっこうに覚えな」と園長先生は言われましたが、ドルカスでは初めての子どもでもちゃんと「〇〇ちゃん」と名前を呼んで抱っこしています。不思議ですね。

横堀 その方にとっても、子どもとの関わりは意味あるものなのですね。そしてこれまでずっと続けておられる。

摩尼 はい。もう50歳ほどになりますが、初めてホームにやってきた時と同じ「18歳」のまま変わらない感じです。ホームに来ることが生き甲斐になっているようです。

横堀 それにしても、掃除や洗濯の人は「叱らない人」…ですか。なるほど、子どもは正直ですね。

摩尼 彼女たちのざっくばらんな言い方も子どもには新鮮に映るようです。中にはちょっと乱暴な言葉遣いが気になる方もいたのですが…。ある親御さんからそのことでお叱りを頂戴したことがあり、「ああいう喋り方ですが、お子さんはあの方が大好きですよ」と言いましたら、しばらく様子を見られた後にご納得いただけたのか、「分かりました」と。そ

んな彼女たちとは休みの日に一緒に食事をして、いろいろな話を聞いたりしています。「この子どもは幸せね」「職員は皆優しい」と言ってくれます。

横堀 ありがとうございます。A子さんはじめ“周辺の人々”が子どもたちに温かい眼差しを注いでおられるようです。では児童養護施設 聖霊愛児園の統括施設長でいらっしゃる安川先生、お願いします。

「普通のおじちゃん、おばちゃん」が子どもは大好き
—お泊まりから始まった“周辺の人々”との交流

安川 私は聖霊愛児園に来て34年になりますが、当時のことからお話ししたいと思います。当初、職員に話したことがあります。「私たちは選んでこの施設にやっ



てきた。子どもは選ぶ自由もなくやって来た。その違いはあるが、お互い人生の一部を一緒に生きていくのだから、どっちが悪いとかいうのはやめよう」と。当時、園は相当荒れていましたから。そして、問題の多くは子どもではなく大人の方にあるな、と感じましたので、それからずっと自分自身に目を向けるための勉強会を続けてきました。児童指導員、保育士などの専門職ばかりではなく、子どもと一緒にいる訳だからと全員で続けてきました。職員会議も学習会も然りです。そうこうするうちに、皆の子どもへの眼差しが変わって来たのでしょうか。盆・正月に自分の家に帰ることのできない子どもが当時は多くいましたので、自宅に連れて行ける人は連れて帰ろう、と呼びかけたのです。すると結構な人が手を挙げてくれました。事務職の人も調理の人も。牧歌的だったので、児童相談所(以下「児相」)もあまりうるさく言わない時代でした。Kさんとい

う事務職の方は、そのお泊まりを通じて、当時小学4、5年の女の子との交流が始まりました。そして今も続いています。その子はもう40過ぎですが、いつのまにかKさんを“お母さん”、ご主人を“お父さん”と呼んで、家族ぐるみで親しくしています。

横堀 素敵なお話ですね。子ども自身が選んだ人を“お母さん”と呼んで、長くおつきあいされている。

安川 でも、紆余曲折はあったようです。一時疎遠になっていた時にKさんが「ちょっと来なさい」と彼女を呼んで話を聞いてみたら、借金問題が明るみに。看護助手として老人ホームで働くしっかり者だったのですが、淋しかったのでしょ、買い物依存症だったようです。そこでKさんが助言したり保険を解約させたりしてようやく借金ゼロに。それから、ちょっと様子がおかしいと思う度に呼んでは話を聞いて…そんな関係がずっと続いています。Kさんばかりではありません。お泊まりから始まった子どもと非専門職職員とのつながりは園の文化となって根付いています。子どもは栄養士さんや調理師さんとも自然につきあい、そのつきあいは子どもの退所後も続いています。今、いちばん子どもに人気があるのはボイラーのおじさんでしょうか。大人を選ぶのは子どもですが、選ばれたら責任を持ってつきあいなさい、と。ただし、子どもとのやりとりなり、何か問題があれば担当の保育士や指導員、園長にフィードバックしなさいと伝えています。残念ながら専門職の人は人気がいま一つ。子どもがつきあいたいと思うのは、地位がある人でも偉い人でもない、断然、普通のおじちゃん、おばちゃんの雰囲気の人です。子どもはその嗅覚をちゃんと持っている。指導される、教育されるばかりだと息が詰まってしまうから。子どもたちは、本当のお父さん、お母さんから離れて好きでもない所に連れて来られて…それなのに、こうしなさい、ああしなさい、自立のためにはこんなことを…そんなことばかりだと辛いですよ。やはり子どもだって自由にいたい。

横堀 「ふつう」のやりとりをしてくれる人が施設の中にいて、子ども自身が自然にその人に近寄っていく、そんな文化がある、ということですね。

安川 学校から帰って指導員の待つ部屋にまっすぐ向かうのではなく、事務所のお姉さんと学校のこととか普通のお喋りをして…それが部屋に入る前のクッションになっている、そういうこともあります。帰ってすぐ“指導”では、子どもは息苦しくて仕様ががない。私は現場を離れて8年経ちますが、子どもをトコトン甘やかすお爺ちゃんになりたいと思っています。

横堀 ありがとうございます。子どもに囲まれた、先生の好々爺ぶりが目に浮かぶようです。では、西田先生お願いします。西田先生は情緒障害児短期治療施設 愛育園で医師として園長としてご活躍です。

「専門性・非専門性が合わせ鏡のように…」
— 個人の中にもある“周辺の人々”



西田 私は、少し違った見方で“周辺の人々”を捉えています。情緒障害児短期治療施設(以下「情短」)で働くスタッフは、ほとんどが専門職です。医師、看護

師、心理療法士、保育士、児童指導員…いわゆる資格を持った人たちで、それぞれの職種が専門性を発揮しています。しかし、子どもと対峙する時にその専門性だけがモノを言うのかと言えば、私は決してそうではないと思っています。治療の専門性には狭義と広義の二つがあって、知識や資格に裏打ちされた専門性は狭義のものに過ぎません。例えば、私は「医師」という専門性を持っています。狭義のものは、薬を処方するとかX線写真を撮るとかで、それ

は他の職種にはできません。ただ、子どもを治療する時に、この狭義の専門性だけでこと足りるのかと言うと、決してそうではありません。以前、ある100キロ超の肥満児がいました。「このままじゃ死ぬぞ。何かスポーツをしたら」と言う、「じゃあ、格闘技ならやる」と。そこで、昔自分がやっていた柔道をその子に教えることにしました。週3～4日、診療が終わった夜6時から8時まで、近くの中学校の道場を借りて。すると無口だったその子がポツリポツリといろんな話をするようになりました。やがて大人の私を倒すという目標を持ち、それは、彼にとって“父親超え”というテーマに向き合うことにつながったのです。この柔道を通したやりとりは、狭義の専門性から見れば非専門性の部分に属しますが、専門性・非専門性が合わせ鏡のようになって、はじめて意味を持つのだと思います。

横堀 つまり、個人の中にも“周辺の人々”の要素があって、狭義の専門性と非専門性の部分とが総合的に子どもに関わることで意味を持つ、先生の場合は子どもの治療にも寄与するということですね。それが広義の専門性だと。

西田 これは個人の中の話ですが、個人を組織に置き換えても同じようなことが言えると思います。情短は専門職ばかりと言いましたが、それぞれに明確な役割があります。役割を持つということは、それぞれが自分の立ち位置で子どもにきちっと向き合わねばなりません。それは仕事ですが、しんどい。でも、そのしんどさは子どもも同じで、一人の担当の専門職との間に起こるしんどさのこぼれた部分を他の専門職が受け止める。そんな構造が必ずとある訳です。つまり、情短では固定した“周辺の人々”がいるのではなく、それぞれの状況や関係性の中で“周辺の(立ち位置になる)人々”がいる、と考えています。学校で言えば、担任の先生との間にあるしんどさを保健室の先生が救ってくれるようなものではないでしょうか。それと同じような構造があり、そこに意

味があることを職員全体できちっと合意できれば、一人ひとりの専門性を有機的に機能させることができていると思っています。もう一つ、愛育園ならではの特徵に「多文化」があります。情短は文字通り治療施設ですが、「施設内分級」と呼ばれる学校と不登校の子どものために教育委員会が設置している「適応指導教室」が併設されています。コアの部分は子どもの「治療」ですが、その周辺に「教育」がある。つまり二つの文化が響き合っている訳です。この多文化が子どもに良い影響を与えているという点で、施設内分級と適応指導教室の先生方も“周辺の人々”という文脈の中で捉えることができます。

注：上記「施設内分級と適応指導教室の先生方」については、第Ⅱ章P22～25を参照

横堀 それぞれスタンスの違う人の、それぞれの子どもへの関わりが全体として子どもの育ちを支えている、その構造こそが“周辺の人々”だと理解しました。ありがとうございます。続いて、河尻先生。先生は武蔵野学院、きぬ川学院、そしてこの(2014年)4月に福岡学園に赴任と児童自立支援施設でのご経験が長いのですが、先生にとっての“周辺の人々”とは何でしょうか。

「職員と子どもとの距離が縮まった」 —「職員の家族」がもたらすもの

河尻 私がこのテーマをいただいた時に真っ先に頭に浮かんだ“周辺の人々”は、実は「職員の家族」でした。児童自立支援施設というのは、他施設と比べると閉鎖的な部分が多く、子どもたちは会おう人も限定された、閉じられた生活空間で暮らしています。その



ような施設の中で、先人たちは支援の効果を求める上で“施設が醸し出す雰囲気の大切さ”というものを指摘しています。地域の豊かな自然や風土、施設内に息づく動物や四季の移ろいを宿す草花、そして子どもと職員の日々の暮らし…それらが一体となって醸し出されるものが子どもを育む、そういうものなしには子どもの問題は解決しない、という考え方で、全くその通りだと思っております。この“施設が醸し出すものを大切に”に加えて、施設に新しくやって来る子どもたちと出会うたびに心を新たにしていることがあります。それは、この子どもたちもいつかは大切な人と出会って家庭を作り、父親・母親となって家庭を守っていく—児童福祉施設である以上、そのことを忘れてはいけない、ということです。ここにはいろいろな問題を抱えた子どもがやってきます。どうしてもそれを“治す”とか“教育する”といった言葉が先に立ちがちですが、それ以前にそういう子どもたちの明日を、可能性ある未来を意識しながら子どもたちと接していかないといけない、と思っています。話を“周辺の人々”に戻しましょう。私は以前きぬ川学院という女子の施設にあり、小舎夫婦制で子どもたちを担当しておりました。私の息子は幼稚園～小学校低学年で、〇〇お姉ちゃん、△△お姉ちゃんと呼んで子どもたちに関わっていましたし、子どもたちも息子を可愛がってくれました。私も妻も、子どもたちの前で息子を叱ったり褒めたりもしますし、雑談の延長で息子が生まれた時の話をしたりとか…。子どもの抱える問題の解決につなげようと意図している訳ではありませんが、そんな他愛のないやりとりでも、何か子どもに伝わるものがある、と思っています。欲を言えば、そのことで家庭や親子というものを肌で感じてほしい、と。

横堀 なるほど。“周辺の人々”が「職員の家族」である理由がよく分かりました。今の福岡学園、以前の武蔵野学院ではいかがでしたか。

河尻 福岡学園は小舎夫婦制ではなく職員は通勤交代勤務なのですが、例えば行事の時などに職員が妻と赤ちゃんを連れてくることがあります。すると子どもたちは「こんな奥さんがいたんだ」と驚いたり、「赤ちゃん、何て名前ですか、抱っこさせてください」と言葉をかけてきたりします。これだけでも子どもと職員の距離は縮まっている訳です、家族を介して。武蔵野学院は小舎夫婦制ですが、私が職員の子ども（赤ちゃん）を抱っこすると泣いてしまうのに、その職員が担当している子どもが抱っこすると泣き止む、ということが普通であったりします。赤ちゃんにとってその子どもも家族の一員なんですね。そして、赤ちゃんを抱っこすることでその子ども自身の気持ちも穏やかなものになります。赤ちゃんの持つ力です。このように、家族と接することで「先生」というイメージが低減する、そういうことも結果的にあるのかなと思っています。ところで、横堀先生も「職員の家族」として多くの里親委託のお子さんたちと一緒に生活されたと伺っています。振り返ってみてどのような感想をお持ちですか。



横堀 そうですね。私は児童養護施設の職員をしていました両親のもとに生まれ、その後両親が立ち上げたグループホームで委託された子どもたちと一緒に、

河尻先生のお子さんと同じような立場で生活してきました。先日、評論家の芹沢俊介氏とお話する機会を得たのですが、「養育の現場を家族で支えている人たちというのは、まさに自分の家族を差し出して子どもたちを受け止める続けるというのを、生活の中で実践している人たちだね」というお言葉を頂戴しました。本当にそうだな、と私自身に重ねて思いました。実子という立場でホームを支えている一員だ

という気持ちがありましたから。でも、当時の子どもたちと会う度に、互いに影響を与え合って育ったんだ、「お互いさま」の世界だったんだ、と今では思っています。そして、そのお互いさまの間には「専門性」なんて言葉はなかった、普通の言葉でのやりとりだけがあった…そんな感覚が私の中には残っています。ですから、河尻先生の、赤ちゃんを抱っこして子どもの表情が穏やかに、というお話をうかがい、私も抱っこしてもらったそんな一人だったんだな、と思っておりました。…さて、ひと通りみなさんのお話を伺いました。ここで、ご質問などありましたらどうぞ。

● “子どもに私的な部分を見せること”の功罪

西田 では、私から。職員の私的な部分を見せる、という点についてですが、私は、自分の子どもが小さい頃、休みの日に園庭でバスケの練習につきあったことがありました。それを、施設内から見ていた園児が羨ましく思う訳です。「あっ、先生の子どもはあんなことをしてもらっていいな」と。また、似たようなこととして、情短施設では、一人ひとりの職員が受け持つ子どもは決まっており、ある職員が「親(役割)」の部分がある受け持ちの子どもに出し過ぎると、他の受け持ちの子どもの「同胞葛藤*」を刺激して、情緒的に混乱させることになる。そういう経験があったので、私は、私的な部分を見せることについてはなるべく控えるようにしていますが、その辺りはいかがですか。

*同胞葛藤…親の愛情を求めて、兄弟姉妹間に生じる心理的な葛藤

摩尼 こんな経験がありました。私がドルカスに来た当初の頃です。施設内でバルサンを焚くというので子どもたちを外へ、昼寝もさせたいというので私のマンションの部屋に連れて行くことになりました。すると子どもたちはドアの前でたちすくんでいます。その先に何があるか分からずに不安で。そこで、先に入って「怖くないよ」と。それほど家庭と

うものを経験したことがないのです。以来、ドルカスではいろいろなことを経験させています。普通の家庭に当たり前にある生活は、なるべく普通の形で経験させたいと。ですから、職員が子どもを連れてどこかに行くとか、泊まりはOKです。きちんとした計画と報告さえあれば。職員のご家族の方にもご協力いただいて。

河尻 職員が、不安定になった子どもから「お前はいいな、息子と楽しそうにして」と言われたことがありました。確かに、子どもに私的な部分を見せることが、子どもにはマイナスに働くこともあるかもしれませんね。

安川 さきほどのお泊まりの話は聖霊愛児園の前にいた施設が始まりでした。子どもが希望すれば家に連れて行こう、との提案に、一部の子どもだけにそういうことをやっていいのか、という反対意見も出ました。その時私は答えたのです。「大人が考えるより、子どもは違った見方をしているよ」と。具体的に言うと、小さい子どもを家に連れて行きます。すると行かなかった年長の子どもが「安さん、ありがとね」と。大人がきちんとした目的で行えば、大人が考える以上に子どもはちゃんと理解してくれます。あまり杓子定規にやろうとすると生活なんてできない。もちろん、子どもが傷つくといったマイナス面が出ないよう細心の注意は払いますが。職員が結婚して赤ちゃんを施設に連れてくることがよくあります。するとツッパっていた女の子が一生懸命に可愛がる…そんな光景を見てきた私には、子どもとの生活というのは多少公私混同があってもいい、自然なのがいい、とつくづく思います。

横堀 施設で一緒に生活しているスタイルと、西田先生のところのように、通所して接点を持つ施設とは少し違うのかもしれませんが。ところで、私からも質問です。安川先生、子どもがつきあいたいと思うのは「普通のおじちゃん、おばちゃんの雰囲気の人」とおっしゃいました。具体的にはどういう人た

ちでしょうか。

“周辺の人々”から学ぶ真の専門性とは何か

●専門性が「所有」である限り…

安川 それは、その人の優位性が「顔や態度に出ない人」のことで。聖霊愛児園はカトリックの施設ですが、神父らしい神父、シスターらしいシスターはダメ。園長らしい園長もダメで、子どもにとっては「園長くさい園長」となる。そういう、その人についている地位とか偉さとかが見えない人が「普通のおじちゃん、おばちゃんの雰囲気の人」です。子どもたちはそんなものとはかけ離れたところで生きています。だから、そういうものを振り回す人を余計に敏感に嗅ぎ分ける。子どもと話す時は、「子どもをどうやって受け入れるか」より、「子どもに受け入れられる大人になっているのか」と自問すべきです。子どもは大人をきちんと見えています。

横堀 こんなことを勉強してきた、これを経験した、そんなもので勝負してるようじゃダメだ、と。

安川 周りにくっついているものは、単なる「所有」です。いわゆる専門性、さきほど西田先生のお話にもありました狭義の専門性で勝負したら、子どもは離れていきます。ところがそういう人がどんどん増えている。子どもは変わらないが大人が変わってきている。専門性が「所有」に終始すればするほど、子どもは息苦しくなります。「所有」よりも人間そのもの、つまり「存在」を示すことです。

西田 専門性という明確なものにすがりつこうとするのは、逆に自分の中に危うさとか曖昧さがあるからじゃないでしょうか。私の場合ですと、医師という職種には確固とした立場性がありますから、むしろそこからどう広げていけるかが子どもとの接点につながると思っています。さきほどの柔道の話のよ

うに。一方で、資格や専門性にすがりつくことで自分のアイデンティティを保とうとする、そういう傾向は確かにあると思います。そういうものからどう自由でいられるか、が大事です。

横堀 専門性という名の鎧を着ては、人間性は伝わらない、ということでしょうか。

西田 私は施設長という立場で子どもを叱ることも仕事ですが、“説教部屋”から出れば施設長という鎧は脱ぎ捨てます。専門職の部分とそうでない部分をバイチャンネルで使い分ける。そして、そのチャンネルの幅が広いほど、子どもとつながることができると思っています。

横堀 真の専門性とはそういうことではないかな、という気がしてきました。河尻先生、いかがですか。

●“治す”より“与える”の視点を

河尻 子どもが育っていくには、その土台に子どもの養育に必要な環境が埋め尽くされていないといけません。しかし現実には、この子どもにはこういう指導が必要だ…私は「指導」という言葉は好きではありませんが…その指導のためにはこれこれの人を当てがえばいい、でこと足りるといった風潮があります。児童自立支援施設でも、子どものある部分だけを見て指導や教育をすることが職員に求められることだと理解している人が多いように思います。子どものどこどこを治すとか修正するだけではなく、この子どもの何が今まで満たされなかったのか、それを見極め何を与えるかを考えるべきだ、と。その与えるという視点が専門職の人に欠けている場合があります。そして、その役割は専門職でなくてもできることがいっぱいある。

西田 与えるという点では、専門職だけではなく“周辺の人々”ももっとクローズアップされてよいと。でも、その、“指導”か“環境”かのギャップはどこから来たのでしょうか。

河尻 養育者の焦点が、子どもの課題を治す、とい

うところに執着しすぎているからだと思います。逆に、子どもを育てる環境を整える、といった肝心の部分が薄くなってきています。また、児童自立支援施設の場合、そのほとんどが公立で職員は公務員という構図にも一因があるかもしれません。施設長は2～3年で変わり、中には児童自立支援施設は初めて、という施設長も少なくありません。職員の中には、希望に反して施設にやって来た、という人もいます。すると、問題を起こす子どもに対して問題を起こさせないように指導することだけにどうしても目が向きがちです。そういう体制的な問題も現実としてあります。

横堀 ありがとうございます。内海先生、これまでのお話を伺っていかがですか。



内海 先生方のお話はとても参考になりました。A子さんや掃除の人たちにしても、子どもと交流するご家族にしても、“周辺の人々”は総じてあるがままの

姿で、特に意識することなく普段の姿のままに子どもと接している、ということでしたね。関心を惹かれたのは、安川先生が「牧歌的だった」という表現をされたことです。児相もあまりうるさいことを言わなかった、と。翻って、今の専門職はどうでしょう。昨今では子どもとの関わりがとても窮屈になっている印象を持ちます。児童福祉施設では、特に虐待児の入所が増える中で「安心・安全」というものが重視されるようになりました。それはもちろん大事です。でも、その「安心・安全」が逆手に取られて、少しでも危険そうなものはその芽の段階で摘んでおく、濁りのあるものは微細なものまでも排除していくといった傾向があるような気がしてなりません。資格のない者が子どもを自宅に預かりご飯を家族と一緒に食べる—もし何かあったらどうする

んだ、家族は施設とは直接関わっていないのに子どもに口出ししていいのか、といった議論が起きやすい風潮が見受けられます。「安心・安全」を楯に冒險することを制限させる、窮屈な時代の風潮・空気に抗う手だてはあるでしょうか。現場での伸びやかさ、晴れ晴れと仕事ができる雰囲気作り、呼吸のしやすさといったものを作るための工夫などをお聞きできれば、と思います。

横堀 そうですね、私からもぜひ。最近の小規模ケアの議論の中で多く見受けられるのは、それぞれが「平等」にややこだわり過ぎて、独自性がなくなってきている、ということです。これでは、職員それぞれが特別で子どもとそれぞれ違う関わりを持つ、といった文化は育ちません。集団の非常に魅力のない面が出てきてはいないか、と感じます。また、「安心・安全」のための予防・防止という流れがとても強く、生活の柔らかさや多様性といったものが失われてきているのではないか、といろいろな現場と関わる中で感じてもあります。多様な人材が生きる現場を文化として作っていく—その流れのある一方で、現場には子どもの課題以外にも大人側の課題も山積しています。そして、閉塞感が漂い停滞している印象を受けます。この閉塞感は内海先生の言われる「窮屈さ」と同義だと思いますが、そこに少しでも可能性を見出さないと危機的状况に陥ると危惧しているわけです。この閉塞感を打破するためには、何が必要なのでしょう。

●信じること。原点に立ち返ること

摩尼 私は、信じることだと思います。他人が何と言おうとそれが本当にいいことならいい、と。そして、いいことはどんどん実行することです。皆が納得するまで話し合い、実行する。一方で、職員の自主性を重んじることも大事です。例えば里親支援相談員にしても、家庭支援相談員(FSW)にしても、経理にしても、その役割を与えたら、その人のこう

いうふうにやりたいという自主性はトコトン尊重しています。ダメとは言わない。やってみたらどう？と。その人がその立場で考えたことですから。その結果、例えばFSWはよく兎相に正論を理路整然とぶつけています。内心ハラハラですが、でも何かあったらその時はその時、と腹を括って自由にやらせています。

安川 「安心・安全」と言われて私がいつも思うのは、誰にとつての「安心・安全」なのか、ということ。リスクマネジメントなんて大人側のリスクを減らすため、と思えて仕方がない。本当にまずい時代になってきたと思います。大人だって曖昧に生きている。私の好きな作家の小田実も「人間みなチョボチョボや」と言っている。いい加減にすればよい、ということではないが、そういう人間の持つ曖昧さを認める余裕がないと窮屈で仕方がない。その上で専門性を高めないと、子どもまでも窮屈になります。

河尻 日々の雑務や対応に追われ、現場には誰がやっても同じ結果にしようとする暗黙のうちにラインを引いているところがあります。あの職員はOKでこの職員はダメ、ということが日常的に起こるものだから、ダメならダメにしましょうと。でも、大人がラインを引けば引くほど、その線から一歩でも踏み出した子どもは指導される訳です。そうさせているのは大人の方だと気づくべきです。そして、そういうことが子どもにとって果たしてどうなのか、大人が皆同じように接しているのか、という原点に立ち返るべきです。既定のものをこの子どもにとっては？と疑いながら壊していく、その視点と勇気が必要だと思います。子どもにとっていちばんありがたいのは、子ども一人ひとりを大人の皆が大切に、僕の扱いはこうである子の扱いはこうで、とそれは違って当たり前、というのが理想的な姿だと思う。でもなかなかそこへは行けない。その一因は、先ほどの大人側のリス

クを減らすという理屈が前面に出過ぎることにあると思います。

● トップの役割

西田 一つは、トップが現場のそういう無茶を許すような文化を作っているかどうかです。私は偏屈でやりたいようにやってきましたが、若い人を見ると失敗を恐れる嫌いがあります。「失敗してもいいからやってみよう」といった懐の広さ、新しいことにチャレンジできる気風、そういう文化を作ってあげる。私たちの情短は公立なので、マスコミに対してもどうしても防衛的にならざるを得ず、萎縮してしまう面があります。また行政の内部からもいろいろ言われます。そういう施設の外側のことは、園長たる私が引き受ける。そうすることで、現場が本来の業務に本来のかたちで専念できるように、と腐心しているつもりです。

河尻 職員について言えば、子どもに「どうしたの、何があったの？」と疑問を呈する人も必要だし、「よく分からないけど、とりあえずご飯食べようよ」と言ってくれる人も必要です。子どもはいろんな大人に接して成長していきます。大人のそれぞれの役割を最初からきちんと整理して揃えていくことは難しいけれど、バランスのある人的環境は大事だと思います。その上で、トップは職員に対しても、あなたにはこういうところがあるのでこういう働きをしてもらいたいと明確に伝えないと。ただ経験の長い、あるいは子どもに対して影響力のある職員だけが重要視されたら、偏りが出てしまう。

西田 児童福祉は、結局は人にいきつくところがありますから、私はこれぞという人間をどう集めてくるかにも注意を払っています。行政の中に面白そうな人がいるから、一本釣りしようとか。そういう風に戦力を新たにして組織を活性化させる、これも私の仕事だと思っています。

摩尼 少し話はズレるかもしれませんが、ドルカス

での窮屈さの多くは、県と児相に
関係しています。例えば、ドルカ
スは25人定員ですが、緊急の場合
は26人になっても受けていまし
た。その26番目の子どもを決まり
だからとよそに移すというときには、抵抗しました。どうして8カ
月の子どもを平気でよそにやるの
ですか、それでも児童福祉と言え
るのですか、と。それが正しいこ
とだと信じるからです。そんな見



解の相違は日常茶飯事のことで、言うべきことは言おうと県や児相には結構抗っています。

安川 私は抗いっ放しでしたね(笑)。そのケンカの仕方子どもや職員にずっと言ってきたことがあります。「弱い相手とケンカするのはいちばん情けない。強い相手とやれ。そして自分ともケンカせよ」と。私も児相なり県なりとケンカする際は、「本当に自分の施設は子どものことを大事にしているか、職員のことを大事にしているか」と自分とケンカします。すると、そんなに強気で言えなくなります。学校の校長先生ともよくケンカした。でも「自分たちのできないことを学校に押しつけていないか」と一応考える訳です。職員に対しても、じゃ自分はどうなの？と自問自答してから子どものことを言っていこうよ、と。それは一貫していて、そのできない人はこの仕事に向いていないと思います。そういう人には丁寧に転職を勧めます。逆に、この人は、と思った人は絶対辞めさせなかった。園長時代には、「園長、結婚でもしないと辞めさせてもらえないんですか」と喰ってかかれたこともあります。内海先生の「呼吸のしやすさのためには」という質問に答えるならば、トップも職員も“素のままを出す”ということですね。馬鹿さ加減も含めて。園長はあんな人だったの、と呆られても。すると職員も楽になれる。言いたいことが言える。職場の風通しがよ

くなる。もっとも「失敗も弱さもしょっちゅう晒け出しているは、子どもにバカにされる」と言われたこともありましたが。

摩尼 基本はうちも同じです。ドルカスでは、そもそも“先生”と呼ばせていません。子どもにも、職員同士でも。皆“さん”付けて、子どもは私のこと「マニちゃん」と。最近歳のせいがお昼過ぎに眠くなるのですが、事務所で「眠い、眠い」と言うと、職員が「じゃ、眠気覚ましあげます」と仕事を回します。そんな上下関係に囚われない風通しのよさがあります。「摩尼さんっていい人」と思われるのはありがたいですが、「おかしな人」と思われてもいいや、位の気持ちでゆったりとやっています。それが現場の伸びやかさに通じているのかもしれない。何よりも、そもそも職員の質が良いのだと思います。採用の際の面接で「自分の目は節穴だ」という経験をした私は、以来、必要な人数を原則、先着順で採用しています。応募した人たちはドルカスを選んでくれたのです。その人たちのやる気を信じています。

●職員の“気付き”を促す

河尻 先ほど申し上げた通り、私は子どもに「与えること」が仕事だと思っています。でも施設では、「何を与えないか」の議論の方がはるかに多い。で

すから職員には一人ひとりの子どもの、一つひとつのケースと対する時に、何か与えるものはないか、何かチャレンジできるものはないのかという意識を持つことが大切です。暴力がなかなか収まらない、このままだと措置変更、という子どもがいました。いや、簡単に措置変更なんて口にしちゃいけない、何とか頑張っ見ていこう、ということになったのですが、そこで何をしたかという、その子が育った乳児院と児童養護施設の職員に来ていただいてその子と話をしてもらったのです。乳児院の職員の方はアルバムを作って持ってこられて、「あなたはこんな子だったのよ」ということを伝えてくれました。その方は、指導するという立場を離れて、その子を知る一人の人間としてその子に一生懸命話しかけてくれた。この出会いは、担当職員が絞り出した一つの解に過ぎませんが、その子には確かに何か伝わったし、職員たちも「一人ひとりの子どもを大切に、というのはこういうことなんだ」という実感を持つことができたと思っています。このように、既成概念に囚われない柔軟な発想と、職員の“気付き”を促すことが大事だと思います。

横堀 なるほど。現時点での“周辺の人々”ではなくて、時空を遡っての“周辺の人々”ですね。

安川 ある人の言葉を思い出しました。「専門性というのは不確実性に対する忍耐力だ」。こんな不確実な状況の中で自分たちがどれだけ忍耐して子どもに寄り添っていけるか、自分の度量、覚悟が問われているのだと思います。私は、行政や学校に対して枠を広げるように求めてきましたが、同時に、日本にいる限り殺されたり飢え死にしたりすることはまずないから、と自分自身も枠をはみ出しながらやってきた。小さい枠にはめこもうとする自分を壊しながらやってきた。それでも子どもは守りきれない。だからこそ自分のできることを精一杯やる。そう信じてこれまで愚直にやってきましたが、一つ言えることは「一見マイナスに見えても、その裏側には必

ずプラスがある」ということ。だから人生捨てたもんじゃない、と若い人たちには言っています。児童福祉の仕事というのは、そう思える仕事です。

横堀 ありがとうございます。話は尽きないのですが、時間が来てしまいました。私から最後にひとこと申し上げると、D.W.ウィニコットの考え方でよく用いられるものに「人間は在る(Being)という存在感覚の上に、する(Doing)が乗っている」があります。よって、「“Doing”から“Being”へ」と言われたりします。「専門性」がメニューとして見えるカタチでの“Doing”だとすれば、それはもしかしたらすごく薄っぺらなもので、自分の中に専門性を抱えつつも子どもに対してどう在るべきか、という“Being”の部分が成り立って始めて子どもとの生活の場は営まれていくのだ、と改めて思いました。安川先生も「所有よりも存在が大事」と。社会的養護は混沌とした中にあり、なかなか将来まで見通す光が見出せないのが現実です。ここはやはり、子どもと生活するという原点に立ち返るしかありません。そこには、いろいろな専門職の人や“周辺の人々”が交差し様々な空間を織りなしています。その日常の中に、大変さもあるけれど可能性もあるよね、と一条の光を見出したいと思いました。「包む・育てる」—何を包み、何を子どもたちと一緒に作っていくかについて、改めて問うことのできた座談会だったと思います。本当にありがとうございました。

内海 考えていた以上に視野を広げることのできた座談会でした。“周辺の人々”を考えることは、「多様なものをどう受け入れていくか」や「リスクというものをどう引き受けて職員ののびやかさに活かすか」といったことにもつながること、また、“周辺”には横軸だけではなく縦軸もあるということが分かりました。どうもありがとうございました。

編集後記 これからの“厚み”のために

本号は根本的な困難を抱えていると、企画当初から自覚していました。

「専門家はもちろん重要だけれども、子どもは有資格の専門家による関わりだけで救われ、よりよく育ち、生き延びていくわけでは決まらずだ。むしろ、そうではない“普通”の人、あるいは日ごろ養育の中核にいないとは見なされにくい人たちが織りなす雑多な関わりのおかげこそが、子どもの育ちに大きな意味をもっているのではないか。そこに焦点を当ててみよう」——これが企画の趣旨でした。しかし、いざ執筆となると、そういった“周辺”の方ご自身の語りや文章を得るのは難しいと予想されました。実際、執筆陣はやはり心理、福祉、精神医学、あるいは文筆の専門家ばかり。これは矛盾では…？

矛盾と言えは矛盾でしょうが、ある程度は必然とも思われます。第Ⅳ章の「特別座談会」でも語られていましたが、印象深い“周辺”の方たちは、紆余曲折を経つつも総じて今は特段の作為なく子どもと接しておられるようです。立ち居振る舞いがあまりに深く自然なものとして身につけているため、その意味を意識化し（つまり突き放して）、言葉にするとという作業は馴染みにくいのかもかもしれません。

なので、そういう作業も専門家の役割の一つと考えた方が良いでしょう。各分野の知識や技術に習熟しているだけではなく、子どもをとりまく“普通”の人、あるいは“周辺”の人々の意味深

い関わりをそれとして見極め、価値づけ、さらには支援の中にそっと組み込む。その力量のある者が真の専門家であるように思います。ご執筆頂いた先生方にはその一端を示して頂きました。本特集がその力を養う素材の一つとなるよう願っています。

“厚み”を謳ったわりにページ数はいつもより若干少なく薄めとなった78号ですが、その分、今後読者の方々がそれぞれの“周辺の厚み”をここに付け加えていって下さればと思います。いわゆる“周辺”の方々の視点や提案が場に新鮮味と活力を与え、事態を推進させるという体験を私も職場においてします。そして実は、本誌編集会議においても同様の体験をします。本号の企画においてはとりわけそうでした。そういった体験が各所で増えますように。



担当編集委員 内海新祐

次号のお知らせ 第79号特集「社会的養護と子どもの貧困」(予定) 2015年10月1日発行

〔編集委員長〕

横堀昌子 青山学院女子短期大学
子ども学科教授

〔編集委員〕

有村大士 日本社会事業大学社会福祉学部
福祉援助学科 准教授

内海新祐 児童養護施設川和児童ホーム
臨床心理士

大竹智 立正大学 副学長

曹徳善 社会福祉法人 愛神愛隣舎
児童養護施設 施設長

西田篤 広島市こども療育センター 心療部長
情緒障害児短期治療施設 愛育園 園長

宮坂明宏 (公財) 資生堂社会福祉事業財団
常務理事

(敬称略・五十音順) 編集事務局：豊福晶子

MOTHER AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

VOL.78 2015-4

世界の児童と母性

年2回発行

2015年4月1日発行

編集・発行者

公益財団法人 資生堂社会福祉事業財団

〒104-0061 東京都中央区銀座7丁目5番5号

電話 03-3574-7408

ファクシミリ 03-3289-0314

URL <http://www.zaidan.shiseido.co.jp>

印刷所 成旺印刷株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2丁目1番28号

再生紙使用

MOTHER
AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD

公益財団法人 資生堂社会福祉事業財団
